
破かれた絆 - First message of die -

y . s

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破かれた絆 - First message of die -

【Nコード】

N1340G

【作者名】

y.s

【あらすじ】

この屋敷にいるのは何人なのか？天貝家で行われるパーティーに、寺田正和は足を踏み入れる。とても、豪華な晩餐で、楽しい会話。それで終わるはずだった……。繰り返される殺人。誰からか分からない怪しげな無言電話。一人一人消されていく……。メルデイオールという名の魔女とは？そして、誰がこの事件の犯人なのか……。？そもそも、なぜ、このようなことを？あるがままの、真実を、どうか、受け止めてみてください。

Part 1 Welcome to Amagai party (前書き)

この物語はフィクションです。実際にはなんの関係もありません。

文章力が非常にありませんので読みにくいと思いますが、ご了承ください。

Part 1 Welcome to Amagai party

この世界の信じられるものは何ですか？

友達ですか？先生ですか？
母親ですか？父親ですか？

いいえ、違います。

最後は、必ず自分自身です。

・少女のノート 115ページ

登場人物紹介

・ 寺田 正和 まさかず

・ 天貝 炎宿魔 ひやま

・ 天貝 立向路 たむろ

・ 天貝 信他 しんた

・ 天貝 淘汰 とうた

・ 天貝 揺決理 ゆかり

・ 天貝 狩煉 かれん

・ 櫻田 美由紀 みゆき

・ 日陰 盛多 せいた

そこは、広大な庭。幾重にも見える万華鏡のように光り輝く花たち。まるで、現世から隔離され、自分だけこの場所に來られたのではないかと錯覚してしまうぐらいだ。

普段なら、そんな優雅なことも口ずさんでしまう綺麗な場所でも、今はそう思うことができない。ただ、雨に打たれながら、周りにある花を無造作に踏みつけて、走ることはできない。振り向けるはずがない。振り向いて、もし少しでも走る速度が落ちて、「アイツ」に捕まるようであれば、笑い話どころか、息をすることさえ、かなわなくなるのだから。だから私は走る。ただ、ただ、走る。死にたくないと思う本能だけが、私を突き動かす。

今日のために特注したドレスが、こんなにも恨めしいと思ったことはなかった。

躓きそうになるこのハイヒールが、こんなにも脱ぎ捨てたいと思つたこと、今までにあつただろうか？あるわけがない。一番氣に入っていたにもかかわらず、

こんな所に來なければ。こんな所に生まれなければ。こんなことをしないで済んだのに……。なにかもが恨めしい。なにかもが馬鹿らしい。

「……もう……。いいや。」私は走るのをやめて、振り返つた。「アイツ」に。「もう、いい。なんか馬鹿馬鹿しくなった。どうせここから逃げられない。どうせみんな死ぬ。最初から知ってた。どうせみんな……。ここで死ぬんでしょ？ねえ、そうなんでしょ？

教えてよ・・・

メルディオール様・・・。
「

今まであいつ呼ばわりしていてごめんなさい。信じていなくて、ごめんなさい。

だから、せめて・・・痛みのないように殺してください。

痛いのはもう嫌。苦しいのはもう嫌。熱いのはもう嫌。寒いのはもう嫌。

嫌・・・。嫌・・・。嫌・・・。

早く殺してください。

なんでもいいから、痛みのないように、殺してください。

もし、それが、できないのであれば・・・。。。。。。。

お前が死ね!!!!!!!!!!!!!!

お前が消えろ!!!!!!!!!!!!!!

お前が死んでしまえ!!!!!!!!!!!!!!

そして世界は、幕を閉じる。

9つの世界は、光の刺すことのない、闇へと誘われる。

生きるも、殺すも、全て、メルディオール様の手に、委ねられる。

P a r t 1 W e l c o m e t o A m a g a i p a r t y

平成21年 10月2日。

ピーピーと、無機質な音が、部屋中に響いている。近くにある目覚まし時計がなっているのだ。
時刻は8時20分を指していた。部屋は、ブラウン管の小型テレビ

に、一回り小さな冷蔵庫。雑誌が数冊。小さなちゃぶ台がひとつと、ひとり暮らしであることが容易にわかる、そんなようなところだった。よく見ると、部屋の壁のあちこちに、メモ用紙が貼つてある。へ3日に請求4万㍻だとか、へ5日に炎宿魔と㍻等であった。

忘れないように家中にメモを張っているのだろ。なんともだらしない光景だ。

「ん、ふあ。」

当の本人は、幸せそうな顔で、目覚まし時計の音が、まるで鳴っていないかのように、すやすやと眠っている。

バン！

突然激しい音がしたことと思えば、目覚まし時計の音が止んでいた。寝ている「正和」が、その音を止めたのであろう。それでも本人は起きる気配なしであった。

彼は寺田 正和。今は寝ているため、分からないが、むつつり顔への字口で、やや無愛想な印象を受ける。顔立ちはよく、女性からはよく話しかけられるものの、相手一人というより、大人数でいた方が好きなものだから、彼女は今はいない。年齢は23歳だが、そうは思えないなんとも子供っぽさが残っている。よく言えば無邪気。活発。悪く言えば、そのもの馬鹿、そんな人だった。

「んぐあ。」

目覚まし時計が鳴り止むと、部屋は、正和の寝言だけが空気を作っている。

一向に起きる気配はない。掛け布団に包まり、窓から射す光を遮ろうとしている。夏は本格的に終わり、ちょうど秋になっているこの時期は、朝でもちようどいいぐらいに涼しく、包まっても十分に寝ていられる気温だった。

それが幸か、不幸か、正和を全く起こさなくしてしまっている。土日、祝日ならば、このまま、まどろみの中に意識を落としたままだが、生憎今日は仕事があるようだった。

ピリリリリリ！

と、機械的で簡素な音が、鳴る。

正和のちょうどすぐ近くにある、携帯電話から、その音は鳴っていた。その音で、ようやく正和は起きたようだった。

掛け布団から、顔と腕だけを出す。携帯電話を開き、液晶を確認する。「日陰 盛多」と書かれている液晶画面を見て「はあ」。だる。「と一言漏らした。

ピツ！と携帯電話独特の音を出す。

「はい？もしも」まだ寝ぼけているのか、

正和は半分ふざけたように返事をする。「……………」電話の相手は無言だった。

いや、

「はあー。」

という大きなため息を漏らしていた。

「今、何時か知ってるか？時計が読めないのかい、正和さんは。」

電話の相手は、呆れたように茶化している。本気で呆れているのだ。「うーん……今度からもっとでっけえ音がする目覚まし買っな。

起きねーわ。いつひっひっひっひ……。」「正和は、適当に2、3言葉返して、電話を切る。「はあー。めんどくせえ。」「ようやく掛け布団から出て、無造作に髪を弄りながら立ち上がる。顔立ちはいいのに、整えようとしない。服もこだわらない。周りから、「もったいない」と、よく言われているらしい。

それでも、お気楽能天気な性格は、全く変わらないどころか、日に強化されていつている。適当に顔を洗い、すぐに服を取り替える。（と、言っても簡素なシャツの上にジャンパーを羽織るだけだ。下も、おしゃれの色気もない普通のジーパンだ。）

そうして、ようやく家を出る。起きてからのここまでの時間、わずか7分。なんとも簡単な朝だ。正和のアパートは、小さな簡易型となっていて、101、102、103、104、と、じつに4部屋しかない。

お風呂、トイレ共通というのは、どこにでもあるだろうが、なにによりコンセントがひとつしかない。家賃、管理費、が激安なのと、電気代節約となるぐらいしかメリットがない。

だが、普段は寝ることしかない正和にとつては、とても過ごしやすい所だった。正和が、鍵をかけようとしていると、「正和さん。

一緒に行きませんか？」

隣の、102号室に住んでいる櫻田 美由紀だ。ちなみに、正和は、103号室だ。「ん？ああ・・・いいぜ。って、お前も遅刻かよ。」

「今日はたまたま遅く起きちゃって。昨日寝るのが遅かったから・・・。って、早くいきましよう！また編集長に怒られちゃいますよ！特に正和さんは、もう10回連続遅刻なんですから！」

「へいへい。」アパートの扉の前で話し込み、ようやく仕事場に向かった。

櫻田 美由紀は、正和の仕事仲間で、後輩に当たる。が、仕事ぶりで言うと、正和より断然上で、社内でも褒められてばかり、遅刻は、今日が初めてなくらいだ。

モデルのような顔立ちで、社内ではかなり上位にいる。（男共の勝手なランキングだが。）ショートの髪にロングスカート。引き締まった胸元は、多少色香がないと言われるが、むしろそれが良いという男性もいる。

美由紀は、すぐに帰ることが多いため、（仕事は、すぐに片付けてしまう方なので、滅多に残業などはしない。）こうして、異性と二人で歩くことも少ないのだ。無論美由紀は少し胸を躍らせているが、残念ながら正和は全く意識していない。話しかけないと、まるでいないかのように一人でづけづけと、歩いていってしまう。

「えっと・・・そ、そういうえば正和さんって、いつも真面目にやらないけど、クビとかにはされないんですか？」

「なんだその質問・・・。まあ、あそこに入ったのは盛多のおかげだからな。仕事は期限内には終わらせているぜ？一応な。時間あるときは寝てるけどな。」

正和は、適当に返す。「へー、そうなんですか。」と、美由紀が返すと、しばらく無言の時間が続く。

大人数のときは元氣なくせに、1対1になると急に喋らなくなる。

(うう・・・会話続かない・・・)

その後美由紀は、何度か話してはみたものの、正和は、適当に返事をして、終わらせる。この繰り返しだった。そんなことをしているうちに、仕事場に着いてしまった。「うげえ。着いちまった。ああ・・・」

悪態を付く正和に対し、「ああ・・・しんどい・・・」と、涙目になる美由紀が、なんだかとっても滑稽に見えた。

正和と美由紀の仕事場は、外から見ると、高層ビルとまではいえないが、とても立派なものに見え、20階建ての大型ビルそのものだった。だが、実際に使っているのは12階だけだ。他の階は、正和と美由紀の仕事とは、関係のない人達がいる。ようするにオフィスが12階にあるだけで、このビル自体を所有しているわけではない、とても小さな有限会社だ。ビルに入ると、1階は誰もいないかのように、静まり返っている。大きなホールになっていて、正和と美由紀が歩きたびに、コツツ、コツツ、という音が、響いている。正和は、特に何も思わず、エレベーターのボタンを押す。

ガゴン、ガゴン、チーン。

という音が、1階のホールに響き、エレベーターの扉が左右に開く。2人は、無言のまま乗り込むと、美由紀が「12」と書いてあるボタンを押す。そうして、エレベーターは12階に向かっていった。

1階のホールに、ぽつりとつぶやく男がいた。男は、正和と、美由紀が乗り込んだエレベーターの入り口をじっと見て、なにやらつぶつぶつと言っている。

「・・・・・・・・・・ア・・・・・・・・・・う・・・・・・・・・・。」

どこの語源か分からないような、おかしい言葉を発している。やがて、男は、携帯電話を取り出して、電話の相手にこう言った。

「ア・・・・・・・・・・が・・・・・・・・・・い・・・・・・・・・・家・・・・・・・・・・だ。」

そして、男は携帯電話を落とした。

いぶびよしぐぐぐちや・・・

おええええ・・・

それと同時に、男も、口から血を大量に吐き、崩れるように倒れていった。

さきほどと同じ、チーンという音をたてて、12階で扉が開く。正和と美由紀は、少し歩いて、目の前の金属のドアノブに手をかける。「う、まずい!」「え!?!」

正和はそのドアから飛び退いた。ドアの先には、

「まあーさあーかあーずうーくうーん?」と、低い声を出す日陰盛多が立ちはだかっていた。

盛多は、目の前の美由紀と正和を（特に正和）睨み付けている。

「いやあ、ちよつと待てつて。な?人間なんだからなあ、遅刻すんのは当然だろ?失敗なんて人間誰でもすんだから。な?それに、俺が遅刻すんのは日常茶飯事だろ。んだからよ、今日だけこんなに怒んのは筋違い……ってことには……ならないっすかね……?」
「……………」

盛多は黙ったままだ。これはまずい、と思ったのか美由紀は謝りだした。「あ…………えつと、すみません!」

焦り顔で、依然として言い訳を述べている正和。呆れ顔と、怒り顔でそれを聞いている盛多。困り顔で何度も謝っている美由紀。周りの社員は、

「うん、いつもどおりだ。」などといって笑っている。よくこんなんでクビにならないものだ。

一般の会社だったら今頃路頭に迷っていることだろう。美由紀は別として。「はあー。早く溜まった仕事終わらせちまえ。わかったな？」

馬鹿馬鹿しくなったのか、盛多は、手を振りながら自分の机に戻っていく。

「うお！さすがだな、編集長さんは！」なんて上機嫌になった正和に追い討ちが刺す。盛多が、ニコツと正和に向かって微笑む。正和は、それだけで盛多がなにを言うか理解した。というより、いつも言われている言葉をまた言われるのか・・・という気分になった。

「正和くんは、お給料いらないんだよね？んじゃあ、・・・減俸なあ？正和。」

うん、これもいつもどおり。周りはそう、ここの中で呟く。なんつーいつもだ。

「おおおおい！やめろおおー！これから、どうやって暮らしていきやいいんだ！？俺はここで貰った金でギリギリ今の生活を維持できてんだぞ？これ以上減らしたら生きていけねーだろー！」

「知るか。」

ぴしゃりと切る盛多。それで、言い合いはお開き。うん、いつもどおり、いつもどおり。「勝手にいつもどおりにすんな！」心の叫び、虚しく、周りは笑ってばかりだった。

正和、美由紀、盛多の仕事場は小さな雑誌の編集部だ。社員はそれでも、15人と中々多い。「G S & B S」（ガールズ & ボーイズ）という雑誌を手がけている。

名前からすると、ファッション雑誌か、アイドル雑誌のような印象を受けるが、実際は週。大衆のような、ニユース全般を掲載している。

内容は、こう言うては何だが、三流とはいかないまでも、一流とはとても言えない取り上げ方だ。

記者の自己異見が多いため、偏った意見しか聞けない。

そんな記事ばかりだ。人気のない要因のひとつと言える。

だが、正和と美由紀が作る記事だけは色んなソースを多角的な面で検証したりしているので、こちらは受けがいい。

ただ、やはり名前のせいで、この雑誌を手取る人はあまり多くない。

逆に、若者が雑誌の名前についつい手をつけて、評判が悪くなる、といったところだった。
ただ、会社自体は他のことで黒字を収めているので、あまり気にしていないようだった。

最近「ピックアップ」として取り上げている記事は・・・、

「天貝家が謎の集団自殺!？」

事件の裏側にあるものは?。」

編集者・寺田 正和

・櫻田 美由紀

編集監督

日陰 盛多

「うへええええ……だるい……。」

正和は、相変わらず不評を漏らす。机の上に上半身を乗せ、なんともだらしない格好で横たわっている。

「ほら、正和さん！この記事終わらせちゃってください。はかどつてないじゃないですか！」

美由紀が写真がプリントしてある紙を正和に投げやりに渡す。正和は適当に返事をして、紙を受けとると、なんと自分の机の中から、本を取り出すと、流し目で読んでいった。

周りは呆れてばかりで、注意しても何も効果ないことは、何日も前から知っているので、注意することさえしない。

正和は、会社来ると、最近の本ばかり読んでいる。

仕事をするつもりはないらしい。盛多は、何も言わず、黙々とパソコンの前で記事をチェックしている。

日陰 盛多は、バリバリの営業マンといった感じで、正和とは正反対だ。年齢は31歳で、まだ独身。

恋愛などにはあまり興味を持たないらしく、彼女は、この年にして

一人できたぐらいだ。

だが、3年前に別れて、今は一人。仕事ぶりは中々のものだが、こっちの方はめつぼう弱いみたいだ。正和とは、高校のときの先輩だと、いつても7年以上が離れている。

正和は、部活動でサッカーをやっていた。中々の名プレイヤーだったが、本人は趣味で入っただけなので、サボってばっかだ。

盛多は、その高校の部活動のOBで、何度か教えに来たときに、正和と仲がよくなった。そして、月日が流れ、たまたま、正和と再会した。路頭に迷っていた正和を、盛多の推薦で、この仕事場に招待してもらった。のだが、心配だったサボり癖、初日から勃発。

なんと3時間も遅刻してやってきたのだ。これには、盛多も、怒るところか、呆れるしかなかった。以降は、少しずつ治っていったのだが、遅刻癖、サボり癖は相変わらずで、盛多を悩ませてばかりだ。

ただ、仕事以外では、とても仲がいい。（仕事でも仲はいいが、怒られてばかりなので、仲が悪く見える）仕事帰りに、2人で飲みあうことが多い。

両方とも酒には強い方なので、かなり長時間いるようだ。もっとも、酔ったときはとんでもないことになるのだが……。

「正和さん。」

正和が、本を読んでいるところを、隣で見ていた美由紀が、声を出す。

「んだよ？」特に興味もなさそうに返事をする正和。

「一緒に記事書いているんですから、少しは手伝ってください！」
仕事場では、あまり話さない相手に、こういう風に注意するのは、かなり勇気のいることだ。それを見ていた、周りの社員は「健気だなあ。」なんて言ってる。

美由紀にとつては、とても恥ずかしいことだった。

だが、正和は「ああ……。」と言って、本を読むのをやめない。
周りは美由紀に、やめとけと、笑いながら声をかけている。だが、

美由紀はやめない。

「正和さん！いい加減にしてください！もう！」

美由紀は、正和が読んでいる本を、取り上げた。仕事をして欲しいという、美由紀なりのやりかたのはずだったのだが。

「返せ。」

「え？」

正和が、いつもでは、考えられないくらい低い声で、声を出した。
「返せ……。早く返せ！」美由紀は、始めてみる正和の形相に、驚きを隠せなかった。なぜなら、

正和は、いつもの正和とは思えない顔で、美由紀を睨んでいた。

その様子に、周りも動揺しているようだった。

美由紀は、この空気が怖くて、逃げ出そうとした。正和が、さっきから、しきりに返せといっている、本を持ったまま。

「と、とにかく！仕事捗らないから！仕事してください！」
そういつて、走って逃げ出す。

「おい、返せエエ！」正和は、その後を追う。
しかも、走ってだ。あの形相のまま。

「キヤアアアアアアア！」しばらく、端から見えていたらとても滑稽だが、本人たちにしてみたら笑い事では済まないぐらい危険な仕事場になっていた。

正和が、美由紀を、仕事場で、走って、追いかけている。
周りの資料や資材を壊したり、ボロボロにして。

「いやあああああ！」

殺人鬼にでも追いかけられているような声を出して逃げる美由紀。

「返せて言っているだろ！！」
相変わらず怖い形相で迫る正和。

「？」

その社員は、その本のタイトルを読み上げる。

「天貝家・・・連続、虐殺事件？」

社員は、物騒な本だな、と心の中で思った。

なぜか、盛多はその本をじっと眺めていた。
とても、悲しそうな、・・・・・・

嬉しそうな……目で。

数分後、騒ぎは収まったようだ。

正和は、膨れっ面で先ほどまで読んでいた本を、再開しているようだった。一方、美由紀は、すこし涙目で、仕事を再開している。

周りは、その異様な光景に、近づけずにいる。盛多は、何もなかったかのように、黙々と仕事をしている。

社内は、気まずい雰囲気のままだった。「はあ。」正和は、急にため息をつく。「早くおわんねえかな……。」一言、そう呟く正和。それを聞いた美由紀は、少しがっかりした顔をするが、すぐに仕事を再開する。

「そういえば……炎宿魔……なにしてっかな？」窓を見ながら、正和は、そう呟いたのだった。

同日 天貝家 本家屋敷

13時56分

「ええええええ！？嘘！？麻まの暖来ないの！？」

「ああ。アメリカから昨日連絡きたんだ。なんでも、むこうでは台風が近くてどの便も欠航なんだとき。ご愁傷様だな。」

家とは思えない、広い屋敷の廊下に、ポツンとある黒電話の受話器を片手に、小柄で知的そうな女性は、電話の相手に大声を出した。一瞬、近くにいたハウスメイドが、ビクツと肩を震わせる。

「ええええ。ただでさえ、人数の少ないのにまた減っちゃうの
うう？ もうどれだけ減れば気が済むのよ。」

「そうだな。んじゃ俺は伝えたからな。信他に伝えておいてくれよ？」

「はいはい。」

適当な返事を返して、天貝 炎宿魔は、電話を切る。

彼女は、天貝 炎宿魔。経済的に、最近大成功を収めている、天貝家の一人だ。年齢は20歳になったばかり。

小柄で、背は164センチ程しかない。昔は、それがコンプレックスだったが、今では何も思わなくなつたようだ。炎宿魔は、とても活発な女性で、見た目とは裏腹にとても活発。今でも鬼こっこなどをして遊びたいと、本気で言えるほどだ。

顔立ちは、どこにでもいる一般女性だが、耳のところに少し傷があるのが、少し目立つくらいだ。

月の形を模った、ペンダントが、少しお洒落だ。

「うん……ま、いつか。」

少し、腕組みをして、再び黒電話の受話器を耳に当て、ダイヤルを回す。

ジーク、ジーク、

という、独特な音を出して、受話器から呼び出し音が鳴る。

「はい？」

少し高い男、子供の声がする。まだ、子供のようだ。

「あ、もしもし？信他？あたし、あたし炎宿魔！久しぶり〜？元気にしてたかなあ？」

電話の相手は、少し軽いため息をつく。

「一昨日会ったばかりだろ？全く・・・。」

電話の相手、天貝 信他は、じゃ、切るよ、というと電話を切ろうとした。

「ああああ！ちよつと！待ってって！！なんで切ろうとすんのよ！話聞いてって！」

おおおい！信ちゃああん！」

「五月蠅い。で、なに？」

相手は、早く電話を切りたいという思いが、言葉に滲み出ている。

「本当に無愛想だなあ。まあ、いいや。あのね？今度さあ、家で・・・なんかやんじやない？」

あの・・・恒例の。」

信他は、ああ・・・と軽い返事を返す。

「ええ、と。なんか麻暖来れなくなったらしいよ？台風か、なんかで」

「・・・。」 相手は、特に興味も無さそうに話を聞いている。

「なんか、つまなくなっちゃたね？人数すごい少ないよ？ねえ、信ちゃん？」

「問題ないよ？姉さん。」

信他は、少しにやけながら・・・そついう言つ。

「へ？どうしたの？信ちゃ・・・。」

「何人減ったって……メルディオール様には……なんの関係もないよ？」

[illegible]

炎宿魔は、少し身震いする。なぜか、信他は、この話題になると、豹変するからだ。

「き、気持ち悪いよ！信ちゃん！もう、わかった？切るよ！？」

信他は、相変わらず奇怪な声で笑っている。

「はぁ・・・。」

気味が悪くなった炎宿魔は、相手の意思も聞かずに受話器を置いた。

なんだか、急に疲れた気がした炎宿魔は、すぐ隣にある洗面所へ向かった。

レトロで、高級感がある蛇口から、どぼどぼと、不快な音をたてて、

水がでている。誰かが蛇口を閉め忘れたのだろう。

炎宿魔は、両手で水をすくうと、バシャツと勢いよく、自分の顔にかけた。

少し冷たさがあり、とても心地良かった。

「はあー。」今日初めてのため息をついた。炎宿魔にとって、あれは初めてのことはないのだが、なぜかいつにも増して信他が、メルディオールに対して、俊敏になっているように感じた。

メルディオールに対して説明がいるだろう。

メルディオールとは、天貝家で恐れられている悪魔の名前だ。天貝家は、古くから、このメルディオールに対して、メルディオール

「様」とお呼びしろ、と教育される。なぜ？と聞くと、

「とても、偉大な方だからだ。」としか、言ってくれないのだ。なぜ、会ったことも見たこともない人を、

「様」をつけて、呼ばないくにはいけないのだろう、と、当時は疑問に思った子が多かった。炎宿魔も、その一人で、まだ小学生にもなっていない日には、

「ねえ、メルディオールってなに？女？ねえ、ねえ！」

と、天貝家の一人の使用人に聞いた。すると、

「お嬢様！」

「キヤツ！」突然、使用人が、炎宿魔の肩をつかんで揺さぶる。その時の、使用人の顔は、今でも忘れられない。

悲しみ、怒り、苦しみ、嘆き。その全てが入り混じったような顔になっっていたからだ。

「仮にも、天貝家の令嬢である貴女がメルディオール様を呼び捨てで呼ぶなんて言語道断ですぞ！わかっておりますかな！？」

炎宿魔は、この言葉の意味が理解できなかった。なんで！？どうして！？会ったことも、見たこともないのに！なんでよ！どうしてよ！

理不尽なことが、大嫌いな炎宿魔は、食ってかかろうとした。だが、「そう。じゃあ、もういい。」「お嬢様……」

馬鹿馬鹿しくなったのか、炎宿魔は、言葉を切ってしまった。

「じゃあ、せめて教えて！メルディオール様ってどんな人なの！？」炎宿魔は、膨れっ面をしたまま使用人に聞いた。使用人は、何度かうーん、という唸り声を出した後、

「わかりました。お話ししましょう。あくまでも、他言無用でお願いしますよ？」使用人は、そう答えた。

炎宿魔は、いつもの優しい顔に戻っていて、少し安心したようだった。

「それで？メルディオール……様っていうのは……何物なの？」こういう言い方をしたら、怒られるんじゃないかな、と思ったが、不思議と、それはなかった。

「……メルディオール様は、天貝家の守り神さまです。悪魔だ、といわれて恐れられてはいますけど、とても優しく、美しい方です。」使用人は、本当に優しい顔をして話していった。

「メルディオール様は、天貝家の事を、大変親身に考えてくれる方です。今の天貝家があるのはメルディオール様のおかげなのです。天貝家当主であられます、天貝 淘汰様が、1番頼りに、そして、1番愛されていた女性であられます。」

「ええー、おじいちゃんがぁ？気持ち悪いー。」炎宿魔は、とても嫌そうな顔をする。

「そんなことはありませんぞ。淘汰様はとても優しくて純粋な方です。気持ち悪くなどございません。」使用人はそう言うが、炎宿魔

にとつては、そうは思えなかった。気難しく、成績で子供の優劣をつける淘汰の事を、炎宿魔は良い印象を持っていなかった。

「おじいちゃんはどうでもいいよ！それで？」

使用人は、咳ばらいをすると、話を続けた。

「メルディオール様と淘汰様は愛し合っていたそうです。とても、とても。」

「へえー。」炎宿魔は、適当に返事を返す。

「このお屋敷の庭の花がとても好きだったみたいですよ？何度も何度も鑑賞なさっていたそうで。」

「ですが、メルディオール様は突然行方不明になられたそうです。」

「は！？」

突然話が変わったような気がして炎宿魔は、声を上げた。

「なんで、そんな急に。もっとロマンチックなのかと思ってたー！」

小学生にもなっていないのに、ロマンチックだなんて発言に対して、使用人は少し笑った。

「いえいえ、話はここからですぞ。」使用人は、目を細めて話しはじめる。

「メルディオール様を誰よりも愛されておりました淘汰様は、当然捜しました。日本中、世界中と……。その執念深さは誰にも真似出来ないものでしょう……。しかし、残念ながら、メルディオール様を見つけることは出来なかったのです。」

「……………」

炎宿魔は、それを、黙って聞いていた。

「諦められなかった淘汰様は、メルディオール様が再び戻って来られますように、自分の近くの者たちにメルディオール様を敬われるようにしたのです。」

使用人は、そこで目を塞ぐと、以上です、と一言呟く。炎宿魔は、

なんとも言えないしこりが残ったような気分だった。

「何それえ？つまんなあい。」

当然のように、使用人の話に不評をもらす。

「それは、失礼しました。お嬢様。さて、そろそろ夕食の時間にあられますよ。」

「はぁーい。」

炎宿魔は、不快な感情を残したままだったが、とりあえずそこで話は終わったのだった。

よく考えると、とてもおかしな話だった。

まず、その、メルディオールという人？が、仮にいたとしよう。

だが、おじいちゃんの・・・つまりおばあちゃんさえも、メルディオール「様」と言っている。なぜ？

おじいちゃんの愛人なのではないのだろうか？

普通に考えて、「様」づけで呼べるのだろうか？そのメルディオールに対して。

それと、なぜ自分の親たちでさえ、メルディオール様と言っているのだろうか？

使用人たちならまだ分かる。

なぜなら、おじいちゃんに強要されたで済むからだ。

だが、親までもが敬う必要はないのではないか？

もうここもで言ってしまったのだから、今頃隠すつもりはないが、私はメルディオールなんて

存在、信じるどころか、敬ってもいない。

だって、知らない人を敬えなんていわれても困るでしょう？会ったことも、見たことも、話したこともないのに。

話を戻そう。

人間なんだから、誰だって陰口や、いやみなどは、吐露するだろう。それは、人間として・・・と、言うのはどうかと思うが、仕方のないことだろう。誰だって、胸のうちのモヤモヤは、誰かに話したりして、憂さ晴らしをするのは、当然の摂理だ。

しかし、親は、それすらないのだ。

普通は、酒を飲んでいる間にでも不評を漏らすことは、あると思うが、

なんと親族の間にそれすらないのだ。

酒を飲んでいるときにでも、メルディオール「様」と言うのだ。どう考えてもおかしい。

「・・・・・・・・。」

洗面所で、顔を洗うだけだったのだが、炎宿魔は、考え事をしてしまったようだった。

しばらく、腕を組み替えたりしていたのだが、やがて、首を左右に振って。

洗面所を出て行った。

同日 正和、美由紀の仕事場

午後6時31分

人数は、半分以下の、5人にまで減っていた。ほとんどの者は、何分も前から、帰っていた。だが、「うへええっえ・・・・。」

正和は、相変わらず、机の上に上半身だけ乗せて、寝ているような

姿を保っている。

「お前・・・早く帰りたいなら、それ終わらせるよ・・・。」

見かねた盛多が、仕事をするようにすすめる。「んなこと言うなら帰らせてくれよう。編集長様ああ！」駄々っ子のように体を曲げて、ねだる正和。「駄目だ。早く終わらせちまえ。俺はまってっから。」「んなだから、女できねーんだよお。」「ほつとけ！」

正和は、カラカラと笑うと、盛多は、仕事机に戻っていった。ピリリリリリリッ、

という音が、仕事場に響き渡る。正和の携帯が鳴っているようだった。

正和は、面倒くさそうに液晶を確認する。

「・・・・・・・・。」

液晶画面には、「天貝 炎宿魔」と、書かれていた。

「もしもーし？炎宿魔か？」「あつ！正ちゃん！よかった、まだ起きてた。」「おい、今何時だと思ってんだよ。なんだよ、まだ起きてたつて！」「あはははははは。ごめん。んでさ、今度の日曜暇？つて、暇でしょ？」「ん？ああ・・・・。んだよ？」「あのさ・・・

こんどさ、家でなんかちっちゃなパーティーみたいなこと、やるのね？

よかったら、正ちゃんも、来ない？」

「・・・・・・・・。」

「ああ、行くよ」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

Part 2 The feeling of the collision (前)

相変わらずの汚い文章ですみません

平成21年 10月5日 午前11時34分

「晴れたね〜！正ちゃん！」「ん？ああ、そうだな。」ここ、フ
アンタジスタランドは、どこにでもありそうな遊園地だ。メリーゴ
ーランドに、ジェットコースターに、コーヒークップ。ねずみの愛
しいマスコットキャラが出迎えてくれたりはしない。マスコットキ
ャラさえもない、簡素な遊園地だった。そんな遊園地の門に、ウ
キウキ気分の少女（女性？・・・というには幼すぎるような・・・
）と、無愛想な顔の男がいた。

「あ！正ちゃんめんどくせえ！つて顔してる！」「うつ！？」

まあ、言わずもがな、面倒くさいと、本気で思っている正和。素直
に、表情に出ていたようだった。

「だめ！1ヶ月も前から約束してたんだから！わかった？」「へい
へい・・・。」

半分投げやりで、適当に返事を返す正和。それを横目に、ウキウキ
気分の炎宿魔が、とても対照的だった。

カップルのように、見えないくもないが、2人は、恋人同士なわけ
ではない。炎宿魔が、ここのチケットを2枚持っていて、勿体無い
し・・・でも一人で行くのも・・・というわけで選ばれたのは、い
い年して彼女のいない正和。2人は、幼馴染で、昔は、よく一緒に
遊んだりしていたが、思えば、このように遊園地へ2人だけでとい
うシチュエーションは、生まれて初めて。

年頃の女と男ならば、普通は気にするのが当たり前のはずなのだが、
・

「よし！じゃあとりあえず片っ端から乗っていこう！んじゃあれか
らね。行くよ！正ちゃん！」「ええ〜？俺はいいからさ、お前一人

で乗って来いよ。俺は、その店で待つてるぜ。」「ちよつと！だめ！正ちゃん、すぐフラフラとどっか行っちゃうじゃない！帰ってきていなかったら4000円だからね！」「おい！たけえぞ！」「当たり前でしょ！？ようするに、どこにも行くなつてことよ！それに、高いつてなに！？高いつて！？俺はこれから旅に出ます。探さないでください。つて遠まわしに言つてるだけでしょーが！？」

・・・・・・・・。

まあ、こういうカップルもいるという（別の意味のバカップル）ことといいんじゃないでしょうか？

それから、数時間後。

「はあ・・・・はあ・・・・。うげえ。」「・・・・・・。」

近くにあるベンチ、横たわる正和。それを困り顔で見ている炎宿魔。端から見たら、急病者が出て困っているような雰囲気になっている。実際、数人のすれ違う人が、「係りの方、お呼びしましょうか・・・・？」と、心配そうな顔で、話しかけてくる。炎宿魔は、それを丁重にお断りする。恥ずかしかった。炎宿魔にとっては、その一言に尽きる。

「あのお、正ちゃん？生きてるー？」「はーえ・・・・へー・・・・ひ・・・・ふー」顔面蒼白の正和。いつもとは、これまた考えられない、ユニークな顔だった。

「乗り物苦手なら言つてよ！大丈夫かと思って、無理やり手、ひっぱちゃったじゃない！」「はあー・・・・はあー・・・・。」「正和は、特に返事もせずに、横たわったまま。目の当たりに手のひらを当てながら、苦しんでいた。

正和は、言つたのだ。「すまん・・・・炎宿魔！お、俺、実は・・・」

「ええ！？なに！？聞こえない！？」

「絶叫系と、苦手なんだ！頼む・・・下ろしてくれー！。」
「なにいつてんの！？楽しいつて言つてんの！？聞こえナイー！きゃあー！正ちゃん！落ちるよ！落ちるよ！」そして、二人を乗せたジェットコースターは、時速、74km程で走り抜ける。

蒼白顔の、正和を・・・乗せて。

こんな調子であつた。

「だからっ・・・はあ・・・一人でっ・・・乗つて来いつて・・・」
「あ・・・うん。」

汗びっしょりの正和に対して、少し反省ぎみの炎宿魔。

「ご、ごめん。正ちゃん・・・。」「！？い、いや、別にいいんだけどよ・・・。」

少し意外だつた。炎宿魔が自分から謝るなんて、もう何年ぶりだろうか。

正和は、それ以降はなんにも言わずに、落ち着いたのか、ベンチに座つたままだ。炎宿魔も、その隣に腰掛けて、すやすやと眠ってしまった。正和の肩に、首を乗せて。

「・・・。」「気まずくはない。だが、・・・すごく新鮮な感じがした。」

「・・・。」「ふと、正和は、自分のこの先のことを考えてみた。」

彼女もそーいやいねーもんなあ。やっぱいねえのはまずいのか？

このまま適当に暮らしているだけで・・・いいもんなのかな・・・。
自分の将来についてなんて・・・考えたこともなかったぜ・・・。

俺は・・・10年後、なにしてんのかな・・・好きなことも、やりたいこともねえしな。

本でもかいてみつか。そういえば、昔小説が好きでよく書いてたな・

。。。

なんかに応募して佳作を取ったこともあるんだぜ。もう、おぼえてねーけどな。

。。。。。

「うん、うん。」「？、炎宿魔・・・起きたか？」「ふえ？」

正和の肩を借りて、眠りについていた炎宿魔が、半分寝ぼけた表情で、正和を見る。

「・・・正・・・ちゃん。」「ん？」

炎宿魔は、正和に顔を近づける。正和は、初めて女性の前で、顔を赤くした。

とても新鮮な・・・心地よい感じだった。

炎宿魔は、正和の耳元に、唇を近づける。「ああ・・・ひ、炎宿魔

？」「・・・。」

「ごめん、電車賃、貸して？全部・・・使っちゃった！」

「・・・。」

うん、まあ、知ってたけどね。

と、心の中で呟く正和であった・・・。

同日 午後7時03分

遊園地は、7時で閉園だったようだ。気づかずに、ベンチに座っていた正和と炎宿魔は、モップを持った係員に怒られて、ゲートに向かった。

「なんだかんだでさ、楽しかったよね？正ちゃん！」「ん？ああ。」
ぐっすり3時間も昼寝した炎宿魔は、眠気も吹っ飛んでしまったようだ。正和の周りを、くるくると回ったり、ちょっかいを出したりしている。

「お前・・・いい年した女がガキみてーなことしてんじゃねえよ。」
「えへへー。楽しいんだから、いいじゃん！人生、楽しんだモン勝ちだよ！」

相変わらず上機嫌の炎宿魔と、なんだか、疲れと呆れが混ざったような顔をしている正和。

「うつ・・・目が回ったあ・・・。」
「ほんとにアホだな・・・ホラよ。」

正和は、炎宿魔に肩を貸す。「ありがとあ。」と言って、炎宿魔は、正和の肩を借りる。

遊園地の門を出て、炎宿魔と正和は、少し歩いたところにある公園のベンチに腰掛けた。

「なんかさ、今日座ってばっかだね。」

「はは、確かにな。俺はそっちの方が嬉しいけどな。」

公園の外灯が、2人の影を作る。

誰もいない公園が、2人だけの世界を作り出しているようだった。もともと、

「んでさ、電車賃くれんでしょ！？ありがとね！正ちゃん！」

「貸せつてお前は言ったぜ？後でちゃんと返せよ？」

「えゝ？正ちゃんけち臭いよ！」「ほざけ！いくらすると思っただよ！こつから！500はかかるんだぞ？」

「うわ、ほんとけち臭いなあ。もてないよ！」「へいへい、なんでもいいから返せよ。」

2人の世界は、なんとも独特だった……。

「ねえ、正ちゃん。」「うん？どった？」

炎宿魔が、真面目な顔をして、正和を見る。「あのさ、今度の日曜、来てくれるんでしょ？」

「ああ・・・パーティー、やんだっけか？お前がダチ誘ってもいいつつたから、2人誘つといたぜ？」

炎宿魔は、少しガツカリした顔になった。「そ、そう。分かった。

パーティーって言ってもさ、ええ・・・と、9人ぐらいしか集まんないからね？」

「へーすくねえな。ま、なんでもいいがよ。」

正和は、両手を上げて、思いつき伸びをする。「なあ、パーティーってなにすんだ？」

「えー！？」炎宿魔は、驚かされたような、すつとんきよな声を上げた。

「ん？どうしたよ。」「ああ・・・なんでもない。」「炎宿魔は、ボサボサになっていた髪を整える仕草をした。

「パーティーってなんだ？お前んちでなんかやんのか？」「うゝん・

「・・・実を言うと、私もよく分からないんだよね・・・。なんでも、いつもやってる恒例みたいらしいんだけど・・・。」

ふん、と、適当に返す正和。

「なんでもね、・・・ええっと、・・・。」

その・・・。」

急に押し黙る炎宿魔。言葉が続かないので、正和は、別の話題を振ることにした。

「お前の親父さん、元気か?」「え?うん、もう元気すぎるぐらい。うざいうざい。正ちゃん、会ったことあったっけ?」

「ああ、優しい親父さんだったじゃねえか。」「ええええ!?建前だけだよ。」

怒るとちょー怖いしー。そーえば、正ちゃん、家族は?」

「うん?母親は死んだ。よくわかんないうちにな。」

炎宿魔は、失言だったのではないかと、少し後悔した。それを悟ったかのように、正和は、炎宿魔の頭を撫でてやった。

「なにお前が暗い顔してただよ。もう悲しくもねえよ。アイツは泣いてたけどな。いい歳して。」「アイツ?ああ・・・。」

炎宿魔と、正和は、先ほどとは比べものにならないくらい潮らしくなってしまった。

2人は、無言で、手を繋ぎながら、

ベンチの上で、眠ってしまった。

「・・・。。。。。。」「炎宿魔?」

時刻は、すでに10時半になってしまっていた。実に、3時間程、眠ってしまった。

「なに膨れっ面してたよ・・・。」炎宿魔は、そっぽを向いたまま、膨れっ面をしていた。

「なんかさあ・・・今日座ってばっかに寝てばっか。
なんかやだよ・・・もう。」

カラカラ、と笑う正和に、つまらなそうな顔をする炎宿魔。

「まあ、いいじゃねえか。寝てばっかでもよ。寝る子は育つぜ?」

「それを信じて毎日9時には寝てたあたしの苦労を知らないでしょ、
正ちゃんは。」

来る日も来る日も、楽しみなドラマとか全て録って、9時ごろに
つも寝てたのに・・・。

こんなちつちな・・・うう・・・。」

今度は、カラカラと、乾いた笑いではなく、大笑いをする正和。

「笑うなーーーーー! バカ!」「あつははははっ! そうかーこんなち
つちな背に育ってくれて俺は嬉しいぞー!。」

頭を、ポンポン、と優しく叩く正和。赤くなりながら、叱責する炎
宿魔。

「んもーーーー正ちゃんのバカー!」

相変わらず大声で笑いながら、逃げ回る正和。それを、両手を挙げ
ながら、全速力で追いかける炎宿魔。近所迷惑だ。ものすごく。

「早く帰ろっぜ! 腹減っちゃった。買えってなんか食うか?」

「うん! あそこ、あそこ! おにぎりがおいしいとこ!」

「あそこかよ!? ラーメン不味いじゃねえかよ、あそこ。」

お前はお前で、握り飯ばっか食ってんけどよ。」「いいじゃん! よ
ーし、元気出てきた! 正ちゃんのおごりでレッツゴー!」

自分の財布の中身を確認しながら、とほほ・・・と呟く正和であっ
た。

同日 午後11時13分

天貝家 本家 屋敷

「……。信他？ご飯、持って来たよ？食べなよ。」暗い部屋の
前で、天貝

天貝 立向路たむろが、お盆を持って立ち竦んでいる。この部屋は、ど
うも好きじゃないみたいだ。お盆の上には、簡素な料理が、一般男
性の夕食としては、少ない過ぎるぐらいの品が並んでいた。
「うん。そこに置いて。」

天貝 信他が、部屋の脇にある、小さな勉強机を指差す。

立向路は、言われたとつりに、勉強机の上に、お盆を置く。
カタン！

という音が、廊下に響き渡る。

「……。」「……。」「……。」

信他は、先ほどから、ずっと古い古文書のようなものを読んでいる。
所々、ページがボロボロで、少し触ったら、今にも破けてしまいそ
うな本であった。

信他はそれを、机の上に置き、ピンセットを使って、虫眼鏡を使い
ながら読んでいる。

文字の一字一字を、真剣に凝視している。

「ねえ、信他。食べなよ？揺決理がさ、せつかく作ってくれたんだ
からさ。」

「……。」「何も聞こえなかったかのように振舞う。作業をや
めるつもりはないらしい。」

立向路は、尚も居続ける。ただ立ったままで。

「……。何？まだなんかあんの？」

不機嫌そうな顔で、立向路を見る。早くどこかへ行け。
見るだけで、眼がそう語っているのがわかった。だが、立向路は動
こうとはしない。

信他をじつと凝視している。さすがに変に思った信他は、ようやく
机から離れ、立向路に体を向けてくれた。

「どうかした？ご飯なら食べるよ？」険しい顔だった信他が、穏や

かな表情になる。

その期を見計らったかのように、立向路が口を開く。

「信他こそ、何かあったの？いつもより暗い顔してる。」

心配そうな顔をする立向路。いつもとは違う立向路に、信他は、違和感を持った。

「別に、なんでもないよ。立向路こそ、なんかあったみたいだね。」
「……………」

「今度、ここでやるじゃない。あれ。炎宿魔が友達を連れてくるみたいだよ？」

「！？」立向路がそれを言うと、信他は椅子から勢いよく立ち上がる。

「何人！？何人！？」それを予想していたのか、立向路は無表情のままだった。

「3人だよ。」それを聞いたら、立向路はふう、とため息をついた後に、ゆっくりと腰を下ろす。「そっか…………それを言いたかったの？」……………」立向路は黙ったまま、コクン、と頷く。「あっそ。ありがと。」

「寺田 正和。櫻田 美由紀。日陰 盛多、だって。」

それを聞いた信他は、また先ほどと同じ顔に戻った。

驚きと、怒りと、悲しみ。それら全てが入り混じったような顔だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。あいつら・・・・・・・・。」

どこまでもしつこい。

あれは事故だと言ったのに・・・・・・・・どうやら信じていないみたいだね。

面倒くさい。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」立向路は黙ったままだ。なんのことが分かっているみたいだ。

「そう・・・・・・・・分かった。ありがとう。」

ふう、お腹すいたな、ご飯食べるよ。」

そういうと、信他は勉強机から、お盆を寄せて、食事に手をつけた。それを確認して、立向路はいそいそと、部屋から出て行った。

「おい姉ちゃん。渡してきたよー。」

厨房に入った立向路は、近くにいた女性に声をかける。

「そう、ありがと。食べてくれた？あの子。この前は量が多いって怒っていたから少なくなしたんだけど・・・・・・・・。」

「うん。食べてたよ。」「よかった。」

そう言くと、女性は、ポケットから煙草と、ジッポライターを取り出す。

煙草の一本を口に咥え、先端に火を当てる。

ハ―、と煙草独特の煙を吐き出す。立向路は、それを見て、嫌悪感を露にする。

「あら？ごめんなさい。あなた、煙草嫌いだったかしら？」

「僕はまだ未成年だ。嫌いも好きもないだろ？」

女性は、髪を靡かせながら、くすりと笑う。

「あら、私なんてあなたの歳のときに普通に吸っていたわよ？
もつとも、バレてお父様に怒られてしまったけどね？」

そういうと、その女性、天貝 揺決理は煙草をガラス製の灰皿に押し付ける。

意外と弟思いのようだった。

「姉さん。」「何？」

揺決理は、立向路を見る。

華奢で、女の子みtainな姿をしている。昔から、スポーツなどやっていなかったようだ。

筋肉も、贅肉も、付いているとは思えないくらい細かった。

「姉さんは、信じてないでしょ？メルディオール様。」

「え？何よ、突然。」

真剣な顔の立向路。揺決理は、尚も髪を靡かせている。

「信じてるわよ？メルディオール。」

いるわよ。あの人は。」

「信じて・・・ないでしょ？」

「ど、どうしてそう思うのよ？」

全く表情を変えない立向路を、少し不気味に思う揺決理。

信他は、じっと、揺決理から目を離さない。さきに目を逸らしたのは、揺決理だった。

揺決理は、気まづくなった厨房を、出ようとする。

「だって、姉さん。メルディオール様のことを呼び捨てで・・・。
どうして？姉さん。」

揺決理は、ああ、と声を出すと、優しい顔をしながら、立向路に向き直った。

「もちろん信じてるわよ？存在は。でもさ、

自分の親殺されて、「様」づけ出来るほど、お人好しでもないわよ？私。」

「・・・・・・・・・・。」

立向路は黙ったままだ。揺決理は、暗い顔をする。

後悔しているみたいだ。こんなことを立向路に言っても、意味がないのにと。

「ごめんなさい。立向路、忘れて？」

そう言っと、揺決理は、厨房を後にした。

残った立向路は、一言呟いた。

いや、呟いたのではない。

嘆いたのだ。

心の叫びのように、聞こえる。

きっとそれは、誰も聞こえない。

聞こえても意味は分からない。

当事者にしか、分からない悲痛な嘆き。

立向路は嘆いたのだ。

「メルディオール……様……。。。」と。

乾いた厨房には、すすり泣く立向路が一人、残されたままだった。

同日 午前2時32分

天貝家 本家 屋敷

「・・・・・・・・。」

揺決理は、ワインを片手に、窓に目を向けていた。
何度もため息を繰り返しながら。

長い黒髪に、整った顔立ち。

グラビアアイドルのようなスタイルは、毎日エステ等を欠かさない
のだろうと、容易に分かる。それぐらい、綺麗な体だった。

揺決理は、近くに置いてある、写真に目を向ける。

そこには、成人男性一人に、揺決理が、肩を並べて写っている。
恋人のようだった。

「まだ・・・会えないの？ねえ、壕？」

写真に、そう呟く揺決理。

寂しそうな、悲しそうな顔をする揺決理は、どこことなく炎宿魔に似ていた。

「・・・・・・・・。」

ワイングラスを傾ける。

ワインが喉を通るたびに、頭がぼうつとする。

どうも揺決理には、ワインが合わないようだ。それでも、眠れない夜は、こうしてワインで自分を酔わせる。

「・・・・・・・・。」

メルディオール。

私はみたことがある。メルディオールを。悪魔・・・だとか呼ばれているみたいだが、断じて違う。あれは人間だ。

女性だった。金髪の長い髪に、ウェディングドレスのような豪華な服装。

子供の頃に見た私は、その人を見て、「綺麗・・・。」と呟いた。
すると、

その人は、

こちらを見て、

手招きをし始めた。

今思うと気味が悪かった。全然知らない女性が、いきなり自分に向かつて手招きをしたのだ。

まあ、子供だったから。あの時はなにも思わなかった。それに、

あそこは私の唯一の居場所。

私が知らないことなど……ないのだから。

ともかく、それで私は、ついていったのだ。その女性に。

ドレスがとても綺麗で……うつとりしていた。

顔は……よく覚えていない。でも、すごく可愛い……って言えばいいのかしら？

子供っぽい顔をしていたのは覚えている。大人なのに、まだ子供っぽさを残している……そんな風貌だったのは覚えている。

ついていくと、広大な庭が現れる。

まあ、当時は全く分からなかったけど、今なら分かる。

この屋敷の裏側だ。

私の知らない、場所。全く目立たないこんなところに、入り口のようなものがあつた……。

それはまるで、目を疑うような光景だった。

ここ、本底の裏側は、たくさんの花が咲く、広大な庭になっている。幾重にも咲く花は、天貝家では、分家の人もたまに見に来るほど人気な場所。

それでも、私はそこに行ったことがなかった。だから、私は、そこに来たとき。

この女性が私を異世界・・・いや、別の世界に連れて行ってくれたのではないかと錯覚したぐらいだ。

「お姉さん！ありがと。」

素直にそう思った。こんな素敵な場所を教えてくれてありがとう、と。

だけど、その女性は、

「・・・・・・・・・・」

その可憐な花を見ながら、何も喋らず、無言のまま。胸元に光る「ムーンライト月光蝶」のペンダントが太陽を反射して、とても眩しかったっけ・・・。

「ねえ？」

1分だったか、10分だったか？

そのくらいの時間が経った後、ようやくお姉さんは私に話しかけてくれた。

私はとても嬉しかった。

なんだか、まだ何も話したことのない人だったが、何かが分かり合

えたような錯覚をした。

まあ、子供の頃の話だから・・・あの頃の感情なんて今思えば馬鹿馬鹿しいようにも思える。

「なに！？お姉さん！？」

私は満面の笑みでそう返した。
すると・・・

「あなたのおじいさまは・・・元気？」「え・・・？」

私が何に驚いたか？別に、お姉さんについて驚いたわけではない。
見知らぬ女性が、お父様の話をしようとしているのが、分かったからだ。

面倒だから、説明は省くが、おじいさん、つまり天貝 淘汰は、子供たちは（当時の）ひどく嫌っていた。話をしない、というのもあるが、気難しく物分りが悪い。

なにより、目を合わせると、なんの落ち度もなく怒鳴り散らすからだ。

これでは、誰も話したいなんて思わないだろう。私だってその一人だ。

邪魔だな・・・などとも思ったこともあったかしら。子供の感覚の邪魔・・・だけだね。

それともうひとつ。おじいさまは天貝家のなかでは、本家、当主・・・とは呼ばれてはいないものの、天貝家では、一番の権威を持っている方だ。

だが、おじいさまは天貝家の中で、とても嫌われている。

異端だ・・・ってよく陰口を叩かれていたっけ・・・当時の私はわからなかったのだけね。

まあその全てが入り混じったのか、私は驚いて声を失ってしまった。
お姉さんは、ニコツと笑って私を見ていた。

その笑顔のおかげで、ようやく話すきになれた。

「あ・・・ええと・・・。はい、元気です。」

最近は見えたこともなかったので、元気がどうかも分からなかったが、とりあえずこう返しておいた。

「そう。ありがとう。じゃあ、伝言、いいかしら？」

私の前に人差し指を立てて、その女性は、私に伝言を頼んだ。

「メルディオール。」

と彼に言ってくれるかしら？きつと伝わるから。」

ああ、このころはメルディオールなんて名前、聞いたこともなかったから、全く気にならなかったのよ？

だから、私は必死に頭の中でメルディオール・・・メルディオール・・・って呟いてたわ。

「う・・・うん、わかった。」

本当は嫌で嫌で堪らなかった。だって、あのおじいさまに、直接会わなきゃいけないなんて・・・。

断りたかったが、聞いてしまったものは仕方がない、と、自分を納得させた。

頭の中で「伝言」を、反芻しているとお姉さんは、じゃあね、といった立ち去ろうとした。

それを私は止めた。「待つて！」と大声を上げて。

お姉さんは、首だけをこちら側にむけて、「なに？」といった。

「お姉さんの名前を教えてください！」

そこで少しの間があつたあと、

「もう教えたわよ？」

さっきの伝言、忘れちゃった？」

メルディオール。

いくら覚えが遅いからといって、数十秒前に聞いたことを忘れるわけがない。

「覚えてるよ？」と、私が答えると、「それ。」

といって、屋敷の反対側、つまり門の入り口に向かって、優雅に歩いていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

夢だったのだろうか？

気がつくと、屋敷の中。自分の部屋。

いや、夢じゃない。

だって、・・・・その伝言を伝えたおじいさまは、ひどく青ざめたからだ。

子供にでもわかるぐらい、表情を変えて。

「・・・・・・・・・・ふう。」

揺決理は、ワイングラスを大きく傾け、一気に飲み干した。それっきり、机の上に突っ伏して眠ってしまった。

「豪・・・・・・・・・・豪・・・・・・・・・・。」

と、寝言のように呟いていた。

10月6日 午前11時32分

正和のアパート

「・・・・・・・・。」

正和は、ちゃぶ台に肘を寄せ、考え事をしているようだった。いつもなら、仕事場に向かわなければいけない時間なのだが。

仕事場のビルの1階で、殺人事件が起きて、仕事は一時中断となった。

通常なら、ビルの関係者が呼び出されるはずなのだが、盛多が気を

利かせたのか、正和に電話で来なくていいと、伝えたのだ。

いつもの遅刻がここで幸となった。
呼ばれることもなく、一人で暇をつぶしている。そのわりには、何もしていないのだが。

そこに。

コンコン、アパートのドアが叩かれる。

「・・・・・・・・・・。」

正和は、何も言わず、ドアを開け放った。

「あの、正和さん？」

そこにいたのは、

「ああ・・・お前は確か・・・・・・・・炎宿魔の・・・・。」

天貝 狩煉、であった。

炎宿魔の妹である天貝 狩煉は、高校3年生の女子学生。
姉と同じく、活発そうな印象を受ける顔立ちだが、普段は滅多に話さないで、クラスではあまりいい印象を受けていない。触らぬ神に祟りなし、とでもいうかのように、話かけてくるのは、ごく一部。
それでも、無視されているわけではない。

話そうとすれば簡単に話しかけられる。狩煉が内気なだけだ。

「んで？どうかしたのか？つてか、炎宿魔は？」

俯いたままの狩煉が、正和に目を向ける。

「炎宿魔ですか？今日はお屋敷にいますか……。」

正和は、台所へと、呼べるかは、怪しいところだ。とりあえず、冷蔵庫のあるところから、

麦茶を取り出すと、コップに注ぎ、それを狩煉に渡した。

「ありがとうございます。」

冷えた麦茶で、喉を潤す。喉が乾いていた狩煉にとっては、とても美味しく感じられた。

「それで？なんでお前だけが俺のところに来たんだ？」「……………」

すう、と狩煉が息を呑む。

「あの、ですね？実は、こんど、家に来るじゃないですか。正和さん。」

「ん？ああ……。行くぜ？それがどうしたよ。」

「実は、協力して欲しいことが……。あるんです。」

「ん？協力？何を？金だったら無理だぜえ？」

正和の茶化しを、無言で無視をする。

いつもなら、ここで、呆れたり、話を繋げたりしてくれる狩煉が、無視をした。

正和は、頭をポリポリと掻き篦る。

「ん・・・わりい。で？なんだよ？」

狩煉が、正和の目を睨むように見て、

「天貝家・・・連続虐殺事件の謎・・・明後日で、解けるかもしれ
ません。

協力してください。正和さん。」

2人の麦茶は、もう冷たさを失って、ぬるい状態になっていた。

T o b e c o n t i n u e d

P a r t 3 P u t e a c h t h o u g h t (前書き)

文章力はあり（ry

頑張っ
て読ん
でみて
ください。

もっとよく考えて、否定しないで！

もっとよく、考えてよ！

自分の世界を、否定しないでっ！！！！！！！！！！

10月6日 午後3時43分

天貝家 本家 屋敷

厨房

「え〜と・・・これが・・・卓上塩？あれ？じゃあこれは？ん・・・えーい！このくらい入れちゃえ！」

―「握り」した、卓上塩を、鍋に思いっきり投げ入れようとする炎宿魔。

「はいはい、ストップストップ。」

とつさに現れた揺決理が、炎宿魔のか細い腕を掴んで、その行為を阻止する。

ギリギリなタイミングだ。

「あんた、何作ってんのよ？」

鍋の中の、緑色の・・・料理を見て揺決理が炎宿魔に聞く。

炎宿魔は、自信満々に、高らかに答える。

「何って、シチュー、だけど？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ぐつぐつと音を立てる鍋の音は、無言の気まずい時間を、正確に刻み込んでいるようだった。

もつとも、炎宿魔本人は、そうは思っていないようだった。

「どうしたの？お姉ちゃん。何黙ってるの？」「あ、あのね？シチュー・・・なのよね？これ。」

うん！、と胸を張って答える炎宿魔。

「だったらなんでこんな色してるのかしら？」

鍋の中の色は、薄気味悪いを通り越して気持ち悪い緑色、それもどす黒い緑色。

とても料理と呼べるものではなかった。

「よくぞ聞いてくれました！あのね、これ、ミキサーでいろんなものを碎いて粉々にして、混ぜてみたの！正ちゃん、野菜大嫌いで食べてくれないから・・・こうすれば！しょ・・・しょ、食物かんいがたつぷりでしょ！」

とりあえず、揺決理は、食物繊維って言いたいんだろうな・・・というところまでは伝わった。

「そ、そう。それで？味はどうだったのよ？」

近くに小皿がその緑色の料理の後があつたので、味見をしたことが容易に分かった。

「うん・・・なんか味が無い。っていうか塩が足りないかな・・・って思ったから、今入れようとしたんだけど・・・。」

この料理に塩もへつたくれもないように揺決理は思ったが、とりあ

えずスルーしておいた。

「味見していいかしら？」

目をきらきらさせながら、炎宿魔は「もっしろん！」と、答えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

第一感想

にがい。

第二感想

後味がなんか気持ち悪い

第三感想

もはやシチューの味がしない。

「どう！？まあ、いまから塩を足すから、味が無いのは勘弁ね。」
確かに味はない。味は。

「・・・・・・・・・・これ、正和さんに食べさせるのよね？」

「うん！正ちゃんに食べさせるよ！正ちゃん、不味いとかいいながらちゃんと全部いつも平らげてくれるからさ！なんだかんだいって美味しいからだよ。今時のツンデレってやつ？仕方ないから食ってやる！みたいな！」

「・・・・・・・・・・。」

正和さんも苦勞してるのね。

心の中で、呟く揺決理。

「わぁー美味しそうー。」

数十分後、揺決理が作り直してくれた。

いつもはぐだぐだと言っている揺決理だが、なんだかんだで兄弟には優しいのだ。

「はい、出来たわよ？手作りでも何とでも言っつて、正和さんに食べさせてあげなさい。」

その緑色じゃ、可哀相だから。」

「えー、なんでよぉー。十分おいしいよぉーちよつと味が足りないだけで。」

はいはい、と受け流す揺決理。

タップパー２つに、作ったばかりのシチューを流し込む。

蓋をして、冷蔵庫にしまい込んだ。

「ん、まあ一応ありがと。でも、こんどは作り方教えてね。手作りじゃなきゃだから。」

揺決理は、炎宿魔のガツカリしたような顔を見て、くすりと笑う。

「あら、お熱なのね？彼に。」

顔を赤くして否定する炎宿魔。「そんなんじゃないってえ！」と。

「あつはつはは。はいはい、分かったわよ。じゃ、私は行くわよ？じゃあね。」

手を振りながら、厨房を出て行く揺決理。

揺決理が出て行った後を、じっと見ている炎宿魔。とても悲しい顔をしている。

「本当に……なんで……そんな関係になれないんだろ。」

ぐず、と、鼻水をすする炎宿魔。

そんな彼女を励ますかのように、厨房にある、内線電話のコール音が鳴り響く。

涙を拭いて、炎宿魔は受話器をとり、耳に当てた。

「はい。誰？」

電話の相手は、立向路だった。

「僕。炎宿魔？お姉ちゃんは？」「え？今出て行っただけど…呼ばうか？」

少しの躊躇があったあと、「うん。」と立向路が答えた。

「何？」「信他のご飯、出来てる？」

「え？…出来てるわよ？なんで？」

「運ぶよ。頼まれたからね。」

揺決理は、立向路の発言に少し不思議に思ったが、別にお昼（そんな時刻じゃないが）を運ぶぐらいどうってことないと思ったので、立向路に頼むことにした。

「わかったわ。厨房に置いておくわ。」「ありがと。」

天貝 信他^{しんた}は、17歳の、高校2年生。

だが、幼顔で、中学生ぐらいの顔立ちだ。背は、炎宿魔よりは少し高いくらいだ。

普段は、全く自分の部屋から出ようとはしない。

自分の部屋に閉じこもってばかりだ。

唯一、心を許しているのが立向路だ。子供の頃から、立向路とは、仲が良かったみたいで、天貝家の中で、信他が部屋に入れる唯一の人物だ。

ただ、何かに熱中しているときは、立向路でさえ中に入れてはくれない。

無理やり入ろうとすると、ものすごい剣幕で怒鳴り散らされる。

天貝家の子供勢も、大人勢も、入ろうとはしない。別に嫌いとかでは、ないみたいだが。

信他の部屋の扉が、

コン、コン、

と、優しく叩かれる。

「誰？」分かつてはいるが、一応確認する信他。

「僕。立向路だ。開けて、ご飯持ってきた。」

カチャ、と、鍵が解かれる。

ぎい、と音を立てて、扉が開かれる。

「いつもありがと。気を利かせてくれてるのか？」「まあ、そんなところ。」

信他は、昼飯が乗ったお盆を受け取る。

「立向路、明日さ、一人にして欲しいんだ。」

信他は、お盆を机の上に置き、立向路を部屋の中に誘った。

「え？でも・・・明日は・・・。」「・・・。」

立向路は、部屋の中にあつた小型のソファに腰をかける。

「実はさ、明日、やりたいことがあるんだ。明日で、決着が付くはずだから。」

初めてだった。

はじめて・・・立向路は、信他が言ったことが分からなかった。

今までそのようなことはなかった。信他は、いつも核心をかくすような話し方じゃないのだ。しかし、立向路は、初めて意味が分からなかった。

その言葉の、意味が。

「決着？なんの？」「・・・。」

いつもどおりだ。核心をつく質問は絶対に答えずに黙ってしまうのだ。

だから、立向路は、それ以上の質問は控えた。しても、意味がないと悟ったからだ。

案の定なわけだが。

「まあ、いいや。」「悪いね。」

信他が、立向路に軽く謝る。その行為だけで、立向路は驚く。普段謝ることのない信他が、謝った。

何があるというのだ・・・明日は。

信他にとって・・・明日・・・なにがあるのだろうか？
何が・・・。。。。。

「立向路？どうかしたのか？」信他が、立向路の顔を、覗き込んでくる。

「!？」「?」

信他は、何かの違和感に気づく。なんだろう・・・これは。

「おい、お前・・・なんだそれ?」「ああ・・・これ?」

信他は、ポケットから、「それ」を取り出した。

「携帯電話だけど?何?」

「・・・・・・」高機能が売りの、普通の携帯電話だった。なぜ、信他が「それ」を疑問に思ったのである?」

「どうしたの?信他。」

ハッ和我に返る信他。なぜか冷や汗をかいている。

「ごめん、なんでもない。」

その後2人は、他愛ない言葉に花を咲かせた。

一応テレビなどはちゃんと見ているようだったので、意外と話が合う。

ドラマや、俳優、アニメの話なんかも。

さすがに、声優などの話は合わないみたいだったが。

「?なんだそいつ?」

「知らない?そうか・・・まあいいや。」

マイナーな人も知ってる立向路の話は、たまに付いていけなくなるが、それでも、たまの気分転換にいいな、と、信他は感じていた。

「ええ。仲良いわよ？今もよく話しているわよ？」

天貝家で、誰も入りたがらない書斎に、2人の人間がいる。

天貝 揺決理と・・・天貝 淘汰である。

「そうか・・・。」と、淘汰は目を伏せる。

蓄えた顎鬚は、長年の経歴を物語っているようだ。

よく見ると、耳のところが少し欠けている。戦争か何かの怪我だろうか？

見るからに怖そうな顔は、見ただけで人を戦慄させそうだ。

淘汰は、昔はとてもユニークな人物であったそうだ。

しかし、分家の話では、本家の屋敷を立てた頃から、おかしくなっ
たみたいだ。

別に何をするわけでもないが、人を見るたびに、その人を罵ったり、怒鳴ったり。

時には、頭の悪い（成績が悪い、とは違う。頭のよさと、成績のよさは違うと、淘汰自身は考えているようだ。）天貝家の人間を、嘲り笑ったりしていて、かなり評判がわるい。

遺産は、全て分家の方が管理している（所持しているのは淘汰だが、実際に使うことはできないみたいだ）ので、そのような話で盛り上がることはないという。少なくとも本家では。

淘汰は、目を伏せている。ただただ、じっと、目を伏せている。

揺決理は、何も言うことができなく居づらくなった書斎を出ようと、

ドアノブに手をかけた。

「揺決理。」ドスの聞いた声で、揺決理を呼び止める。

「何よ？」

揺決理は、不機嫌そうに、返事をする。

「・・・・・・・・・・すまなかった。」

耳を疑うなんてどころじゃない。

5感、全てを疑った。

後ろを振り向いた揺決理の目の前には・・・・・・・・

土下座をした、淘汰がいたのだ。

今まであんなに偉そうに、周囲を見下していた淘汰が、だ。

実際、揺決理も馬鹿にされ続けた。

頭も悪い、成績も悪い。ワルにつるんばかりだった揺決理のこと

を、淘汰は、呆れるのではなく、馬鹿にし続けてきたのだ。自分の孫を、ひどく蔑み続けてきた淘汰が、謝ったのだ。

「・・・・・・・・な、何よ？どうしたの？頭でもおかしくなった？何か冗談なのか？そう揺決理は思い、毒を吐いた。

しかし、淘汰は、その後は何も喋らず、土下座をし続けた。

「・・・・・・・・。」

さらに居づらくなった揺決理と、ただただ淡々と謝り続ける淘汰。

いつの間にか、書斎の空気は、さらに硬いものになっていた・・・・。

10月6日 午後4時21分

正和のアパート

ピンポン、と部屋中にチャイムの音を響かせる。
今頃になって、なぜ狩煉はチャイムを使わないんだろう？と疑問に感じた。

「こんにちは、正和さん。」

ドアの前に立つていたのは、櫻田 美由紀であった。

「ん？なんだなんだあ・・・最近、女ばかり家に来るなあゝモテ期が来たのかあゝ？」

美由紀が、なんて返せばいいか考えていると・・・

「ぐうおおおお！！なんでお前がここにいるだよおお！！塩まけえ！塩！！！」

近くにあつたちっちな塩瓶（なんで近くにあるんだ！？）を手にとって、キャップを外して、思いつき「相手」にかける。

目の前の、日陰 盛多に対して。

「・・・・・・・・。おい、こら。なにやってんだ。」

ボコツ、と鈍い音を立てて、正和の頭をグーで殴る。ズキズキ、と頭が痛む。

「いつてエな！何すんだよ！」「遊びに来てやった「友人！」に、いきなり塩をぶつ掛けるお前は、何すんだよ・・・じゃねえのか？」あははは、と笑う美由紀に、ちえ、とばつが悪そうにする正和。ほのぼのとした光景だった。

「んで？何しに来たんだよ？」

さつきとは、打って変わって不機嫌そうな顔をする正和に、またも美由紀は笑いそうになる。

「・・・・・・・・なあ、明日、本当に俺たち行ってもいいのか？」

少し空気が硬くなる。3人が急に黙りこくったのだ。

「ん？いいんじゃないの？この前炎宿魔に連れてくぞって言うて

もわかった、って言ってたぞ?」「ん、そうか……。」「

。。。。。

「歓迎は……。されないよな?」「。。。。多分な。」「

盛多が言ったことに、美由紀は、なんのことも全く分からない様子だった。

「。。。。。。。」

無言のままの3人。全く何のことかわからない美由紀にとっては、この上なく居づらい空気だった。

「・・・・・・・・・・。」

「これ、なんですか？」居づらくなつた空気を、美由紀は、切り裂くように、ちゃぶ台に置かれている「もの」に指を刺す。。

美由紀が指差した先にあつたのは、月の形をしたペンダントだった。

「なんだ？女の忘れモンかあ？」

冷やかした盛多だったが、正和は相手にしなかった。

「・・・・・・・・。」

またも無言になる。

「そつえば。」

何かを思い出したかのように、正和が呟く。

「殺人事件あつたんだってな？どうなつたんだ？」

「ああ……。それがなあ、全然知らない奴だったよ。」盛多が、バッグの中から資料のようなものを取り出す。

「警察からなんかもらつたんだけどよ……。詳しいことは聞けなかった。」

名前は、大鳥 耕治。知ってるか？」

んにゃ、と否定をする正和。

「背後から刺されたみたいだ……。つかお前ニュースくらい見ろよな……」

「わあつたわあつた。んで？」

「たく……。と呟いて、盛多は話し始めた。「そんな詳しいことは知らないぞ？」

「……。失血死だそうだ。後ろから……。ズブリと、な。」

今んとこ金取りの仕業に……。ってことになつて。財布の中身全部取られてたからな……。」

「……。……。なんだよ？」

「なかつたみたいだ。」「へ？何が？」

急に盛多は、その一枚の紙を正和に手放す。正和はそれを拾い上げてみた。

「ゆ……。び？」「ああ……。」

そこには、死体の状況が大雑把に書かれていた。（一般人相手だからなのか、やはり詳しくは教えてくれないみたいだ。）

死体欠損部

右手 人差し指の第一関節部上

「なんだそりゃ、気持ち悪いな……。」

「物取りならそんなことするわけないだろ？」

「……まあ、よく分からないな。それに、関係なさそうだしな。」

本当にそうなのか？……と心の中で思う正和。

突然の炎宿魔からの招待。狩煉からの……警告。そのすぐに……殺人事件？

なんだか、誰かの思惑が、混乱しているようにしか思えない。

不気味だ。

なぜ？このときに……限って。

せっかく、チャンスが巡って来たのに。

10月6日 午後10時 21分

天貝家 本家 屋敷

炎宿魔の部屋

「・・・・・・・・。」

炎宿魔の部屋は、・・・・・・・・いかにも女の子の部屋って感じ・・・・・・・・ではない。

本棚には、ジャ。プの単行本がズラリと・・・・。
部屋の床は、雑誌が散らかってはいる。

サン。ー、ガン。ン、ジャ。プ、と、名前の前に「少年」がつくも

のばかりだ。

この年になっても炎宿魔は炎宿魔だ。と、正和によく笑われているようだ。

「・・・・・・・・・・明日・・。」

一冊の本・・いや、日記だ。炎宿魔は、一冊の日記を手にとっている。

少年アニメのキャラクターが表紙に描かれている。剣を振り上げているところのようだ。

その日記をじっとみて、炎宿魔は・・・・涙を一滴落とす。

「・・・・・・・・。」

誰も知らない。

誰もわからない。

誰も知ることのない悩みが、彼女を押しつぶしていく。

7
 •
 •
 •
 •
 •
 ○

「正ちゃん……」

そして、始まる。

そして、終わる

それぞれの、思いを・・・乗せて。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

Part 4 An invitation to the paradise

やっと館です。下手糞ですいません（毎度）

初小説にしても、下手糞だな・・・と思いますね。

自分でも、「なんだこりゃ」っていうのたくさんあります。

まあ、まだまだ全然続きますので、頑張っていきたいと思っています

Part 4 An invitation to the paradise

10月7日 午前10時02分

正和のアパート

「んで？」

・
・
・。

「おい？」

・
・
・。

「
・
・
・。

・
・
・。

「
・
・
・。

・・・むにゃ？

「何がむにゃ！？だ！！」

ちやぶ台をひっくり返す（まあ何も乗ってないわけだが。B型なのだろうか？）とまで勢い付いているわけではないが、目の前にあったちやぶ台をおもいつき叩く。

その音に「2人」は、目を覚ましたようだった。

「むにゃ？どうしたんですかあ？正和さん」「そうだぞ・・・。うるさいな。」

目を擦りながら、不機嫌そうな声を出す2人、美由紀と盛多。それを見て、正和は、怒りを通り越して、呆れてしまった。

結局昨日は、正和の家の冷蔵庫の中身を漁り、酒ばかり煽っていた。元々、酒は滅多に一人で飲むことはない正和であったため、冷蔵庫の中身は、簡素なものであった。

なので、2人は、「おい、正和う！近くにコンビニあったろ！？買ってこい！」「あ、じゃあお願いしますねー正和さん。」

酒は、飲まなさそうに見える美由紀が、グビグビと、飲んでいく。ふざけんなーと、もちろん怒鳴ってはみた。

しかし・・・「いつも仕事で貸しあんだろー？っていうか貸しばっかだろお！？いいじゃねえか。」「そうですよー！買ってきてくださいよー！！」

.....

まあ、買ってきてしまっわけだが。「3人」の割り勘で。

全く飲んでいない、自分が払わされる不服を感じながらも、2人の言うことを聞いていた。

結局ドンちゃん騒ぎは、深夜2時ほどまで続いた。

「はあー。もういいか・・・面倒くせ。」

どか、とあぐらをかく正和。

2人とも、まだ寝ぼけていて、・・・というより

「うー頭いてえー」「・・・気持ち悪いです！。うー。」

二日酔いであつた。

美由紀は、一旦家に（といっても隣だが）帰ったようだ。

「・・・つてか、お前も帰れよ。」以前とここに居座る盛多。

「ん？いいじゃねーか。このまま行けるように色々持ってきてんだからよ。」

正和は、少し大きめのバッグを持ってきていた。

中には・・・着替え、なんかが入っていた。

「って・・・おい。なんでこんなもんまで持ってきてんだよ!？」

「あ！馬鹿！違う！たまたまだ！この前入れといたんだ！しまえ！馬鹿！」

「それ」を持ちながら、正和は、ニヤニヤしながら、盛多を見る。
「女いねーんだよな？盛多は。うーん？ってーことはなんだ？遊んでんのか？わりー奴。」

「な！？違う！それはだな・・・えーと・・・その・・・。」
「その？ん？」

「・・・」。頼む、恥ずかしいんだ。しまつてくれ。「正和は、勝った！、とばかりに、ガッツポーズ。顔面真っ赤になる盛多。
まあ、そこに美由紀が来てしまうわけだが。

「正和さん！盛多さん！お待たせしま・・・した・・・。」

美由紀は、正和の持つている「それ」に驚愕・・・というより恥ずかしいという気持ちが爆発した。

「っーーーーー！？」

そこで、正和は・・・「ああ、美由紀か。実はな、今盛多のカバンの中を漁ってたんだがよ、」

ポオコツ！と、昨日響いた鈍い音、再び。

昨日よりは、少し痛みが増しているようだった。頭をずっと抑えている正和。

「ええと、櫻田君。忘れてくれ。頼む。」「はい・・・。」

どちらも顔面真っ赤。正和は、いっひひひひ、と、笑い転げているようだった。

（「それ」については描写致しません。皆様のご想像でお願い申し上げます）この小説は、

官。小説ではございませんので、ご了承くださいませ。・筆者訳）

「おい、早く行こうぜ。あと20分しかねえや。」

荷物等を整えて、身支度をする3人。珍しく、正和が、バッグを持っていることに驚いた。

「おい？珍しいな！お前がバッグ持って行くなんて。」それに気がついた盛多が、声をかける。「んだよ？。ム持ってくわけじゃねーからな！。」再び真つ赤になる盛多に、大笑いする正和。「うるせー。もう、忘れろ馬鹿。」「わあったよ。これぐらいだけどな、持っていくの。」中に入っていたのは、・・・雑誌だった。「ん？なんでこんなもん持って行くんだ？」「炎宿魔の忘れモンだ。ああ面どくせー。」カラカラと笑う盛多。近くにあった携帯電話の液晶画面をみて、ようやく焦りだす。

「あ、おい！だから時間ねえーって。いくぞ！」

ようやく、アパートを出る3人。11時に集合のはずなのに、10時49分に、家を出た。

「・・・・・・・・・・。」

まあ、予想どおり、遅刻なわけで。ピリピリと、車の中で待っている炎宿魔。（車の運転はお手の物だ。すでにこの歳にして。）

今日は、日曜日のため、そこまで混んでいる様子はないが、平日は、ラッシュがすごいことになる。正和が、遠いところの職場に行かない理由の一つといえる。

ようやく3人到着。

時刻はすでに、11時25分だ。

「おっそつおおい！！！」

案の定、怒鳴る炎宿魔。それでも正和は、笑っている。

「悪かったって言うてるだろ！んな怒るなよー。」盛多と美由紀は、少し身を引いている。

遅れて何もいえない様子のようだ。「全く・・・ここまで遅れてくるなら電話かメールしてよお。」「いやーわりいわりい。」

さつさと車の中に乗り込む正和。暖房が少し効いているようだ。入つてすぐに、外よりも温度が高いことに気がついた。「ほら、乗れよ。意外と快適だぜ？」

2人とも顔を真っ赤にしている。

盛多は、乗り込むと、「ごめんね、炎宿魔ちゃん。この馬鹿が・・・」と、謝った。

美由紀も、ごめんなさい、と一言。

「あ、いいですよ、全然。」

爽やかな笑顔で返す炎宿魔に対して、正和は不服を漏らす・・・。

「おうおう！俺とこいつらでなんでここまで態度が違っんだよ！？」

「だって、遅刻したの正ちゃんのせいなんですよ？どうせ・・・。」

まあ、当たらずとも遠からずだ。

「んだよそれ・・・ちえ・・・。」

「はいはい、もういいでしょ？行こう。かなり押してるんだからね？」

炎宿魔が、そう言うと、小型の乗用車が、軽快に滑り出す。

誰かが、その車をじっと見ていることを、4人は全く気づかなかった。

「ってか、なんで大富豪のお嬢様が運転してるんだよ？運転手みてーなのはいねーのか？」

さきほどから、疑問に思っていたことを、正和は口に出してみる。

「え？ああ・・・いつものこと・・・みたいだよ？」

小首を傾げる3人。

「なんかね、1年に1回、今日は天貝家にとって特別な日なんだって・・・。それで、この日は、使用人の人たち全員を休みにするん

だって。なぜかは、よく知らないんだよねーにやははは。」

最後に笑ってごまかす炎宿魔に、なぜか違和感を覚える正和。

「まあ、いいか。それよりよ、どこに向かってんだ？屋敷か？」

え？うん。そうだよ！」

それを聞いて、うげええ、と、不愉快そうな顔を、露骨に露にする正和。

「めちやくちや遠いじゃねえか！何分ここに乗ってなきゃいけないんだよ……。うげえ……。」

それを聞いた炎宿魔が、えっへんと、胸を張る。

「へっへー。もうちよつとしたら、なんと！自家用飛行機でひとつ飛びー！わははは。」

目を丸くする3人。まあ、当然だ。自家用の飛行機だなんて、乗ったことないのだから。

「へー。たまにはいいことするじゃねえか。お前もよ。」「別に、あたしがするわけじゃないけどねー。」

「……………」

ふと、盛多が美由紀と目が合う。彼女は、ひどくがっかり……。というか、俯いている様子だった。「おい、どうした？」盛多が声をかけても、美由紀は、聞こえていないのか、体をピクリとも動かさうとしない。

「お、おい？」不安になった盛多は、美由紀の体を少しでも揺さぶってみる。「おい、櫻田君？大丈夫か？」

……………。

「ごめんなさい。限界……。」

さらに俯いてしまう正和が、とっさにバッグの中に詰め込んであったビニール袋を、美由紀の口の前に広げる。

「はぁ……はぁ……はぁ……。」

「車……弱いのか？」

美由紀は、車酔いで、嘔吐してしまった。さきほどから、ずっと我慢していたのだろう。

「ごめん……なさい。……、多分昨日の悪乗りのせいだと……。」

あぁ……と、納得する2人。

「大丈夫ですかー？」炎宿魔が、運転席から、声をかける。「はい、大丈夫です。ごめんなさい。」

申し訳無さそうに詫びる美由紀。カラカラ、と笑って、大丈夫と連呼する炎宿魔。

あまり細かいことは気にしないみたいだ。

20分ほど経って、小さな駐車場のようなところに、車を止める。周りは、濃緑の木やら森やらが、生い茂っている。ずいぶん手入れを怠っているようだった。

炎宿魔は、少し周りを確認すると、一人の女性を、見つける。おーい、と、言って、その女性に手を振る。天貝 揺決理だ。

「どうも、揺決理よ。よろしく。」

「うーっす。」「はい。」「と、適当に返す2人。正和は、知り合いのようで、

気軽に話しかけている。「よう、なんか老けたんじゃないのか?」それを聞いて、揺決理は、笑みを絶やさないまま、周りの温度を低く(注・できません)していく・・・。

「へへへ、そう。一応これでも、女やってますのでね。ところで正和さん?だいぶ前に家に忘れていった。。。持ってきていますかとよ?今、渡してあげましょうか?」

表情を一切変えず、微笑(邪悪な)を浮かべながら正和に迫る。

正和は、あたふたと焦った後、「すみませんでした、揺決理様。」

と、顔を真っ赤にしながら、坦々と土下座をした。

よほどの物を忘れたのだろうか・・・?

こんな風に手玉に取られる正和を、見るのは初めてだったみたいだ。もつとも、炎宿魔は、何度も見ているのだが。

2人は大笑いしていた。

顔を、真っ赤にしながら、とばとばと歩く正和に、勝った!とばかりに鼻を鳴らす揺決理。

そこで炎宿魔が一言。

「うん！いつもどおり！」

正和の、「いつも」は、とんでもないものばかりのようだ。

「というわけで、体重のバランスとかあるから、言われた通りに座ってもらえるかしら？」
うーっす、と正和の適当な返事。

「ゴホン、えー、炎宿魔。あんたは、左奥の方に座って。」

あいよー、と炎宿魔の返事。

「正和さん。炎宿魔の隣で、右奥よ。」

んー、と面倒くさそうに機内に乗り込む。

「美由紀さんは、右前。」

はい、と返事をする美由紀。

「それで、盛多さんは、そこ。」

びし、と美由紀が指を刺したのは……。

真ん中。つまり席無し。

「……………。おう、わかった。」

まあ、しょうがない。と、軽く考えて乗り込む。

「ごめんなさいね。そこに座ってもらわないと均衡が保てないのよ。」
「いいや、構わないよ。俺はどこでもいいしな。」

まあ、そんなわけで、ようやく自家用の小型飛行機は離陸をする。

うーん、

という独特な音を発てて、ゆっくり上昇していく。

「気をつけてね!」何をだ。

揺決理は手馴れたように、操縦していく。

炎宿魔は見慣れているから、驚きはしないみたいだが、3人は違う口をポカーンと開けている3人。主に美由紀。

「す、すごいですね!ちゃんと飛んでますよ!」「当たり前じゃない……………。これでも一応免許は持つてるのよ?ほら。」

揺決理は、人差し指と、中指に、透明なカードケースを挟ませる。車の免許証…………。とは全く違うみたいだ。ただ、英語ばかりなので、正和にはなんて書いてあるか、さっぱり分かっていない。

「ほう、すごいんだな。」盛多は、感涙の言葉を漏らす。まあ、小型であろうと、飛行機の操縦ができるというのは、普通の人からし

てみれば、すごいことだろう。当然の反応だ。

「にしても……。」正和が、さきほどのカードケースをじっと凝視している。

「なによ？羨ましいいの？」早く、返せとばかりに、揺決理が、人差し指を、くいくい、と動かす。「……無愛想な顔だな、この写真。なんか髪が顔に髪が引つかかって、おばけみたいだしよ……。」
「ばつと、正和から取り上げる揺決理。「ああ、はいはい、そうですか。じゃあ邪魔だから落ちてもらいましょうか……。」「お、おい！冗談に決まってじゃねえか。」

何本気にしてんだよ……全く。」操縦中だというのに、揺決理は炎宿魔のほうに顔を向ける。「炎宿魔？男を選んだつたら、もつと包容力のある男を選びなさいね？子供みたいな子だと、将来苦労するわよ？」それを聞いて、満面の笑みで、おまけに手を上げながら「はあーい！気をつけまーす！」と、答えた。「おい、俺のこと言ってるじゃねえよな？」正和が食って掛かる。が、揺決理は、「言ってるないわー！。正和さん？」と、またも満面の笑みで返す。
怖いなあ、この姉妹。と、一人で呟く正和。その後、機内は、他愛ない話に花を咲かせる……という表現だと綺麗に聞こえるが、実際は、誰かをおちよくつたり（大抵正和。）げらげらと笑いあっていた。

10月7日 午前11時42分

正和、美由紀、盛多の仕事場

日曜日なので、中には、人っ子一人いない。人がいる気配さえない。いつもは賑やかなこの場所も、人がいないと、急に、不気味なところ

ろに変わっていく。

カーテンは全部締め切っているため、この部屋を照らすのは、わずかな隙間から入り込む太陽の光だけで、床なんかは、ほとんど真っ暗な状態だ。

その仕事場のドアノブが、外側からガチャガチャと、音を立てている。誰かが回しているのだ。もっとも、鍵がかかっていて、開かないようだったが。

「・・・・・・・・やっぱ駄目か・・・・・・・・」

男・・・・・・・・であつた。短髪に、うつすら髭を生やしている。

何かのスポーツ、もしくは筋力トレーニングをやっているのか、スポーツ選手のような体をしていた。

「・・・・・・・・。」

ドアノブから手を離し、携帯電話を取り出す。

だが、電源がつかないみたいだ。「くそ、ああ・・・・・・・・どうすりゃいいんだ・・・・・・・・」

数秒そこに立ち止まつた後、身を翻すように、そこから離れる。

「とりあえず、麻^{まのん}暖に連絡しておくか・・・・・・・・」

そう、呟きながら、男はエレベーターの方に向かっていった。

同日 午前12時01分

天貝家 本家 屋敷

「ふー、やつと外に出れたって感じがするなー。」正和はそう言う
と、伸びをしながら、欠伸をしている。「外って言うても、今まで
ずっと外にいたじゃん。」「んー、でもなんか、息苦しいって感じ
がしたんだよなー。あー、肩凝ったなー。」肩を回している正和を、
後ろからボン、とタツクルする炎宿魔。「なあに年寄りみたいなこ
と云ってんの！まだまだ若いんだから！これくらいでへこたれてど
うすんの。」腰に手を当てながらそう語る炎宿魔。「お前はもつと
精神年齢下げろって！元気すぎるんだよ、バア力！」それを聞いた
炎宿魔は、すかさず正和に近づいて、……コメカミのあたり
をぐりぐりぐり。

正和に、言葉に出来ない痛みが、伝わる。相当強いようだ、炎宿魔
のは。「わあった！悪かったよ、許してくれー、いってえーよ馬
鹿。おーい、このちびガキ！離せ！！」

ぐりぐりぐり、ぐりぐりぐり。

予想以上の痛み、正和は、ギブアップを宣言する。「わりー、ギ
ブ！いってーよ！おい！」

すると炎宿魔は、ぱつと、正和を解放して、思いつき蹴り飛ばす。
哀れにも、ゴロゴロゴロ……と転がっていく。（注・んなわけあ
りません）

「はあ……はあ……いってえよ馬鹿！殺す気か！？」炎宿魔は、
両手のひらを、パンパン、と叩く。「大袈裟だって、正ちゃん……
。このくらいでギブなんて言ったらおじいちゃんの罰には耐えら
れないよー？」炎宿魔は、今までの数々の体罰を思い出しているよ

うだ。

時折、顔を青ざめたり、身震いしたりしていた。だが、正和は、あつはあつはつと、笑いながら炎宿魔の肩を叩く。

「何言ってるんだよ！馬鹿！俺は今日は客だぞ。そんなんに怯える必要ねーじゃねえか。」

ごもつともな話だった。だが、炎宿魔と揺決理は、そうは思っていないようだ。

哀れみの目

悲しみの目（どんな目だ？）

諦める、と訴えているような目

その視線を感じて、なぜか声のトーンが落ちていく正和。「お、おいおい。おまえのじーちゃんは、遊びに来た友人をぶん殴るような奴なのか？こ、こえーなあ・・・」知らない、と、笑いながら返す炎宿魔と揺決理。

「まあ、それはともかく、おじい様は、今日は機嫌が良いみたいよ？」揺決理が、上機嫌に話している。よほど、嬉しいことなのだろうか？

・・・・・・。

「あれ？あのうつさいじじいがある？珍しいね？」笑いながらそう答える炎宿魔。

・・・・・・・・・・。

「よかったねえ！正ちゃん！多分おじいちゃん、今日のパーティーが嬉しいんだよ！なんだかん言つて、嬉しいんだな〜、いつもは庭をぶらぶらしてるだけだもん！あつはははは。まあ、9人しかないけどね。」

・・・・・・・・・・、あいつ。

「何だよ〜、うるせえな。俺は全然平気だぜ！？ぶるってる訳じゃネーよ！」

・・・・・・・・・・まだ生きてやがんのか・・。

「でも、おじい様って、・・・その、気難しい方・・・と、聞きました。何か無礼があったらたいへんですね・・・。」おどおどと話す美由紀。

・・・。

「大丈夫よ、そんなに気張らなくても。確かに小さいことには五月蠅い人だけだね？でも、客人には優しいのよ？とつても。」と、揺れ決りが、安心させるように、美由紀を見る。美由紀は、それで安心したようだった。

．．．．．まだ、生きてんのか。畜生．．ま、そりやそうだがよ。

殺す．．しかねえな。

「盛多さん？」

「！？、ああ．．ごめん。聞いていなかったよ。なんだ？」脂汗をたっぷりかいている盛多、顔色も、良くないようだった。「大丈夫かよ？やっぱ、昨日飲みすぎたんだろ．．馬鹿だな。」

「何！？正ちゃん！昨日お酒飲んだの！？あちゃー、それは大変だわー。」と、青ざめた顔をする炎宿魔。

「な、なんだよ、俺じゃねえ、こいつらが．．」

揺決理が、すつと、後ろから現れる。「じつはね、おじい様は、．．お酒が大嫌いなよ。だから、酔ってる人を見たら、殴り倒してやるわ．．とか、本気で考えていたみたいよ？」と、含み笑いをする揺決理。だが、正和は、ニヤニヤしている。「だってよお、お二人さん？」と、顔を後ろに向ける。

盛多と美由紀は……

「うう……やっぱ飲まなきゃよかったな……。」「じ、実は……まだ、気持ち悪い……。」

と、青ざめている2人を見て、揺決理と炎宿魔は、目が点。

「「あ、こつちか。」と、2人同時に言った。

正和は、げらげらと、笑い転げている。

話ながら館に向かっていくと、大きな門が現れる。

かなり古風で、レトロな雰囲気だ。だが、横にインターホンのようなものが付いているので、ムードぶち壊しなわけだが。

ピンポン……とは違う、なんだこれ？「おい、このチャイムなんだ？なんか……ういゝんごゝんじゃゝんぼゝん、って音がしたぞ。」正和が、面白がつて、もう一度ボタンを押そうとする。「はいはい、子供みたいなことしない。」

と、ギリギリのところまで、揺決理がその指を掴み、少し捻る。「あ、いってえ！この馬鹿。」

「あんたら……似てるわね。」ぽけ、つと間抜け顔をしていた炎宿魔と、指を痛そうにしている正和が、一斉に「誰がこんな奴と！？」と叫ぶ。

「私みたいに、知的で優雅な女性がこんな奴と似るわけないでしょ！？」

どこがだ。（揺決理）

「俺はこんなガキみたいな女は合わねえんだよ馬鹿！俺はクールでニヒルなダンディガイだぜ？」

どこがだ（盛多・揺決理）

第一、クールでニヒルなダンディガイって・・・なんだこいつ？
という目で正和を見ている3人。自分で言っ、少し恥ずかしかったのか、少し顔を赤らめる正和。

「全く、騒がしいな。」
インターホンから、低い声がする。・・・気づかない。誰も。

「・・・。」相手は、馬鹿馬鹿しくなったのか、ガチャッと切ってしまった。

「ああ、冗談だよ！立向路」。炎宿魔は、大笑いしながら、再び、チャイムを押す。
屋敷の中に、ういゝんごゝんじゃゝんぼゝんと、（正和ver）響き渡った。

ガヤガヤ五月蠅い4人は、ようやく屋敷の中に（といっても庭だ。）入る。この庭だけでも、歩いて一周するのに、30分以上はかかる。「ひえゝ大きいですね！。」美由紀が、声を荒げる。はじめてみるぐらい、大きな庭だったので、当然の反応だ。だが、美由紀は、それと同時に、少し簡素な印象を受ける。
庭のはずだが、辺りにあるのは濃緑で彩られていて、広いだけが取り柄のように見えてしまう。もちろん、そんなことは、口が裂けても言えないのだが。

「しょぼいって、思いましたか？」そんな美由紀を察したのか、炎宿魔が美由紀に声をかける。「い、いえ！そんなことは・・・。」否

定する美由紀だったが、炎宿魔は、左右に首を振る。「気にしないでください。あたしもそう思っていますから。でも、裏はすごいんですよ。あとで見に行きましょうよ?」「ほんとですか!?わー、楽しみです!」

キャツキヤと騒ぐ2人を見て、うるせえ女共だな・・・と、呟く正和。

もちろん、炎宿魔が、それを聞き逃すわけはなかった。「正ちゃん。またやるう?さっきの。結構自信あるんだよ?痛かったでしょ?昔それでね、立向路と信ちゃんのおしおきをあたしがやってたんだよー。正ちゃんのおしおきなら、喜んで引き受けるよ」。」「お、おい!勘弁してくれよ。」と、そこに、後ろから揺決理が。「でも、結局信他と立向路に仕返しされちゃったのよね?炎宿魔。」もお、ぶち壊しだよ!と、炎宿魔が声を荒げる。

「でも、お屋敷の裏は、どうなってるんですか?」美由紀が、揺決理に聞いてみた?

「ああ、庭園のこと?綺麗よ。、とても。初めて見たときは・・・驚いたわ。」

揺決理は、遠いところを見るように、目を細める。何かを思い出しているようだった。

「そうなんですか・・・早く見てみたいなあ。」「・・・・・・。」正和は、少し嫌な顔をする。面倒臭がつている・・・わけではないようだ。本当に・・・嫌悪感を露にしている。「正ちゃん?どうしたの?」「いや、めんどくせえ、ただだよ。揺決理、部屋は用意してくれんだろ?」「ええ。」揺決理は、ポケットから、鍵を取り出す。それを、正和に投げる。慌てながら、それを受け取る。「ったく、ありがとよ。これ、何階だ?」鍵には、部屋番号すらも、書かれていない。さびもくもりもない、真新しいものようだ。「それ、昨日作ったスぺアなのよ?1階の、4号室・・・よ。多分。」少し口こもったのが分かったが、大雑把な性格なのか、正和は無視をする。「俺と・・・美由紀はどこなんだ?炎宿魔ちゃん。」「え?

ええ、と……お姉ちゃんパス！」はいはと、ため息をついて、似たような……というよりほぼ同じ形状の鍵を取り出す。「はい、どうぞ。美由紀さんは、2号室を。盛多さんは、3号室を使ってください。」

「なあ。」揺決理が、盛多と美由紀の鍵を渡す瞬間に、それを止める。「え？何よ。」

正和が、その鍵を……手にとって凝視する。

「なあ……ここつて、屋敷だろ？ただの。」頭の上に？マーク……なんてものではないが、みんな不思議に思っているようだ。

「正和さんにとっての「普通」っていうのがよく分からないんだけど……。」「ん？ああ、いや、ここは金とって商売でもしてんのか？」4人は、はあ？つて顔をしている。「するわけないでしょう？おじい様が認めるわけじゃないじゃない。ただ、家として使っているだけよ？これが、あなたの言う「普通」？」ああ……と答える正和。腕を組んで何かを考えているようだった。「……ここ、普通の家なんだろ？本当に部屋番号とかあんのか？」「え？……ないわよ。貴方たちが来るから、実は今作ったの。」……。正和は、それでも何か考えているようだった。「……なあ、俺の部屋、3号室に変えてくれないか？」

またも、はあ？という声を上げる4人。「まあ、別にいいわよ？」盛多と、正和は、鍵を取り替えている。

「わりいな。」正和は、ひっひっひひひ、と笑う。

「どうしたの？正ちゃん。何々？密室殺人とか、猟奇殺人とか、憧れるタイプ？大丈夫だよお、隠し扉とか、怪しげななんとかとかないから！」「何だよ……怪しげななんとかって。」にやはははは、と笑っている炎宿魔。

ってかなんだよこのフラグ。

と、誰かが心の中で呟いていた。

密室殺人・・・か、なるほど。そうか、なるほど。

だが、そんなことする意味・・・あんだろっか？

なんで小説の中の犯人は、わざわざ密室やら不可能犯罪・・・なんてももの、作り出すんだろっか・・・。

まあ、答えは簡単だ。要するに、その登場人物にとっては、捕まりたくない・・・幸せを掴みたい・・・とか、そんな理由だろっか。逆に、作者・・・つまり小説を書いてる奴にしてみれば、娯楽だも

んな・・・。

でも、本当の現実には、そんなことができんのかって、考えちゃうよな。科学的・・・だとか、時間差・・・だとか。専門的な奴なら考え付くかもしれないが、憎んでるから殺すって考えている奴が、そんな密室だとか考えるのか？

いや、考えるか。

焦ってはいるが、冷静に、ってやつか？

だったら・・・誰でもできんのか？誰でも・・・。

そんなわけ・・・ないよな。小説は所詮小説。現実世界で、そんなことできるはずがないんだ。糸を使って・・・だとか、通風孔から・・・とかって、よくあるけどな。いや・・・でもなんだろうな・・・できないものなのか・・・

下見・・・か。

そうか、普通はそういう密室とかを作るとき、当たり前だが、下見をするんだよな。てか、何かやるのに、下見は当たり前か。

どの位置に何があって、それならここが・・・とか、温度がどうか・・・って、俺は小説とか読まないから、よく分からんな。

できる・・・のか？

なら……、そうだな……。

「すまないが……。」「え？」みんなで、屋敷の裏側を周りう
 と言ったことになっていたが、盛多は、それをパスする。見ると、と
 も気分が悪そうだ。

「そうですか？じゃあ、部屋に案内します。じゃ、正ちゃん！その後に行こう！ね、みんな。」

「いはははははははははは！」

盛多と炎宿魔が屋敷に向かつていつて、見えなくなった瞬間に、正和は、軽快に笑い出した。

「ど、どうしたのよ？ 気持ち悪いわよ？ 正和さん。」「うるせえー。ああーくだらねえ、くだらねえー。さてと、俺らも部屋に行くかな。揺決理、部屋、どこにあるのか教えてくれないか？」「一緒に行け

ばよかったじゃない。まあ、いいわよ、こっち。美由紀さんも教えますから、付いてきたください。」

はあい、と、元気な返事。

2階の窓・・・つまり、盛多が使っている部屋から、誰かがその様子を、じっと見ている。

盛多が使っているのだから、その「誰か」とは間違いなく、盛多だった。

正和は気がついていたらみたいだが、誰かまでは分からなかった。

Part 5 Feeling . . . it (前書き)

わーい、書くのとても楽しいです！

需要ないけ書くの楽しいから気にしません！

下手糞だけど書くの楽しいから気にしません！

(いや、しろよ！ww)

なんか全然話進んでないですけど一話一万文字程度ですので．．．。

┐

3人は、そのままそのまま留まっていたても仕方ないと思ったのか、屋敷に向かうことにしたようだ。じやりじやり、と、音を立てて、屋敷に向かう3人。

「ん？」

正和はあるものを見つける。
「あるもの」を。

それは、最初はガラスの破片かと思っていた。太陽の光によって光り輝いていたからだ。

正和は、それに近づいてみる。

すると、小さなわっかなようなものだという事に気がつく。

「・・・・・・指輪？誰のだ？」

それは指輪だった。子供がつけるような小さな指輪。大人では嵌めることの出来ない、小さい指輪だった。

だが、正和はそれを手に取ってみて気がついた。

これは、本物ではない、と。

安くて100円。高くて3、400円で売っていそうな・・・・そんな指輪だった。

上の方についているのも、多分ダイヤとかではなく・・・・ガラスだ。
「・・・・・・」

「おい、これ、お前のか？」「え？」

正和は、それを、揺決理に手渡した。だが、揺決理は、何も知らないようだった。

「何よ、それ、おもちゃ？」「みたい・・・だな。」

一応落としたのかと思い、美由紀に聞いてみたが、知らないみたいだった。

（ま、いつか。）

正和は、あとで誰のか分かるだろう・・・と思い、ポケットに仕舞いこんだ。

そんなことをしているうちに、ようやく屋敷の入り口に着いた。

揺決理は、重い扉を、両手で思いつ切り力を入れて開ける。

かなり重そうだった。

「なあ、この扉、なんでこんな重いんだ？」「確か・・・雨や、なんか・・・はあ・・・が！入ってこないようにツッて！聞いた・・・わっ・・・はあ・・・。」

あ、悪い、手伝う。っと言つて、扉を開けるのを手伝う正和。

ガチャアン！

と、大きな音を立てて、3人は屋敷の中に入る。

天貝家、本家のお屋敷は、なんだかくすぶったような臭い・・・といえはいいのか・・・生活臭とはまた違った、独特な臭いが、屋敷中に充満していた。

正和、美由紀は顔を竦める。

揺決理は、くすくす、と笑った後、「すぐに慣れるわ。もっとも、私は慣れたくなかったわ。」などと言っていた。

入った瞬間に気づいたのだが・・・まず、全体的に暗いと、正和は感じた。

シャンデリアのようなものが、一応あるが、明かりはわずかで、照明の役割を果たしていない。

窓の方は、カーテンを閉め切っていて日差しが入り込んでこないの
で、夜みたいだ。

唯一、明かりと呼べるものが、所々に飾ってある電気スタンドだ。
こちら、かなりレトロで、高価なものようだ。

美由紀が、触れようとして、

「触らない方がいいわよ？ 割ったらあなたの財産、半分は減っちゃ
うかね？」

と、揺決理が言つて、美由紀はさつと手を引いた。

もつとも、その後に正和がその言葉を聞いて「なるほど」こんなも
んがそんなにすんのかあ」などと言つて持ち上げていたのだが。

そうして、ようやく部屋に案内される。

この屋敷は、広い広さのわりには、あまり部屋がないようだった。

現に、今、3人が通つてきた通路には、淘汰が使っている書斎しか
なかった。

だが、ここには、部屋が4つならんでいる。「ここは客人用だから、
適当に家具とかは揃つてゐるわ。テレビとか・・・冷蔵庫とかは。も
ちろん、トイレも付いているわ。」

揺決理は、（マスターキーか、何かだろうか）・・・とりあえず、
その部屋を開ける。

中は、一人用だしたら、かなり広い、場所だった。

ダブルベッドだったので、2人で泊まっても十分通用するところの
ようだった。

テレビも、最新型で、今流行り（か、どうかは知りません。あくま
でも「正和」の視点で、です）のプラズマテレビだった。

金持ちは違うな・・・と、正和が一人で勝手に思っていると、「ほ
ら、荷物置きなさいよ。ここはあなたの部屋よ？」

揺決理は、そういつて入室を促す。

「はいよ……。着替えるからみるんじゃねえぞ？ひっひひ。」
「あら？見ちゃおうかしら？私、男の人の裸見ると興奮しちゃって・
・・・」

急に頭殴りたくなるのよね！！」

ボガッ！と鈍い音がしたあと、正和が、頭を抑える。

美由紀は、なぜか、苦笑いをして、その場に立つたままだ。

正和が、中に入り、扉を閉める。

「ふー。」ため息を一つつくと、ベッドに勢いよく飛び込んで・
・
顔をぶつける。

誰かが居たなら、絶対に笑いが起こる。
間違いなく。

だが、当たり前だが笑わない。

なぜか、正和は悲しい顔をしている。

一人だからだろうか？痛かったからだろうか？

いや、多分違う。

もっと、深い深い理由がある……。
なぜなら、正和は、

涙を一滴、頬に伝わせていたからだ。

「全員、部屋に招いたわ。後で裏の庭園に連れて行くつもり。」
「……。」

淘汰の書斎は、相変わらずギスギスとした雰囲気で、埋め尽くされている。

ここに立ち入るだけで、どんな者でも、息苦しさを感じるであろう。
現に、揺決理も、そう思っている。早くここを立ち去りたいと。本気でそう思っている。

「なあ、揺決理よ。」

揺決理は、気弱な淘汰の声に少し驚く。「何ですか？おじい様。」

「……。」しばらく、無言の時間が続いたが、重苦しい空気を切り裂くように、淘汰が口を開く。

「・・・・・・・・。」言葉を詰まらせたのか？それとも何か別のことを言いたかったのか……。

「・・・・・・・・早く、正和君達を、庭園に連れて行ってあげなさい。」やはり、変だ、と揺決理は思った。

この前から、淘汰の様子が、どんどんおかしくなっている。

あの気難しく、誰にも心を開こうとしない淘汰が……。

「・・・・・・・・。」

揺決理は、なぜか不吉なものを感じた気がした。

気のせいだろう。きっと。

自分の心に、そう言い聞かせる。

気のせいだといいいね？

誰かがそう言った「気がした」。

同日 午後12時50分

天貝家 本家 屋敷

裏庭園

「うわ~~~~!!!!本当に綺麗ですね!!!!」

美由紀は、感涙の声をあげる。普段、花など、あまり見ることもないようだったので、本人はとても新鮮な感じがしたみたいだ。

美由紀、揺決理、正和、炎宿魔の4人は、裏の庭園へ訪れに来ていた。

幾重にも咲く花達。

風が舞うたびに、花びらが一枚一枚・・・散っていく・・・。とても、鮮やかで・・・とても美しい。言葉では表せない・・・と

というのが、とても言いすぎではない、4人は、そう思っている。

「・・・、ここはもう何回来たんだろううゝなあ。もう100、いや、200回ぐらい来てるかな・・・。」炎宿魔が、そう口にする。

「へゝ、炎宿魔は、花になんか興味ないって思ってたんだけどな。」正和が茶化すが、炎宿魔はそれを無視して、話を続ける。

「何か嫌なことがあったらね？ここにくると、気持ちが安らぐんだ・・・。」炎宿魔は、どこか遠くを見つめているように、目を細める。なぜだろう・・・。

正和は、それを、とても悲しんでいるように見えて、仕方がなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

美由紀は、庭園の奥の方に、道のようなものを、見つける。いや、それは道ではなく、森の中を、人が歩いたから、道になった。そんなようなところだった。

「？、なんだろ。」

3人は、仲良くじゃれあってるみたいだった。

美由紀は、好奇心に負けて、進んでいくことにする。

周りは、草木が生い茂っていて、とてもじゃないが、歩いて・・・という進み方ではない。

美由紀は、それを手で払いのけながら、進んでいく。なぜ、戻らないのか？

自分でも不思議に思っているが、美由紀は、はつきり見たのだ。「それ」を。

「人影」のようなものを、はっきりと見つけたのだ。だから、それを追って、ひたすら進む。3人のこと等、すっかり忘れてしまっているようだった。

1分・・・も経っただろうか？

すぐに、広いところに出る。広いと言っても、庭のような広さではない。

周りは、大きくて長い木に囲まれていて、ここがどこか、方向感覚を失ってしまいそうなところだ。

美由紀は、来た道の特徴を見つけると、再び進んでいく。

「あの・・・。」

人影は、50メートルぐらい先に立ち止まっている。

何か、ぶつぶつと、話しているみたいだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

気がついていないみたいだ。

美由紀は、さらに近づいてみる。

「うん・・・そう。大丈夫、彼に協力を頼んだから・・・。きっと解決してみせる。」

絶対に・・・ね。じゃあ、また連絡する。館だとね、電波が届かないから、あの電話は使いたくないからね、じゃあ。」

「あの〜?」

彼女は、携帯電話で、電話をしていたみたいだ。

バツと、美由紀に振り返る。冷や汗をかいているみたいだった。

彼女は、天貝 狩煉だ。

「あれ？」

庭園で雑談をしていた3人は、ようやく美由紀が居なくなつたのが気がついたみたいだった。

炎宿魔が、小首を傾げた後、まわりをきょろきょろと見渡す。

「先に帰つたんじゃないの？俺達も帰ろうぜ？」と、があゝと大きな欠伸をしながら答える正和。

「そうかしら？美由紀さん、先に帰ってしまうような人じゃないと思うわよ？」

揺決理も、奥の茂みの方へ行き、草木を掻き分けながら、美由紀を探す。

正和は、ただぼーっとしているだけだ。

その後、再び正面の庭にも出てみたが、美由紀の姿はなかった。

3人は諦めて、屋敷に帰ろうとしたときだった。

「あら？」

揺決理が、突然声を上げる。

自分のポケットを弄っているようだった。「んー？どうかしたか？」それに気がついた正和は、揺決理に声をかける。

正和は、適当に揺決理を茶化していたが、揺決理は、あたかも聞こえていないように無視をしている。

「あら、おかしいわね。どこかに落としたのかしら？」

後ろを振り向いて、辺りを見回すが、あるのは小石や、古ぼけた石版……のようなものだけだった。

「どうしたの？お姉ちゃん。」

炎宿魔は、づけづけと一人歩いていたが、2人がついてこないことがわかって、2人のところに走ってくる。

「月光蝶……落としちゃったみたいなの。困ったわ……どうしましょ。」

↑ンライト
月光蝶

天貝家では、天貝家の証として、月の形を模った、ペンダントを一人に、ひとつ、渡される。

金色に光り輝いていて、三日月の形をしたものである。

天貝家の人間なら、必ず持っているものらしいが、何に使うのか？
そもそもなぜ持っていなければいけないのか？

それすらも、子供達には分からなかった。

だが、とても高価なものであることは、見た目からも分かったので、子供達は、それを大切にしていた。

「どっかに落としたんじゃないの？ってか、三日月の形してんだから、ポケットなんかに入れたら痛えだろ？角が当たって。」

なぜか揺決理は、その言葉に違和感を覚えたが、今は関係ないと思いい、その違和感を拭い去る。

「そうでもないわよ？と、いうより全く気にならなかったわ。」

「私みたいに、ちゃんとつけてればよかったのに。」そう言いながら、炎宿魔は、腰に手を当てながら、首にかかっている月光蝶を、揺決理に見せ付ける。

「嫌よ、あんなもの・・・。」

揺決理は、なぜか嫌悪感を見せる。

炎宿魔のほうに視線がいつてるが、炎宿魔にではない。首にかかった月光蝶にだ。

「お、美由紀じゃねえか！」

正和は、遠くの方に、2人の人影を見つける。

美由紀と、狩煉だ。

裏庭園から、ちょうど屋敷に帰る途中なのだろう、ゆっくりこちらに向かってくる。

「ごめんなさい、誰かが居た気がしたから、ついその後を・・・。そして、狩煉・・・さんが居て。」

美由紀は、居なくなったことに謝罪すると、気分が悪い、と言って一人で屋敷の方に戻っていつてしまった。

「それで？狩煉はなんでまたそんなところにいたのさ？」

炎宿魔が当然の質問をする。

「だって、お屋敷じゃ、携帯電話通じないでしょ？だから。」

「え！？何だよ・・・電波入んねえの？ここ。」

正和が、うげー、と奇声を発しながら、「不便だな。」と口にする。

「ええ、同感。」

と、続けて揺決理が。

「うん、確かに。」

と、今度は炎宿魔が。

やはり、誰もがこの屋敷の不便さを、毎日嘆いているようだった。

すると、当然の疑問が生まれる。

なぜ、この屋敷にいるんだ？

あとで聞いてみよう・・・。

そう正和は思っていたが・・・忘れやすい性格なのだろうか？

その質問は、全くされなかった。

「 。」

「あ……………ぐえ……………」
おじ。」

「な……………ぜ？」

「ぐえ、です、かつ！。」

びちゃ、ぐちゃ、と、汚らしい音が部屋中に響き渡る。

何の音・・・だろう？

水の音・・・だろうか？

いや、水なら、このような汚らしい音にはならないはずだ。

もっと汚い、汚物・・・のようなものだ。

どす黒くて、汚い、……「もの」。

だが、水の「ような」ものであることはわかる。

水？

いや、違う。

「ぐえ………が。」

部屋が、照らされる。

誰かが入ってきたのだろうか？

扉は、しまったままどころか、鍵もかかっている。
それなのに、なぜか、部屋が照らされる。

照明がついたのは誰にでも分かるが、一体なぜ？

それedyouやく、汚い「もの」の、正体が分かる。

血だ。

赤黒い、血。

人間の、血。

それは、見方を変えれば、綺麗、と呼べるのかもしれない。

「ひい、あが・・・・・・・・へあ・・・・・・・・ぐう。」

「何か」が、蠢いているが、人ではない。

いや、人であつたものが蠢いているのだ。

だって、それは、もう、・・・・・・・・

虫の息・・・と呼ぶにふさわしいものに成り下がった「人間」だったからだ。

同日 午後2時54分

本家 屋敷 厨房

それぞれ、6時まで、自由に過ごすこととなった。

6時に、1階食堂に集まることになったのだ。正和は、炎宿魔と一緒にいることにする。

炎宿魔は、前日に作ったシチュー（揺決理が作った）を、正和に振舞おうとしていたところだ。

「さあ！正ちゃん！暖めたよ！早く食べて。」

正和は、かなり驚く。

いつもカレーや、から揚げなどを作る炎宿魔だが、まず、色から明らかにおかしいのだ。

から揚げなのに黄色かったり、カレーなのに青に近い色が入り込んでいるのだ。

それに、臭いもおかしく、生ゴミ・・・と言つては失礼だが、生臭い臭いがするのだ。

だが、このシチューは違う。

色もごく普通。匂いもとてもおいしそうで、正和は、朝から何も食べていなかったため、食欲を誘う匂いに、我慢できなかった。

「うお！美味そうだな！食うぞ！」

銀のスプーンを手に取り、シチューに手をつける。

正和は、料理の評価などは、全く出来なかったが、少なくとも、美味いと言っただけはわかった。

と、いうより、明らかに炎宿魔が作ったものではないことを悟った。そのくらいは、正和にでもわかる。

（いつも××な料理を食べさせられている正和だからこそ分かったともいえるが。）

「どう！？正ちゃん！」

自分が作っていないのにもかかわらず、炎宿魔は正和に感想を求めている。

正和は、一瞬戸惑つてしまう。自分が、どんな感想を言えば、彼女を一番傷つけないかが、わからないのだ。下手にべた褒めして、自分が作っていないくて、ショックを受けるかもしれない。なんて返せばいいのだろう・・・。

だが、その言葉は、意外とすんなり出てきた。

「・・・・・・・・・・美味い。」

と、一言。

「え？・・・・・・・・あ、やっぱ！美味しいでしょ！色々工夫を凝らしてね〜〜・・」

炎宿魔は、自分が作ってもいないシチューを、適等に、自慢し始める。

訳の分からないでつち上げばかりだったが、それでも、正和は、微笑ましいと、感じていた。

「そういえばよ？」

正和は、シチューを全て食べ終わると、炎宿魔に向き直った。炎宿魔も、シチューを食べていて、まだ食べ終わっていないようだ。た。「何い？」「天貝家って、本家と分家があんだろ？なんで・・」と聞いても分からないだろうが、そもそも天貝家ってどんななんだ？」

「なんか、質問が意味不なんだけど・・まあ、いいや。詳しいことはよく知らないけど、天貝家はね？分家、本家でそれぞれ別れていて、普通に本家で生まれた人は本家へ。分家で生まれた人は分家へ。」

「それでね、当然・・ていうのはおかしいけど、天貝家は、本家のほうが、経済的にも他にも色々強いわけよ。まあ、商売上手なことじゃん？よくわからないけど。」

でもね、・・・・・・・・ん、」

そこで、なぜか、言葉を詰まらせ、炎宿魔は暗い顔をする。よつぽ
ど言いたくない話なのだろうか？

だが、正和は止めるどころか、先を促した。

「どうした？続けてくれよ。」

「うん、でね？本家の人がね、莫大な資金を賭けて・・・なんか、
戦争みたいなことしようとしてたみたいなの・・・。」

「当時は、第二次世界大戦がまだ終わって1、2年も経ってない頃
で・・・。なんか、GHQ・・・とか、マッカーサーとか？よくわ
かんないけど、戦争をやめさせようと・・・ってか、日本が反撃で
きないようにしようとしてたじゃん？

でもね、天貝家は、実は、その頃からその戦争とかに一枚噛んでた
みたいなの。それでね、色々それで信用を得たり、経済的にも裕福
になったりしてたみたいなんだ。

だから、戦争がなくなるっていうのは、平和になるからいいかもし
れないけどさ、天貝家にとっては貧乏になるから嫌だったみたい。
だから、とんでもないお金を賭けて、どうにか続けさせようとした
んだって・・・。

まあ、失敗したわけだけどね。」

考えてみれば、そりゃそうだ、ってな話だ。

たかが日本の中の富豪の家のひとつが、戦争やろうー！なーんて叫
んでも、不可能なことだ。

いくら金を弾んでいたとしても、当時を考えたら、誰も協力するわ
けがないんだ。

「んー、まあ、確かにそれで形成立ててたんなら、確かに嫌だよな。
職失って右往左往してんのと一緒にだ。それとは規模が違うけど。」

んでもよ？そしたら天貝家も戦争に巻き込まれてやばいんじゃないか？」

「あ、えーとね、天貝家はかなり頭良かった・・って、変な言い方だけど、天貝家本家は皇居の近く、つまり、東京の天皇陛下の近くに住んでいたの。だから、巻き込まれる心配がなかったんだよ。それと、分家は京都に住んでいたから、爆弾も落ちなかったし。」

アメリカは、あくまでも日本を降参させたくて、戦争を続けていた（もちろん裏では諸々の事情があったとは思うが、この説を立てておけば、天貝家の事件との辻褄が合うために、こういうことにしておく。）

すなわち、皇居、つまり天皇陛下のところには、爆弾を落とせないアメリカにとつて、ここはかなりの安全地帯なわけだ。それを、天貝家が、無理やり買収して、手に入れたわけだ。同様に、京都のお寺などにも、落とせないのだ。（簡単に説明すると、天皇や、歴史的建造物を傷つける、または殺す、壊すと、日本人は、死ぬまで戦争をやめないだろう、と、アメリカ側が解釈していたためだ。当たり前だが、本当にそうなのかは誰にもわからない。）

「なるほど、狡賢かったわけか。」「うん。まあ、戦争やって欲しかったわけだよ。天貝家は。ほんと、最悪。」

「んで？」

炎宿魔は、この話に不快感を露にするも、尚も先を促す正和。やめない？と、提案するも、正和は拒否する。

「頼む、教えてくれ。」

そう言われては、炎宿魔も断れない。しづしづ了解して、話し始める。

「だから、結局天貝家の戦争復帰作戦は見事に失敗！ってなわけ。実はね

これ、提案したの本家だったの。資金とかもほとんど本家が出して

いたの。ってか、本家の人は、あんまり頭よくなかったみたいだよ？実際、皇居の近くに住もう、って言ったの分家だしね。本家はね、アメリカに勝てるとか本気で思っていたらしいよ・・・えーと・・・あれ、使つて。」

「ん？あれ？」

「貧者の核爆弾・・・って言えば分かる？」

「ああ・・・わかったよ。」

細菌兵器のことだ。

細菌兵器は、核爆弾なんかよりも、安価で手に入れられて、扱いにくい、成功すれば、国ひとつを滅ぼすこともできるほど、恐ろしい兵器だ。

敵国に攻撃をする反面に、自分の身を守らなくてはならないので、ほとんどの生物兵器は、治療法が確立されている。

オカルトや、SFなんかに使われることがあるため、空想上のもの、という印象が強いが、実際は、民間でも培養しようとすれば出来る。そのぐらい危険なものなのだ。

「日本でも、その研究に力を入れてたみたいでね、色々研究してたみたい。そこで、目をつけたのが・・・」
そこで、正和は口を挟む。

「天貝家ってわけか……。」

「うん、そう。天貝家はその研究に資金を用意したの。なんかもうすごい量をね。これでアメリカを、みたいなこと考えていたみたいだけど、ぶっちゃけ、研究は成功どころか、失敗のばっかりで、全く上手くないまま、お金ばかり、使って……。」

政府ってか、日本もその研究を放棄しちゃって、結局天貝家は、お金だけ使って、気づけば全く無意味だったんだよ。でも、大量にお金を使ったのは、本家だから、分家はまだ立ち直れるほどお金を持ってたみたいだよ。

それで、……。まあ、もう言わなくても分かるよね？」

「ん？ああ……分かる。」

炎宿魔は、もう話したくない……という素振りを見せる。

なぜか、この話は炎宿魔は異様に嫌がる。正和は、無理やり聞いたことを謝った。

「悪かった。」

気にしないで、と、炎宿魔が言うと、後は他愛のない話ばかりだった。

その内容は……

「でさ？起動船隊ガールブランなんだけど、今週の少年グングン読んだ？」「ああ、立ち読みしたな。ケ빈はあそこで生きかえんのは販促だろ？」

「なんでよ！ケビンかつこいいじゃん！絶対にカスミあれラブラブになるよ！絶対！」

「いやーかつこいいのはわかるんだが若干中二くさかったなあ……あそこで、

生きててよかった！ケビン、俺は何度も蘇るぜ！ってなあ……」

「なんでよ！あのおもしろさが分からないなんて……正ちゃんはまだ子供だな〜！」

「……そうか？」

「うん！」

しばらく、こんな感じの会話で盛り上がったのだった………。

「そういえばさあ、正ちゃん。」
「ん？なんだよ？」

「信他を呼んできてよ。全然話聞いてくれなくて……もしかしたら正ちゃんなら大丈夫かも知れないじゃん？お願い！」

「ん、まあいいか。1階だっけか？行ってくるな。」

「うん！はい！」

「おう！じゃあな。」

出て行った厨房に、内線電話が鳴り響く。

そして、数秒後、鳴り止む。

厨房の奥には、食料などをしまい込む倉庫があるのだが、その中に、人影がある。

いや、それは人影なのだろうか？

人なのだろうか？

それすらも、分らない「影」だった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

P a r t 6 l i e o r t h e t r u t h o r a f a n t a s y

ノ
ー
コ
メ
ン
ト
で
w
w
w
w
w
w
w
w
w

天貝家の人たちの部屋は、まとまってあるようだった。

一番左から、炎宿魔、信他、立向路、揺決理、狩煉となつていようだ。それぞれ、部屋の前に、ネームプレートが立てかけてあるみたいだ。

炎宿魔は、ローマ字で、HIYAMA!と、カラフルなモールか何かで作られている。

立向路と信他はそのまま漢字でだ。揺決理は、不思議な字体で書かれている。

狩煉は、ビーズか、何かで、かれん、とひらがなで書かれているみたいだ。

正和は、信他の部屋の前で、立ち止まる。

「ん？」

ふと、炎宿魔の部屋の扉を見ながら、何かの違和感に気づく。

いや、違和感がすることに気がついた……。何かが変だ。なんだろう……。

この違和感は……。

「んー、まあ、いいか。」

サバサバとした性格の正和にとって、どうでもいいみたいだ。

コンコン、と、正和は信他の部屋の扉を叩く。

「・・・・・・・・誰？」

無愛想な、低い声だ。でも、間違えなく信他だ。

なんだろう、また違和感だ。

「お？信他か？俺だ俺、正和。久しぶりだな！」

「・・・・・・・・・・。」

向こうは、全く何も言い返してこない。困っているようだった。

「どうしたんだ？何かあったのか？」

正和は、急に心配になる。

「別に、なんでもないよ。」

・・・・・・・・・・。

「はあ・・・・・・・・。」

正和は、ため息をひとつ、つく。

結局、信他は来なかったみたいだ。炎宿魔になんて返そうか、考えているみたいだ。

「ったく・・・・・・・・炎宿魔になんて言おうか・・・・・・・・ったく。」

ぬっと、炎宿魔が後ろから現れる。

「んで、結局来なかったわけね……。」「うお！脅かすなよ……。」「ニヤニヤ、と笑っている炎宿魔。」「な、なんだよ。」「別に？」

「お、おい！なんだよ！教えてくれよ！」嫌だね、と言いながら逃げ回る炎宿魔。それを追いかける正和。

屋敷の廊下を、ドタドタと、音を立てながら走り回る2人。

「いい加減に……。しなさーい！」

まあ、怒られるのは当然なわけで。

「うるさいじゃない。全く……。」「

髪を掻き分けながら、揺決理は2人を見下ろす。背丈は高い方の揺決理は、2人は十分見下ろせるほどの目の位置だ。

「にやははは。ごめんね、お姉ちゃん。」「

「わ、わりい。」「

揺決理は、「はー」、とため息をつく、と、よろめきながら、頭を抱えて部屋に戻っていつてしまった。「お姉ちゃんどうしたのかな？なんか疲れてるみたいなんだけど……。」「

「生理が来てねーんじゃねえか？」「

バゴッ！！！！！！！

ご想像にお任せします・・・。

「あれ？」

炎宿魔は、廊下のまつすぐ突き当たりのところに、美由紀と、盛多を見つける。2人で談笑しているみたいだったが、どこことなく表情が重かった。

なんていうのだろう・・・何か秘密の話でもしてるんじゃないだろうか・・・。

「いやいや、なんで秘密の話になるんだ？あんな暗い顔で。」

と、言いながら呆れ顔をする正和。

「なんだろうー、気になるね！」ニコニコと、笑っている炎宿魔。その様子に、向こうも気がついたようだった。

盛多が、おーい、と声をかけている。なんとも長い廊下だ。家の中で、おーい、と声を出さなければいけないのだから。

気まずい雰囲気だったが、正和と炎宿魔は盛多達に近づいていく。呼んでいるみたいだったので、行かない理由もない2人は、そのまま盛多達の談笑に加わる。

「もう、気分は大丈夫なんですか？盛多さん」

炎宿魔が、聞くと「いやぁーお恥ずかしい。昨日の飲みすぎがー、なんて、理由にもならないな、ははは。」

盛多は、カラカラ、と笑いながら頭を掻いている。炎宿魔も、それを聞いて、愛想笑いをしている。

「あの、炎宿魔さん？ここは、他に観光できることはありませんか？」

と、言いながら、右の肘を摩っている美由紀。炎宿魔は、ああ・・・と言いながら、東の方向に指を刺す。「えーと、こっちに行くとこの屋敷のセキユリテイルームみたいなのに入れますよ。ここ、見るところなんて裏の庭園ぐらいしかないんで、まあ、楽しくはないですけど・・・。」

そう炎宿魔は言っているが、行きたいです！、と答える美由紀。面白そうだったので、正和と盛多もついていくことになった。

少し廊下を歩くと（と、いつても家の中とは思えない長さだ。）―― 実際立つドアが、見えてくる。

銀色・・・というのだろうか？今までの全ての扉は、木製で、レトロな雰囲気だったのだが、この部屋の扉は、全く違うのだ。

自動ドアで、がー、という無機質な音を立てながら、扉が横にスライドする。

「やべー、なんか映画かなんかに出てくる部屋みたいだなー。」

正和でも初めて入る部屋、それに液晶モニターや、何かを操作するためのスイッチなどが、所狭しと並んでいるんおに、驚いているみたいだった。「ここはね、まあ、言わなくてもわかるよね？本来は、使用人しか入らないんだけど、今日はいないから特別にね。」

小さな液晶モニターには、色々な場所が映し出されている。

「部屋の中も映るのか？」盛多が、色々なモニターを見回しながら言った。

「いえ、部屋の中はさすがに……」
「ん？なんだー？盛多は何をそんなに気にしているんだ？んー？なんか部屋の中見られて困ることでもあんのかよ？」

ここぞとばかりに正和が囁し立てる。「い、いや、そういう意味じゃ……」
「焦り顔をして、盛多が否定するが、それが逆に興味をそられたようだ。（ただからかっているだけだ。）
しばらく、そんな話題が長く続いていた……」

「廊下に監視カメラみたいなのありませんでしたけど……」
「美由紀が、炎宿魔にそれとなく聞くと……」
「ああ……壁の後ろに隠れているんですよ。おじいちゃんが機械とか嫌いな人なので……」
「もつとも、カメラだけで、ロクに警備対策なんて全くないんだけどね。」

と、答える。「んでもよ？十分だろ？こんだけカメラありや、不審者も入ってこれねーんじゃねえか？」
正和が、モニターをボン、ボンと叩きながら色々なスイッチを弄くっているようだ。「ああ……ちよつと、あんまり変なことしないでね？あたしもよくわからないんだから。」

ポチ……、と、なにやら不吉な音がする。

「ん？……なんか今のボタン……カメラ切り替えるのと違ってたな……」

と、正和が深く考えずにいると……、

ヴィー、ヴィー、ヴィー……！！

というような音が、部屋中に……いや、屋敷中に響き渡った。

まあ、それが世界のお約束。

警報装置みたいだった。「有事」のさいに鳴らす、警報装置みたいだ。

「あ………！！！！ちよい待ち！！！！何やってんの、正ちゃん！？」

あたふたしながら、色々な機械を見て回っているみたいだったが、どれがこの警報装置を止めるためのボタンなのか全くわからない。それはそうだ。ここに来たことなんて数えるほどだ。ましてや、弄ったことなどないのだから。

「え〜と……あっはっははは。いや〜、悪い悪い。」頭を掻きながら、大口を開けて笑っている。涙目の炎宿魔を尻目に。

「いや〜、大変だね〜。」と、美由紀。

「ああ……大変だね〜。」と、盛多。

それぞれ他人事のように言っている。

ウィーン！

突然扉がスライドしたかと思うと・・・立向路と、揺決理が、姿を現す。それぞれ同じ顔をしている。

言葉で言うと・・・そう・・・憤怒？。

「何が、憤怒よ！憤怒って何よ！！早く止めなさいよ！！！」
揺決理がそう怒鳴ると、つかつか、と立向路がモニターのほうに歩いていって、下の方にある赤いボタンを押す。

警報装置は、それで鳴り止む。

耳に劈くような音は、鳴り止むと、変な雰囲気だ。

「ったく・・・いい加減にしてくれ。」

正和、炎宿魔、美由紀、盛多を、それぞれ睨む・・・。
4人は、ビクツと震え上がると、「ごめんなさい・・・。」と同時に謝る。

「全く・・・。」そう言うと、立向路はセキュリティームを踵を返して出て行ってしまった。

「ごめんね・・・お姉ちゃん・・・。」

炎宿魔は手を合わせながら、揺決理に許しをこいている。別に、揺決理はそこまで怒っているわけではなかったので、「いいわよ。もう、」と、言う、今度は正和の方に体を向ける。

「あ・な・た・は、許してないわよ？」

ニコ、と微笑んではいるが、目は間違いなく笑っていない・・・。

うを、怖い。

「ああ・・・、悪い。調子に乗りすぎたな・・・すまん。」

しばらく、揺決理に手玉にされては謝り、されては謝りの繰り返しが続いた・・・。

居心地が悪くなったのか・・・3人、正和、美由紀、盛多は、部屋に戻ることにしたようだ。
ぞろぞろ・・・、とセキュリテイルムを出て行く3人。

「ねえ、お姉ちゃん。」

悲しそうな顔をしながら、炎宿魔は揺決理を見る。「何よ？」

素っ気無く答えたつもりだったが、炎宿魔は構わず続ける。

「大丈夫・・・？」

「え？」

「なんでよ？」

「だってお姉ちゃん、とっても調子悪そうだから・・・。」

「・・・・・・・・。」

ハッと、驚いたような顔をする揺決理。

「・・・。そうね、ありがと、炎宿魔。」

そうして、揺決理は炎宿魔の頭を優しく撫でる・・・。

「あ、ええと、うう・・・でも死ぬかと思ったよー、うるさかったなーあの音！全くもう！正ちゃんは！」

「大丈夫よ。」

「え？」

揺決理は撫でるのをやめると、炎宿魔の目をじっと見る。

「あなたは絶対に死なせない。私の全てを賭けて・・・ね。」

「・・・。」

炎宿魔は、それを聞いて黙ってしまったようだ。揺決理は、炎宿魔を置いて、先にセキュリテイルムに出て行ってしまった。

出て行った先を・・・じつと見つめる炎宿魔。

ありえない・・・ありえないのだ・・・。

炎宿魔があれほどにまで慕っている姉に向かって・・・あんな表情を向けるなんて。

もちろん揺決理はその表情を見ることはなかったが。

「・・・・・・・・。」

憎たらしく、邪悪で、嫌悪すら抱く・・・もはや微笑とは呼べない・・・
・・・笑み。

そんな表情を・・・炎宿魔はしていた。

「・・・・・・・・・・」

淘汰の書斎のドアの前で、立向路は立ち止まっている。下唇を噛みながら、とても嫌悪を露にした顔をしている。

立向路は、右手を握りこぶしに変えて、コン、コン、と音をたてる。静寂が包み込んでいるなかでのノック音は、いつもよりとても大きく感じた。

長い沈黙・・・・・・・・とても気まずく・・・・・・・・とても居づらい。立向路は、いないのかと思い、そこから立ち去ろうとした。

いや、いないと思ったわけではないのだ。書斎に入りたくない。多分、淘汰に会いたくないのだろう。

すこしホツとする顔をする立向路は、踵を返す。

だが、書斎から聞こえる低い声によって、その思いは掻き消されてしまった・・・・・・・・。

「入れ。」

それだけでだ。その一言だけで、立向路の心音は急に早くなる。このまま立ち去りたかった。このまま立ち去っていれば・・・・・・・・。

「・・・・はい。」

そうは思っても、ここで立ち去るわけにはいかない。立向路は、意を決して、書斎の扉を開く・・・・・・・・。

くぐもった匂いが、立向路の鼻につく。なんだろう……この匂いは。嗅いだ事のない匂いだった。

立向路は、書斎に入ると、真っ先に目に入ったものは、黒いカーテンだった。部屋は、薄暗く廊下も程よい暗さだったが、この書斎はさらに、暗い……そんな感じだった。

「お、おじいさま……。」立向路が、恐れながら、淘汰を呼ぶ。自分で言いながら、自分で気がつく。立向路は震えているのだ。足はぶるぶると震え、声も擦れそうだ……。喉はカラカラに乾いていて、舌が引っ付くぐらいだ。

立向路は、淘汰が部屋に居るにもかかわらず、フー、とため息をついてしまった。

「……立向路。」その一言で、立向路はビクン、と反応する。その低い声で、虫ぐらいなら殺せるんじゃないだろうか？そう、立向路は思っていた。

「はい、なんで、しょう……。おじいさま。」

ああ、震えてる。

怖がつてる。

怯えてる。

恐れてる。

怖いんだ。

怖いんだ。

昔から、苦手だった。

今日はなんだろう……。一体何を言われるんだろう……。

怒られてばかりで、褒められたことなど一度もないのだ……。恐れるのも当然だ。いや、子供が悪いことをして、怒られるのは仕方ないことだ。

しかし、この人の怒り方は尋常ではない。

子供だろうがお構い無しに牢屋のようなところに閉じ込めたり、飯を丸々2日食べさせなかったこともあった。

殴られる、怒鳴られる……。そんな怒り方より、よっぽど怖かった。恐ろしかった。

今では、そんなことはなくなったが、今でもその恐怖心は抑えられないのだ。

「・・・・・・・・・・」

この無言の沈黙がものすごく痛い。

静まった部屋が……。立向路を責めているように……。感じる。

立向路にとっては、1時間も2時間も経った気がした……。

しかし、実際は十数秒しか経っていない。それでようやく淘汰は口を開く。

「お前だけ……。なんだ。」

立向路は、もちろんその言葉の意味など、分かるはずもなかった。

は？、と返したくなるのを抑える。

「な、何がでしょうか？おじいさま……。」

「もう終わりだ。本家は……。な。頼んだぞ。私は、どうやら幕引きのようだ。」

淘汰は、そういうと、真っ黒なカーテンを、シャツと勢いよく開ける。

まぶしい日差しが入り込んでくるのではなく、陰鬱とした灰色の景色を見た淘汰の心を陰鬱にする。

「何のこと……ですか？おじいさま。」

……。

「メルディオールが……呼んでいるのだ。」

！？

「私は、もう幕引きだ。あいつは、喜んで私の首を狩ってくるだろう……。それもまた一興……。だな。」

「お、おじいさま。」

「立向路・・・・・・・・。」

そういうと、淘汰は、椅子から立ち上がり、立向路の前で・・・

「すまなかった。」

と、言いながら、揺決理のときと同じように、土下座を始めた。

その姿には、日ごろ怒鳴っているあの姿は・・・最早面影すらない。

立向路は驚くしかない。あんなに怯えていた人物が、自分の前で土下座をしたのだから・・・・。

ああ・・・そうか。意味がわかった気がする。さっきの言葉の意味が。

でも、おじいさま。

無理だよ。

僕に、天貝家を任せるのは。

ああ・・・聞こえる。

そう、メルディオール様だ。

僕さえも・・・呼んでいるんだ。あの方は・・・。

なぜか、立向路は涙を流す。頬に一筋、涙を伝わせる。淘汰はそれに気がつく、立ち上がり、のしのし、と立向路に近づく・・・。
そして・・・、

「!?!?・・・。」 「・・・。」 「」

一瞬何をされたか分からなかったが、立向路は、なぜか、涙を止めることが出来なかった。

そう。

淘汰は、立向路の頭を撫でているのだ。優しく．．．．．優しく．．．．．

同日 午後6時10分

天貝家 本家 屋敷

食堂

それぞれ部屋でまったり過ごしていたみたいだ。食堂の集合時間は6時20分。だが、待てなかった4人は、先に食堂に行ってみることにした。

正和達の部屋からすぐの場所にある食堂には、すでに数々の料理が、テーブルの上に並べられていた。

とても食欲を誘う香りだ。

「うを~~~~！上手そう！！！」

正和は、大はしやぎをしながら、指定された席に着く。美由紀も、目を輝かせながら、テーブルに彩れた料理を、じー、と眺めている。一方盛多も・・・かと思ったが、盛多はそうでもなく、嬉々とした表情を浮かべてはいるものの、特別喜んでるわけではなかった。

「こら！正ちゃん！何手を伸ばしてるの！つまみ食いは禁止！」

だら〜とよだれを垂らしながら右手を近づける正和に、ビシ！と制裁を入れる炎宿魔。

「つてな~~~~！いいだろお？ちよつとぐらい！なあ！」

ダメエー！と言いながら、頭を叩く。

「あれ？炎宿魔さん。皆さんは来ないのですか？」

「え？ああ・・・。だって、まだ時間あるじゃないですか。多分、あと10分くらいで来るんじゃないでしょうか。」そっか〜、と答える美由紀。

炎宿魔は、先に座ってましよう！、と言うと自分もどかつと大胆に座ってしまった。席は決まっているようで、炎宿魔がそこに座つてくと3人に指示を出す。

「めんどくせえな」。席ぐらい自分で決めさせるよな！全く。」
悪態をつく正和。しょうがないだろ、と言いながら、正和の隣の席に座る盛多。

4人は、あと10分をいつもより長い10分と感じた……。

やがて、揺決理が姿を現す。どうやら、料理の配膳をしているのは、彼女のようだった。

「あら？あなたにしては、早いじゃない？いつもはギリギリ1分遅刻くらいで来るのに。」

炎宿魔が、ブスッと、膨れっ面なる。それだけで、4人はカラカラと笑いあう。

「あの、揺決理さんが料理作ったんですか？」早く食べたいと言わんばかりに目を光らせている美由紀が、揺決理に聞いてみる。

「ええ、まあね。」

と、軽く答える揺決理。

「へー、お前もすごいな……。こんなもん作れんのか！？」正和が驚いたような目をする。

なぜか、盛多はじつと料理を凝視したままだ。「どうかしたのかしら？盛多さん。」

「ん？ああ……。いや、なんでもないよ。ずいぶん上手いな……

この料理。」

「ありがと。じゃあ、今、残りの人たち呼んできますね。」

揺決理はそういうと、そそくさと食堂を後にするのだった……。

しばらく経つと、立向路が食堂に入る。自分の席を予め知っていたみたいで、まっすぐその席に座ると、何も喋ることはなくじーと、どこか一点を見つめている。

とても疲れきった顔をしているな……と、正和は思った。

その次に、狩煉が姿を現す。先ほどとは変わった服装で、少しおしやれをしてきたみたいだ。正和は、よくわからないみただが、美由紀とは、話が合うみたいだ。

「あ！それ、この前発売したばかりのですね！もうつけてるんですか！？」「え？うん。まあね。でも、炎宿魔には似合っていないって言われちゃった……。」それを聞いて、炎宿魔はあたふたするように弁解を始める。

「いや、似合わないんじゃないかと、えーとその……そう！合っていないんだよ！もうちよつと薄くすれば……。」

「そうかな……。」

その話を聞いても、全く理解できていない3人。まあ、当然だ。理解できたはできたで、それはそれで嫌だな……と、心の中で呟く盛多。正和は、「んー似合ってるかはともかく、まだ早いんじゃないか？化粧なんて……。」と無責任に答えるもんだから、逆に女3人が、それに猛抗議。「そんなことないです！全然早くないですよ！今は中学生でも普通にやってる人いるんですよ！」「そうだよー、正ちゃん！何にも分かってないんだからー！」「そうですよ。正和さん。いい加減なこと言わない方がいいですよ。」と、ダメ出しを受ける正和。

まあ、美由紀と狩煉はともかく、炎宿魔は化粧なんてしたことあるのか……？

「おーい！聞こえてるよ！！したことあるに決まってるでしょ！！」

ぎゅ、と正和の耳を引っ張る炎宿魔。正和は、半泣きしながら、

「離せえ〜〜〜！」とのた打ち回っている。

またも、あっはははは、と笑いが起こる。

狩煉は、ふと、立向路を見ると、立向路も少し笑みをこぼしている。珍しいこともあるもんだな、と狩煉は思った。

「もう、揃っているのか？」

他愛のない話をしていると、淘汰が姿を現す。その瞬間に、食堂の雰囲気ガラリと変わる。

炎宿魔は、話をやめて、手のひらを膝に置く。立向路は姿勢を正し、ずっと真っ直ぐを見つめている。

狩煉も同様に、話をやめてしまった。

「ど、どうも、こんにちは！」美由紀が、淘汰に挨拶をすると、

「ああ。」と簡単に返す。

正和と盛多も、こんちわ〜と言うと、「うむ。なんだみんな、黙りこくって。私が怖いのか？わはははは。」

怖いよ。

と呟く3人。いつのまにか揺れ決りも後ろでそう呟いていた。

「別に私に気を使う必要はない。いつもと同じようにしていなさい。」

うん、そう言われてもね……。いつもがいつもだから……。と
心の中で呟く炎宿麿。

天貝家の者である、淘汰以外の人は、全員そう思っているようで、

困惑した表情を浮かべている。

そんな気まずい空気を乱した（ぶち壊した）のは、当然の如く正和だった。

「んじゃ、そうさせて貰おうかね。おい、飯はまだか？何時からだっけかあ？6時20分集合ってことは、30分か？んじゃ、もうちよいあんな。腹減ったな〜。」

この人の前でも、いつもと変わらないのはすごいな、と感心（つていうか、呆れ）していると自然と回りも話しやすくなってきたみたいだ。

先ほどまでカチコチに固まったように黙ってしまった炎宿魔も、美由紀や正和と話しながら、笑いあっていた。

「夢に散るか、現に灯るか、世界に残りしもの達へ。」

「嘘か誠か、知らぬ夢、もはや愚民に知る由もなし。」

揺決理は、料理を配膳しながら奇妙な詩を詠っている。
なぜか目を細めながら……。

「幕を閉じるのは世界か、現か、……………」

T
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

幻想か。
L

Part 7 The first dropout

結局、信他はとうとうやって来なかった。正和がまた呼びに言ったが、首を横に振るばかりだ。

そして、ようやく全ての料理を配膳し終わると、揺決理が席に着く。淘汰のことを一瞥すると、軽く頭を下げて、黙りこくってしまった。「お姉ちゃん、どうしたの？」炎宿魔が、揺決理の顔を覗き込む。揺決理は、笑みをこぼしながら、「なんでもないわ。」と頭を抱える。

ひどく疲れきっているようだ。炎宿魔は、疲れているんだな、
と思い、揺決理に話しかけるのをやめて、正和を囃し立てていた。

「じゃあ、まあ、あんまり大したことないですけど……。乾杯！」
炎宿魔が、音頭をとると、

「「かんぱーい！」」と軽快な声で答える8人。
不思議と、立向路や淘汰も楽しそうな顔をしている。

「うめえな、これ！揺決理って料理できんのか！」

正和が、フライドチキンを両手にとりガツガツと犬のように食い散らかしている。

もつと上品に食えないのか……。つてな目線で見つめられている。

「ええ。調理師免許は一応持つてるから。」

「え？そうなんですか？」

話に割り込んできたのは、美由紀だった。

「ええ、将来のため、なんて大袈裟なものじゃなくて、あくまでも趣味だね。」

揺決理が、今までの武勇伝を語りですが、
そんなものお構いなし、と豪快に食っている正和。周りは呆れて物
も言えないみたいだ。

「こーゆーもんいつでも食えるわけじゃねえからな。
食えるときにたーんと食つとくのがいいんだよ！」

「でも正ちゃんは食べすぎ！」

炎宿魔が、正和の腹をベシつと！かなりの強さで容赦なく叩く。
ぐえっ、と吐きそうになる正和をみて、

きたな〜、と言いながら笑っている炎宿魔や揺決理。

豪邸で、綺麗なシャンデリアに優雅な食堂にはなんとも合わない食
事だったが、

たまにはいいか、と優しい顔で周りを見ている淘汰。

立向路は、そんな淘汰の表情を、怪訝顔で凝視していた。

だが、炎宿魔に無理やり絡まれて、

そんな感情は、どこかへ吹き飛んでいってしまったようだ。

気がつくともはや宴会みたいな食事だ。

豪華な料理にふさわしくないどんちゃん騒ぎ。

炎宿魔と正和が、某有名アニメソングを、

アカペラで熱唱しているのを、周りは手拍子で盛り上がっている。

揺決理は、淘汰が腹を立てるんじゃないかな・・・

と思って淘汰を見てみるが、当の本人は、大笑いしながら手拍子を
している。

心配することなかった・・・と少し安心したみたいだ。

狩煉も立向路も、同じことを考えていたみたいだ。

不思議な感覚だった。

今まであんなに居心地が悪かったこの場所で、
こんなにも楽しめるなんて、思いもしなかった。

炎宿魔、揺決理、立向路、狩煉、それぞれ同じ感覚を味わっていた。それでも、変な理屈抜きで、大いに盛り上がることにした。

「ねえねえ、じゃあ王様ゲームでもやらない？」

炎宿魔が、揺決理に提案する。

「は？それ合コンの・・・で、古くない？しかも今日合コンとかじゃないわよ・・・」「え？そうなの？友達にこういうゲームだよ、って聞いたただけなんだけど・・・」

へっ合コンでやるんだ、王様ゲームって・・・。」

「いや、だから、古いし、もうやらないわよ。」

まあ、詰まるところ、揺決理が言いたいのは「断固！やりたくない！」

という意味なのだろうが、炎宿魔はお構いなしに、「まあ合コンとか関係なしにやろう！ね！」
と言っている。

「さすがにキスとかはなしだから、ね？それならいいでしょ？」
揺決理が、当たり前じゃない！と乱暴に言いながら顔を赤くしている。

炎宿魔は、紙とペンを取り出して、紙を少しずつ破いていき、
1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, と書き込んでいく。

そして、最後の「王様」と書いて、
ビニール袋に丸めて入れて、はい、出来上がり！と掲げてみせる。

「？何作ってんだ？？炎宿魔？」

正和が、それを見て興味津々で覗き込んでくる。
どうやら美由紀も盛多も何だ何だ？、と覗き込んできているみたいだ。

「はい！今からルールを説明します！」

炎宿魔は席から立つと、ビニール袋を掲げながら、説明を始める。

「え〜と、今から王様ゲームを始めます！」

げっ！？と驚く5人（揺決理と炎宿魔と淘汰を抜いた）

「王様ゲーム！？今時合コンでもやらねーぜ？アホかお前・・・。」
「ぶーぶー、とばかりにブーイングを続ける正和に斜め45度程度に
チョップ！をすると説明を再開する。

「ごほん。えー、今からこの袋の中から、くじを引いてもらいたい
と思いまーす！で、王様が、何番が何番に何々〜みたいな〜？」

「「「はあ？」「」」

説明が下手糞な炎宿魔。

何が言いたいのかさっぱり分からない。

「え〜と・・・ようするに、王様がその番号の人に命令できる・・・
だったかな？」

・・・・・・。

有名なゲームなので、説明しなくても、全員大体は分かっているみ
たいだ。

（淘汰以外。淘汰は炎宿魔にみっちり説明してもらったようだ。）

「はい！じゃ、みんな！これ引いて〜！」

それぞれ、ひとつずつ紙を引いていく。

あの淘汰も、ニコニコしながら引いているみたいだ。

本当に、今日は機嫌がいいんだな……と親族は全員思っているみたいだ。

「じゃあ、みんな開いて!!」

全員が一斉にパラ……と紙を開く。

「王様だあれ!？」……と、炎宿魔だけが盛り上がっているのが哀れに見えたのか、

揺決理や正和も「だ、だあれ!？」と無理やりに盛り上げているみたいだ。

「おゝ、どうやら俺だ。」

盛多が、手を上げる。

少し上機嫌のようだ。「じゃ、盛多さん。どうぞ〜!」

盛多は、うゝん……と数秒唸った後に「じゃあ……王道に、4回廻ってワン……とかでいいか。」

「3回じゃね?王道なら。」と、正和が言うのを無視する。

「それじゃつまらんから、廻ったあと四つんばいになってワン……でいいか。」

「何番がですか?」と美由紀が言うと、ああ、そうかと言いながら4、と軽く答える。

いまいち盛り上がらないが、とりあえず、「4番誰?」と炎宿魔が言う。

「……僕……だよ。」

ものすごく恥ずかしそうに立向路が手を上げる。顔面を真っ赤に赤

くしながら。

「うわゝ・・・じゃ、立向路！頑張ってゝゝ！」

早く早く、とばかりに炎宿魔が立向路を押す。やめろ、と言いながら、前に立つ立向路だが、やってしまった以上、やめるわけにもいかない。

「う・・・や、やればいいんだろ！やればあ！くっ・・・。」

くるくる・・・と廻っている立向路を見ながら、みんな必死に笑いを堪えている。

炎宿魔なんて、笑いを必死に抑えていたが、堪えきれなくなり、げらげらと笑い出した。

「あーはっはっははははは！」

「くっ・・・。」

羞恥に耐えながら、なんとか4回廻ると、そのまま四つんばいになる。

いつもの立向路とは、考えられない格好だ。

「う・・・。わ、ワン・・・・・・・・。」

[illegible]

ごめん、無理。

[illegible]

揺決理が笑ったと同時に、立向路以外の全員が大笑いし始める。先ほどよりも、さらに顔面真っ赤にしている立向路。

さつさと立ち上がると、そのまま席に戻っていく立向路。
みんなは、なりふり構わず、まだ大爆笑している。

「た、立向路・・・頑張ったわね・・・。」

笑いすぎで目に涙を溜めながら、揺決理が立向路を案じているみたいだ。

いや、案じているというのは少し違うみたいだ。

立向路は、揺決理を一瞥すると、そのままテーブルに突っ伏してしまふ。

相当恥ずかしかったみたいだ。

「あゝ、おもしろい！じゃ、もう一回やろ。」

くじを回収して、もう一度始めるみたいだ。再びくじを引く。

「んゝ、私ね、王様。よかった・・・。」

どうやら、今回の王様は揺決理のようだ。

揺決理は、考えずに、すんなりと命令を言う。

「じゃあ、6番が1番を抱きしめる・・・とかは？」

・
・
・

・
・
・

・
・
・

・
・
・

・
・
・

・
・
・

「え？」正和が、その声の主を見る。つてか、正和だけじゃなく、全員。

「私みたいだな正和君。」

どうやら、6番は、淘汰みたいだった。

「んで・・・やっぱ・・・やらなきゃダメだよな？」
正和は、ちらちらと淘汰を見ながら、小声で揺決理に聞いている。
もちろん揺決理は、当然でしょ？という顔をしている。

雰囲気に分かるが、全員完全に白けきってしまったている。

それもそうだ。

「あの」淘汰が客人の前で・・・あろう事かその客人を抱きしめる・・・。

全く想像も予想も妄想も(?)できない。

揺決理は、ニヤニヤと楽しそうにしている。

炎宿魔は完璧にぽかーん・・・ってな顔をしている。立向路は完全に見たくない！って顔をしている。狩煉は、顔を赤くしながらも、見てみたいー！という顔をしている。(人それぞれだな・・・)

「それで、やればいいのか？」

淘汰は、何の躊躇もなくやろうとしている。う、嘘だ。ありえねー

—————！！

正和は、仕方なく。

淘汰は、嫌々・・・なのだろうか？そのわりにはやけに楽しそうだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。お、おい・・・。」

「おーーーーー！いい！いつてえよ！！は、離せーーーー！！！！
おい、揺決理！何秒こうしてなきゃいけないんだ！？」

それを聞いて、揺決理はそうね・・・と少し考えると「とりあえず
30秒ね？」

と、爽やかな笑顔で答える。

「なげえーーーー！」

淘汰は淘汰で、力を弱めようとはせずに、正和の耳にく、口がああ
ああ・・・。

「き、気持ちわりいいって！」

ん？

先ほどと同じぐらいに、大爆笑。

淘汰のことを気にせずに、手を叩いて大爆笑。

「あっははははははははははははははは！正ちゃん顔が！顔！！
おもしろーーーー！あっはははははははははは！」

と、炎宿魔。

「おじいちゃん？もう40秒経ってますよ？もういいんじゃないで
すか？」

と、狩煉。

それを聞いて、ようやく淘汰は正和を解放する。

「ああ、すまないね。正和君。」

その頃には、正和は、すっかり正気を失っていた。だが、席について、あまり楽しくない似たな顔をしている。

「正ちゃ〜ん？どうだった？」

「ん？ああ・・・うげ、なんか気持ち悪くなってきた。よりによつて初老（？）のオヤジに抱きしめられるなんてな・・・。」

炎宿魔は、それを聞いてヤバツ、と冷や冷やしたが、淘汰は、「わっはっはっは。」と笑っている。

つくづく珍しい日もあるな〜という気がしていた。

その後、何度も何度もいろんな条件で王様ゲームは白熱していた。曰く、「○番が○番に跪いてご主人様の　　を飲ませてくださ〜いと、言う」や、「尻文字」エトセトラ・・・。

程なくしてお開きとなる。

料理をほとんど平らげて、異様に盛り上がった王様ゲームも終わり、それぞれ部屋に戻るようになった。

元々大した御もてなしもしようと思っていたわけでないみたいだ。

淘汰は、後は好きにしている、という上機嫌のまま書斎に戻っていつてしまった。

淘汰以外のみんなは、揺決理が紅茶を持ってきてくれて、食堂で談笑をしていた。

「ねえ。」

「何よ？」

「信ちゃん、もう一度呼ばない？だって晩御飯も食べてないしお腹空いてると思うよ？ね！」

炎宿魔は、信他をここに呼ぼうとしているが、揺決理はそれを洩る。
「いいんじゃない？呼ばなくても。一人になりたいって言ってるんだから。」

「そうかなー？じゃ、私が呼んでくるね！」

炎宿魔は、信他を呼びに、部屋に直接行くことにした。

「炎宿魔はどこに行ったの？」

炎宿魔が出て行った方向を見ながら、立向路が揺決理に聞いている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・信他を呼びに・・・・行ったみたい・・・・・・・・。」

「そうか・・・・。」

炎宿魔は、食堂を出ると万が一、来なかったときのために、少量の料理を持って行くことにした。

「・・・・・・・・・・？なんだろ・・・・。」

炎宿魔が通る廊下には、若干水の跡がある。
数メートル程、川のように形作っている。

何か零したのかな・・・と考えていたが、どーでもいいや、と考え、
信他の部屋に向かった。

コンコン・・・という音をたてる。

炎宿魔が信他の部屋の扉を軽く叩いている。

「居ないのかな・・・信ちゃんー？」

「馬鹿だなーあいつ。内線電話使えばいいのに・・・。おーい揺決
理ー子機貸してくれー俺が電話するぜ。」

「え？ああ・・・はい。」

小型の受話器を、正和に手渡す。「どれ押せばいいんだ？」「え？
確か信他の部屋は・・・ああ、4番よ。」

ピ、という機械音の後に、正和は受話器に耳を当てる。

「あ？もしもし、俺だ！信他だろーさつきは不機嫌そうにしゃがつ
て、こつち来いよ！」

「信他・・・電話出たの？」

立向路が怪訝顔で正和に聞いてくる。

「ああ・・・。ん？おい、どうした・・・。信他？おい！？」

正和は、何か焦っているみたいだ。

「・・・・・・・・・・よく聞こえない？なんだって・・・・・・・・？・・・・・・・・
・・・・・・・・・・なんだ？」

ふふふ・・・。

「笑い・・・・・声？」

ブツン、と電話が切れてしまう。「どうだったんだ？」
盛多が聞いても、正和はダメだ、と言う。

「よくわからない。助けて・・・と聞こえたが。」

「!? 信他が!?!」

立向路が、身を乗り出す。冷や汗をかいているみたいだった。
正和はコクン、と頷く。

「しゃーねえ・・・ちつと見てくるよ。炎宿魔も心配だしな。そこに居てくれ。」

そして、そのまま食堂を出て行ってしまった。

「僕も言ってくるよ・・・面倒くさいけどね。」
そういうと、立向路も席を立ち、炎宿魔、正和に続いて食堂を出て行った。

「信ちゃん? ねえ。。。いないの。。。?」

未だに炎宿魔は、部屋の前で信他を呼んでいるみたいだ。
お盆をそのまま持って。なんともつらそうだ。

「もう! マスターキー使っちゃうよ!! いいの!?!」

炎宿魔は、ポケットからマスターキーを取り出す。
だが、さすがに使うの悪いと思い、何度も何度も使うぞと脅している。

「いいの。。。? し。。。ん。。。ちゃん? 使っちゃうよ。。。?」

.....。

「そこ、置いていて。」

「!？」

扉の向こうから、突然信他の声が聞こえて、炎宿魔はキャツと短い悲鳴を上げてしまった。

「な、なんだよ～～信ちゃんいたの!？早く返事してよね～～。」

「.....何？まだなんかあるの？」

相変わらず無愛想な信他。

炎宿魔は、なぜか少しホツとする。

いつもの信他で居てくれたことに、ホツとする。

しかし、

「.....。」急に押し黙ってしまった。

「あれ？信ちゃん？」

ガサ.....。

「？」何かが擦れるような音が、部屋の中からする。

「もう・・・。」

カチャ・・・と、炎宿魔はマスターキーを使う。
ドアノブを握り、ドアをゆっくり押していく・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？あれ、いない・・・・・・・・。」

中にもぬけの殻のようだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

なぜ炎宿魔がもぬけの殻だと思ったか？それは・・・・・・・・、

「……………」
「……！」

い、いやあつああああああああああああああああ
ああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「生きた」人間が居る「気配」がしなかったからだ。

脱落者↳天貝 信他↳

目撃者↳天貝 炎宿魔↳

午後7時59分

推定死因↳背中を大型サバイバルナイフでの刺殺↳

。見つかった〜、いつ見つかるか、楽しみにしてたのに・・・
意外と早かったな〜。

くひゃひゃひゃ。

T o b e c o n t i n u e d

P a r t 8 R e g r e t a n d a t r a g e d y (前書き)

疲れた・・・。

1日で書きました。
下手だけど。

Part 8 Regret and a tragedy

同日 天貝家 本家 屋敷

午後 8時01分

信他の部屋、及び部屋前廊下

「ア・・・あ・・・あ・・・い、いやあああ・・・」

信他の部屋は、今までの信他の部屋のままのように思える。

照明がついているのに、薄暗いと感じる室内。照明より何倍も明るく感じるパソコン。

本棚には何冊もの本が並べられている。

・考古学による遺伝子調査

・現代人のモダンの崩壊

・人類はどこへ向かっているのか？

等、炎宿魔にしてみれば読む気にもならない分厚いページの本ばかり。

だが、これがいつもの信他の部屋だ。

そう、いつもの・・・ただ一箇所を除いては。

クローゼットだ。

この屋敷には、客陣用にも親族用の部屋にも、必ず人が一人入れるぐらいのクローゼットが用意されているのだ。

そのクローゼットが……、おかしい。明らかに。ありえない。

開けたくもない。

でも開けなければ。

ここの部屋から食堂までは遠い。

今の叫び声も多分聞こえない。

もし私の勘違いだったら……。

この血みどろのクローゼットの中身は………一体？

「ハア．．．ハア．．．．．はあ．．．．．」

見たくない。

見たくない。

見たくない！！！！

「はあ．．．はあ！！！！！！」

炎宿魔は、信他の部屋にあるクローゼットを勢いよく開ける。

．．．．．。

べちゃ・・・・・・・・じゅ。

炎宿魔は目をつぶってその扉を開ける。

べちゃに、ごと？

なに・・・・・・・・この音・・・・・・・・。。。

何・・・・・・・・この生暖かい・・・・・・・・。。。

あああああああ！！！！！もう気がついてる！！！！気がついてる！！！！！！

私はもう気がついてる！！！！分かってる！！！！この「正体」があ！！！！！！

でも言えない！！！！

認めたくない！！！！！！！！！！

気づいてるのに……！気づいているのに……！！！！！！！！！！

「う・う・う・う・あ」

[illegible]

声……だろうか？何だろう……。何かの音が聞こえる。

え？

あれ？

声？

「ん？炎宿魔・・・おい！どうした！炎宿魔！」食堂から出た正和は、信他の部屋にたどり着く。

目の前に部屋が見えてくる前に、異様な匂いに気がついた。そう・・・

血なまぐさい匂いのだ。

なんだ？この匂い・・・気持ち悪い！炎宿魔！まさか！！！！！！

「炎宿魔あああああ！」

正和は、思いつきり炎宿魔の名前を呼んで、信他の部屋の中に飛び込む。

「う・・・ひ、ひや・・・ま？」

あははあっは！正ちゃん！ひっかかった、ひっかかった！！馬鹿だ

な~~~~もう！

何間の抜けた顔してんの！馬鹿正ちゃん！あはははは。

「……………」

こう言ってくれる……目の前にいる炎宿魔は、きっとこう返してくれる。

そう信じていたんだ。

心のどこかで、彼女が今「被っている」モノが……ペンキか何かだったら……。

その、足や腹部などに付いている血痕が……本物でなければ……。

「ま……………正……………ちゃん……………。正ちゃんあああん！」
炎宿魔はそのまま竦んでいた足を必死に奮い立たせ、正和に飛びつく。

炎宿魔の服や腕に付いていた血痕が正和にも付着する。

正和は、それについては何も思わなかったが、炎宿魔が居たせいで

見えなかった「モノ」が正和にも見えたのだ。
そう・・・信他のその哀れな姿が・・・・・・見えたのだ・・・正和にも。

「!!!!!!!!!!!!・・・。」

炎宿魔ほどには驚かないが、やはり表情では隠しきれないみたいだ。
正和は、尚いつそうに炎宿魔を強く抱きしめる。炎宿魔は正和の胸に泣きついたままだ。

「あ、あああああ！し、信他！？信他！！！」

後ろでは、立向路が驚きの声を上げている。
信他が死んでいる。

大量の血を吐きながら・・・・・・。
大量の血を・・・・・・出しながら。

「・・・・・・・・・・。」正和は何も言えない。何も。
何を言えば良いかわからな。部外者の自分に・・・・一体何の言葉をかければいいのだろ。

「部外者？ふん・・・・皮肉だな。」

正和は、炎宿魔を抱きしめたまま立向路のほうを向くと、「立向路、

ここにはこない方がいい。

行こうぜ。食堂の奴らには……、来るなど……!」

そう、遅い。

信他の死体が見つかった時点で、もう遅い。

せめて見つけなければ、

こんな思いせずに……楽に……死ねたのにね。全員。

「こ、これ……なに……嘘ですよ…….
んな…….」

美由紀、盛多、狩煉、揺決理も、この惨状を目の当たりにしてしま

った。

もう、遅い。何も・・・かも。

逃げられない。

逃れられない。

ほおら？聞こえる？

台風の・・・音。

聞こえない？この音・・・なんだろうね？

ああ・・・壊れちゃった・・・。。。

飛行機。揺決理のお気に入りだったのにね。

それに、淘汰が大昔と言っても良いほど……何回か使った車も……壊れちゃったよ。

さあして……どうなるか……後は風に身を任せるしかないね……。

優しいからさ……僕。最初に答え……見せたよね？

つまらないよ？もう……だって……どうせ答えしってるのにさ……。

ま、勝手にすれば。

ばいびー、9人の哀れなお馬鹿さん。

ボタン！！

「！！！」

正和、立向路は、ある「音」に気がついた。

正和はいつも聞いていないからわからないかも

知れないが、立向路にはハッキリわかった。そう……

屋敷の扉が閉まった音だ。

「そんな・・・まさか・・・誰かが外に？」

「!?!?!?!ちくしょう!」

正和は、炎宿魔を揺決理に預けると、屋敷の外に向かう。
屋敷の・・・外へ!

もちろん炎宿魔も黙っているわけではない。

「くつ!?!?!?!」

炎宿魔も、正和をそのまま追いかける! 血のついたその姿のまま。
「炎宿魔! 待つてよ! 炎宿魔!」

狩煉もそのまま屋敷の外へ向かっていく。炎宿魔を追って。
そうになると、ここに取り残されるほうがむしろ嫌だ。

盛多、美由紀、揺決理もそのまま外に出て行くことにした。

「くそ!?!?!どこだああああ!」

すでに外は、予想どおりに大嵐となっていた。

正和は、必死に周りを見渡す。ほんの少しの気の緩みも許さない。
絶対に見つけてやる! 絶対に・・・・・・。

威勢だけはいいが、この嵐で、この広い敷地を探すことなど普通に
考えて不可能だ。

だが、それでも諦めきれない。

裏庭園の方にも周った。しかし、人影らしきものはどこにもない。いや、あってもこの嵐では見つけることはできない……

「……………ちくしょう……………」

諦めるしか……………ないのか……………」

「……………。」

「まだ……………出て行っていないけどね。」

後ろから、揺決理が正和に歩み寄る。そうとう疲れきった顔をして
いるみたいだが。

「どうということだ？揺決理。」

「この敷地の壁、結構大きいでしょう？それに、この嵐。普通に考えて、飛び越えることはできないわ。と、なれば裏口か正面入り口を頼るしかないでしょ？でもね、それにはセキュリティームで誰かを確認して、それで扉を開けなければいけないの。」

つまり、ここは部外者にとっては……………大きな密室なの。だから、
「逃げられない」の。」

「……………そうか。」

逃げられない……………か。

……………。

不吉だな……………。

落ち着きを取り戻した正和は、とりあえず全員を集めて、屋敷に戻った。

帰る途中に正和はあることを考えていた……。

「……………」

何だろう……この違和感。気持ち悪い。

「正和さん。どうしました？」狩煉が正和の顔を伺う。
やつれている……が一番妥当だろう。それが今の正和の顔だ。

「なんでも……ない。悪いな……狩煉。」

「起きちまったな。事件。」

「……………」

狩煉は俯いてしまった。

いや、狩煉だけじゃない。

みんな・・・俯いたままなのだ。

なぜ？このようなことが。

なぜ・・・こんなことが。

なぜ？

「・・・・・・・・。」

7人は、屋敷に戻ると、少し相談して揺決理が、信他の顔を見たいと言ったので、見に行くことになった。
気はもちろん進まないが。

「・・・・・・・・信・・・・・・・・他。」

揺決理は、信他の体に触れることなく、涙を流しながら信他の名を
呟き続ける。

ごめんね……信他……ごめんね……信他……と。

「……………」正和は、部屋を細かく調べる。

おかしい。調べれば調べるほど……その違和感は募っていく。

「どうしたんですか？正和さん……………」

美由紀が、正和のその様子に気がついたみたいだ。

「ん、ああ……妙……じゃねえか？」

「何が……ですか？」

正和は、クローゼットを指差す。

「信他の血はあそこにしかないだろ。けどな、それはどう考えても
おかしいだろ？」

「どうしてですか？」

「信他は背中をなんかぶつといナイフが何かで刺されてるだろ？で
もよ、後ろからってことは、気を許したか不意打ちだろ？なんでこ
の部屋……どこにもないんだよ……信他の血が。」

そう。

この部屋にはクローゼット以外不思議なものは何もないのだ。
一滴も飛び散った形式がない。

「で、でも！犯人がふき取っただけじゃないんですか!？」

「ふき取る？どこにそんな時間が？」

「あ……………」

「炎宿魔！」

正和は、未だに揺決理に抱かれながら涙目の炎宿魔を呼びかける。

炎宿魔は、憔悴しきった顔をしている。それはそうだろう。

死体の第一発見者。そして……………あんなものを……………目の前で。

「……………何？……………正……………ちゃん。」

正和は、一瞬聞くのを渋ったが、それでも聞くことにする。

「お前はさ、信他の声を聞いたんだな？」

炎宿魔はコクン、と頷く。

「……………殺したのは、そのとき……………か？しかし妙だな……………ふき取る時間とそれ以前に……………」

「どうやって……………抜け出したんだ？この部屋を……………」

「…………………………」

抜け出せるよ……………簡単に。

声を出したのは、立向路だ。

「どういうことだい？立向路君」

盛多が、立向路に注目する。いや、全員、立向路の次の言葉を待っている。

「まあ、仕方ないかもしれないけどね……もしかしたらの……
・仮説だよ？」

「犯人は……2人。部屋で殺人を犯した人。そして……扉の音を……たてた人。」

そうか！と、正和が呟く。

「なるほどな……俺たちはおびき出されたのか……まんまと……
・犯人に。」

だが、揺決理が反論する。

「でも、正和がすぐに飛び出しても、見つからなかったのよ？
いくらなんでもリスクが大きすぎない？

もしかしたら、正和……いいえ、他の誰かが見つけちゃうかもしれないじゃない。」

立向路は、目をつぶりながら、姉が言ったその説に反論する。

「でもさ、もし、犯人は外に出なかったら？」

「……え？」

「犯人は・・・扉の音をたてて外へ出なかった。そう・・・どこかに潜んでたんだよ。そして、全員が出て行ったら、そのまま屋敷、またはセキュリテイルームに向かう。」

「？、なぜセキュリテイルームなんだ？」

盛多がそう質問する。それを正和が答える。

「簡単さ。こここの敷地から出るには、セキュリテイルームにいる奴らが扉を開く必要がある。」

「だから、裏口を開けてそのままどこかへ逃走！だな。」

「無理よ。」

揺決理が、それに反論する。

「さっき見てきたんだけど・・・車も飛行機も全部壊れているわ。」

まあ、犯人が用意してるなら話は別だけど。でもね、ここは都心から遠く離れたところなのよ？それに、ちゃんとした町に出ようと思ったら走ってもとてもじゃないけどたどり着かないわ。車だって滅多・・・というよりほとんど通らない。

「こんな山道・・・じゃね。」

「ちよつと待て・・・山・・・道？」

正和が、ある重要なことに気がつく。そう・・・ここは

「あら？何度も来てるのに、気がつかなかったの？」

ま、仕方ないわね。そうね、あなた、飛行機じゃいつも爆睡してたものね。

「ここは天貝家が領地権を持つてる小さな山なのよ？」

なんて・・・こつた。

ここが山？

冗談じゃねえ！しかも・・・今・・・揺決理は重要なこと・・・
言ったよな？

「飛行機も・・・車も・・・ダメ・・・だと？」

「ええ・・・。第一、どつちも使えたとしても、この雨で出れるかどうか・・・わからないけど・・・。」

ああ．．．．．なんだよこれ．．．．．なんだこの小説じみた展開はよ．．．。

おいおい．．．．．なんだよこの王道洋館ミステリーみたいな展開はよ．．．．．。

．．．．．。

冗談．．．．．と言ってくれ。

そりゃ楽しいさ。

推理したり、犯人当てたりすんのはよ！

でもよ、そんなの、現実に起きてみたらどうだ？

楽しいか！？目の前で人が殺されて！それでも楽しいって言えるか！？

それで推理しろ！なんて言われて、できると思つか？

はははは。いいよな・・・推理物の探偵さんはよ！
作者が推理させようとしたら、推理できるもんな！

あんなしつちやかめつちやかな推理、現実でできるわけないだろ・・・。

「髪の毛・・・もしかして・・・これは・・・もしかしてあの人の！」

はっははは。前に呼んだ推理小説のセリフだよ・・・。なんだよ・・・。
・なんでわかんだよ！なんで・・・。

なんでそんな冷静に分析できんだよ！！

「ははは、俺が言えた・・・玉じゃねえか。」

「・・・・・・・・・・。」

何かが・・・・。

「？、何かな・・・・これ。」

狩煉が、扉の付近に、テープ痕を見つける。

何かが貼り付けてあったあとみたいだが、何かは分からない。

「・・・・・・・・。」

だが、気にする様子もなく、みんなと一緒に狩煉も部屋を出て行った。

話し合いによって、セキュリティルームに籠る事に決定した。

犯人が出て行ったかどうかもあるし、意外と広いことと、ここであらう屋敷の半分以上の場所をみることが出来る。
いや、部屋は見れないのだから、半分だ。

7人は、厨房へ行くと、食料を取りに行く。

全員で行くことによって、犯人も襲って来れないだろう
ということ全員で行くことにした。

だが、薄々は、みんながついているのだ。

全員で行くのは、相互監視が可能だからだ。

もし、この中に犯人がいたら・・・7人全員でいればなんとかその「犯人」が、

何も手を出せないんじゃないか・・・。

そういう意味合いも持っているのだ。

食料は、即席で食べられるもの・・・お湯などがいらぬ・・・
などの条件で適当に選ばれた。

主に缶詰類が非常に多かった。

それはそうだろう。

セキュリティルームでわざわざ料理なんてしていらぬのだから。

「・・・・・・・・。」

下手したら何日籠っていなければいけないのかわからない。
多少多めにでもと、大量に持っていくことにした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

やはりみんな無言のままだ。まあ、それもそうなのだが。
誰もこんなときに話せる話題なんてないのだ。

いや、こんなとき、何を話せばいいのだろ。推理をし合うのか？
推理？ロクに現場を調べてもない。
死体だってロクに見ても居ないのに、どう推理すればいいんだ。

それに、そんなの、小説だからの話だ。

本当にこんなことがあったら、呑気に推理ごっこなんてしていら
れるはずがないのだ。

そう・・・・・・・・所詮あんなものはお話・・・・所詮あんなものは作り話・
・・・・・・・・。

これもお話だよ？ただの……。

「……ちっ、言ってる。」

7人は黙ったままだ……。みんな何かを考えているようだが、それを声に出せる力などどこにも余ってはいない。

死体を一回見ただけなのにもうヘトヘト……。推理モノの人たちはなんてタフなんだろう……。と美由紀は考えていた。

「……………」
こんなとき……。

こんなとき、ぱつと推理がひらめいて、「犯人はあなたよ!!!!!!」とか言いながら人差し指をその人に向けて恍惚に笑って……。というのに懂れたつけ。
私って……。単純だから……。すぐになにか読むと感化されちゃうのよね……。

「はあ〜」。

美由紀は深いため息をつく。

ため息は幸せが逃げる……。なんて言うけど……。幸せなんて……。こんな状況じゃ。

ため息のひとつもつきたくなるよ……。これじゃ。

でも。

だからこそ。

こんなときに。

笑って・・・いられたら・・・。

こんなときだからこそ！

「あの・・・。」

美由紀は、完全に陰鬱になった空気を壊したいと思い、何か話題を振ってみた。

もつとも、それが一番陰鬱にさせるのだが・・・。

「警察には・・・連絡とかけたんですか!？」

「・・・・・・・・・・。」

誰かがつく小さなため息。

それだけで答えはなんとなく分かった。

「ええ・・・したわよ。」

繋がらなかった。それどころか、多分この家自体の電話回線が切れているわ。」

それを聞いたほかの人も、より一層落ち込んでしまった。

美由紀は、失言だった……と頭を抱える。

それに気がついた盛多は、優しく美由紀に言っただけ。

「気にしないでいい。気にするな、な？大丈夫だ。だから、とりあえず今は籠城しよう。」

話はその後だ。」

美由紀は、少し目に涙を溜め込みながら「はい……。」と軽く頷いた。

セキュリティルームにようやく着いたとき、なぜ誰も気がつかなかったのだろう……

ようやく重大なことに気がついた。

「おじい様……おじい様は!？」

そう、淘汰。

淘汰が先ほどから、気配さえ出てこないのだ。

これには、全員血の気が引く思いだった。だって、あれほど屋敷中をどたどたと

走り回り、外に見に行ったりしていればさすがの淘汰だって書斎から出てくるはずだ。

ところが、淘汰は自分達に姿を見せないのだ。

なぜだ……。

ああ．．．．まただ。この嫌な感じ．．．．。

ああああああ。

認めたくない．．．．認めたくない．．．．認めたくない．．．．
．いや．．．．いや。

炎宿魔が肩を抱きながら、震えだす。

揺決理がそれを必死に抑える。

「大丈夫よ．．．しつかり．．．しつかり．．．。
おじい様は生きてるわよ．．．大丈夫。」

揺決理は、何度も炎宿魔の耳元でそう呟いていた．．．．。

「じゃあ、俺と立向路と盛多でじいさんの書斎行ってくるから、お前らはセキュリテイルームで待っていてくれ。廊下はこの部屋で全て見れるんだろ？」

なら、この部屋は鍵をかけて、俺たちをカメラで追って見ていてくれ。

万が一、犯人が襲ってきたときのためにな。絶対に部屋から出るなよ？いや……。」

正和は、盛多、立向路、どちらかを見据えて……

「盛多、お前残ってくれないか？女共だけじゃ……不安だ。」

盛多は、少し渋る仕草をするもの「わかった。」と言って、セキュリテイルームに残ることとなった。

ういーん、がちゃ。

機械的な音を立てる銀色の扉に背を向ける2人。

「準備はいいか？何を見ても声出すなよ？わあっーたな？」

「……………ああ、わかったよ。」

正和は、セキュリテイルームにあった警棒を、立向路は先ほど玄関で持ってきた傘をそれぞれ身構える。

そうして、2人は淘汰がいると思われる書斎へと向かう。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

正和は前を。

立向路は後ろをそれぞれ向いている。

どちらから来るか分からないということで、正和が提案した攻防用の移動だった。

歩きたびに、ギシ・・・・という音がするたびに・・・・
心臓の鼓動が高くなるのが、立向路には分かった。

落ち着け・・・・・・・・落ち着け・・・・・・・・落ち着け・・・・・・・・。

落ち着け・・・・・・・・落ち着け・・・・・・・・。

大丈夫。いない。いない！そう心に思わせないと！いない！犯人なんて！いるものか！

•
•
•
•
•
•
•
•
○

「妙だな
・
・
・
・
・
。」

正和はまたも何かの違和感を感じ取る。

もっとも、今日は違和感だらけで、何を違和感とするかわからなくなってしまうそうだが。

「……いっ、暗くないか？ 妙に。」

言われてみれば確かに暗かった。

「あ
・
・
・
・
あれ
・
・
・
・
・
」

よく見ると、照明がひとつ消えていたのだ。

ただでさえ暗い廊下だ。それで照明が消えているのだから、暗いのは当然だ。

しかし……………。

「いや、そういう暗いじゃない……………なんていうんだ……………その……………」

「雰囲気が……………少し重い気がする……………とても言えばいいのか……………」

正和が言いたいことが、よく理解できなかったみたいだ。とりあえず、先に進もう、と立向路が言うと、正和は何も言わずに先ほどと同じ隊列になる。

ゆっくり進んでいるから、かなり長く感じた。

ようやく書斎にたどり着く。

コンコン、よノックをしてから、「おい……じいさん！いるか
〜！？」
とドア越しに叫ぶ。

返事はない。

なんだろう……。

この禍々しさは。

もうわかってている……。なんだか空気がおかしいのだ。
もう2人には想像がついている。
この部屋に「何が」いるのか！！

「ま、マスターキー使うぞ！じいさん！」

正和は、急ぎ早にマスターキーを鍵穴に差し込む。

がちやり……。という音を立てて、扉は開かれる。

まるで人など今までいなかったみたいにつめたい。

「じ、じいちゃん？」

ほら？

「……！」

こんなべたな展開なら、気づいてるでしょ？

あああああああああああああ！

え？な、なんだ、ありや！！！！！！！！！

2人は諦めかけていたのだ。どうせ中にいる「人」は死んでいる。

どうせ・・・と。

だが、

ただ死んでいるだけでは済まされなかった。
。
。
。
。
。
。
。
。
。

淘汰は確かに死んではいるが………。

「あああああ……おい、嘘だろ……。」
「おじい……様……。」

まるで糸に吊るされた人形のように、空中に浮いているのだ。

大量の血を流して・・・・・・・・・・。

そして、目を見開いて。

淘汰であつた「もの」が向けている視線の先には……

あ。それはそれは美しい裏庭の庭園が見える小窓があった……

脱落者↳天貝 淘汰↳

目撃者↳寺田 正和、天貝 立向路↳

午後 8時43分

推定死因↳詳しく見ないかぎり不明、しかし大量の血痕が滴り落ちて
いる↳

くひゃひゃ。

いい気味。

T
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

うん・・・変な推理。

Part 9 Mysterious confession to be 1

同日 天貝家 本家 屋敷

淘汰の書斎

午後8時44分

「っ！……………」

「なんだよ……………これ。」

立向路が、ぺたん……………と跪いてしまう。

一体何が！？

なぜ、こんなことが……………。

立向路は、もう一度、淘汰で「あつた」ものを見る。

おびただしい血が、まるでドレスのように……降り注がれている。

信じられない。

ありえない。

「おじい……様……。。」

正和は、繁々と淘汰の体を覗き込んでいる。

「・・・・・・・・。」

ピアノ線・・・・・・・・だろうか？

淘汰の体は、何かに吊るされてる。体・・・・・・・・頭・・・・・・・・腕を、何かで。

体を支えている・・・・・・・・ただの線で。

こんな悪趣味な真似したの・・・・・・・・一体誰だ？

何の・・・・・・・・意味が？

意味？

この事件、意味なんてあんのか？

なんだろう……。言葉では上手く説明できない。

これは事件なんだろうか？
いや、普通に見たら、事件だ。

最初に信他が殺されて、次に淘汰が何かで吊るされている。
これをやった奴の……。思惑は？

怨恨か……。？復讐か……。？

セキュリティルームでは、炎宿魔、揺決理、盛多、狩煉が、2人を監視カメラで追っていた。
もちろんみな、淘汰の無事を信じて……。

そして、2人が書斎へ到着し、中に入っていく。

数分すると、正和が書斎から出てくる。

「……………」
正和は……………」

カメラに向かって、首を横に振るった。

「うう．．．。う．．．。」「．．．．．。」「おじい様．．．。」

揺決理は、尚一層に炎宿魔を抱きしめ、炎宿魔の頭を優しく撫で続ける。

盛多と狩煉は、俯いたまま．．．。

ふと、狩煉は揺決理に呟く。

「ねえ、聞いて、揺決姉。」

「何よ．．．？」

炎宿魔を抱きしめたまま、揺決理は狩煉に向き直る。

「．．．．．。できれば．．．。」

なんだろう、嫌に口ごもる狩煉。

揺決理は、狩煉が言いたいのか、なんとなくだが察すると、「わかったわ。」と言い、炎宿魔の耳を両手で塞ぐ。

「炎宿魔、今からちよつと．．．耳を塞いでて？お願い．．．。」

揺決理がそういうと、炎宿魔はコクン、と頷いて、揺決理から離れる。

別にそこまですることないと思ったのだが、聞こえたら嫌なので、素直に炎宿魔から離れる。

「それで？何、話つて。」

「揺決姉だつて、少しは気づいてるんじゃない？ねえ．．．。」

「．．．．．。」

「何のことよ？教えて？」

それでも揺決理はじらすように自分では言わない。

「もう．．．．。」

その頃、立向路、信他はようやく書斎から出る。

これ以上ここに居たら、体に毒、目にも毒だ。なによりあのようになった淘汰をもう見たくない。

そう思い、素直にここから出て行くことにした。

マスターキーで鍵をかけ、無言で廊下を歩いていく。

警棒と傘は、持ったままだが緊張感は、なぜか無くなってしまった。
わかってはいた。

どうせ死んでいるんだろう、という諦めがあったことも事実だ。

どうせ行っただって死んでいる。どうせ行っただって……そうは思っていたのは事実だ。

しかし、あんな無残なことになっているなんて思わなかった。

死体が・・・・・・・・吊るされるなんて・・・・・・・・。

惨い・・・・・・・・。

どうしてあのようなことを・・・・・・・・。

ほらほらほらほら！・・・・・・・・！！憧れていたんでしょ！？

来たよ来たよ来たよ！！！！！

さあ、ほら！！！！

いけいけ！！！！

推理しろよ推理！！！！！！

ほらほら！！！！！！

死体が吊るされるなんてわくわくするだろ！こんなシチュエーション！！！！！！

ほらほら！！！！！！！！

うるせえ、少し黙れ。

「!?! なん・・・だ？」

正和は、セキュリティルームに入ろうとした途端に、声を上げた。
「今・・・何かいなかったか!?!」

正和は、廊下の方を示しながら、立向路に聞く。

立向路は、何も見なかったけど？、と言いながら髪を掻き繕る。

正和は、そうか・・・と言いながら、コンコン、とノックする。

「今開けるわ。」

部屋に入ると、真っ先に目に入ったのは、炎宿魔だった。
眠っているのだろうか？

わからない・・・。ぐったりしている。

「炎宿魔は・・・・大丈夫か？」

揺決理は、なんとも言えない顔をする。

これが大丈夫なように見える？と言っているのか・・・。

正和はそう解釈すると、「ん、わりい。」と口にする。

相変わらず無言のままの7人。

今日で2人も死んでいるのだ。当然だろう。

電話も通じない。

逃げ出すこともできない。

落ち込むこと以外にすることがない・・・。

どこから何が来るか・・・全くわからないのだ。

「・・・・・・・・・・。」

正和は、モニターを見ながら何かを考えている。

炎宿魔は、顔を隠しながら床に突っ伏している。

揺決理は、体育座りをしながら、何かを考えている。

狩煉も同様に、考え事をしているみたいだ。

立向路は、こんなときに携帯電話を弄くっている。

盛多は美由紀と何かを小声で話し合っているみたいだ。

「どうなるんでしょう・・・。私達。」

美由紀が、涙混じりにそう口にする。ひどく声が擦れている。
「大丈夫だ。きっと助かる。それまでここにいよう、ここには安全だからな。」

盛多が笑顔でそう返すも、美由紀は不安を隠しきれない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

盛多のその声で、全員が驚くが、それと同時に耳を澄ます……すると……。

𐀀
 𐀁
 𐀂
 𐀃
 𐀄
 𐀅
 𐀆
 𐀇
 𐀈
 𐀉
 𐀊
 𐀋
 𐀌
 𐀍
 𐀎
 𐀏
 𐀐
 𐀑
 𐀒
 𐀓
 𐀔
 𐀕
 𐀖
 𐀗
 𐀘
 𐀙
 𐀚
 𐀛
 𐀜
 𐀝
 𐀞
 𐀟
 𐀠
 𐀡
 𐀢
 𐀣
 𐀤
 𐀥
 𐀦
 𐀧
 𐀨
 𐀩
 𐀪
 𐀫
 𐀬
 𐀭
 𐀮
 𐀯
 𐀰
 𐀱
 𐀲
 𐀳
 𐀴
 𐀵
 𐀶
 𐀷
 𐀸
 𐀹
 𐀺
 𐀻
 𐀼
 𐀽
 𐀾
 𐀿
 𐁀
 𐁁
 𐁂
 𐁃
 𐁄
 𐁅
 𐁆
 𐁇
 𐁈
 𐁉
 𐁊
 𐁋
 𐁌
 𐁍
 𐁎
 𐁏
 𐁐
 𐁑
 𐁒
 𐁓
 𐁔
 𐁕
 𐁖
 𐁗
 𐁘
 𐁙
 𐁚
 𐁛
 𐁜
 𐁝
 𐁞
 𐁟
 𐁠
 𐁡
 𐁢
 𐁣
 𐁤
 𐁥
 𐁦
 𐁧
 𐁨
 𐁩
 𐁪
 𐁫
 𐁬
 𐁭
 𐁮
 𐁯
 𐁰
 𐁱
 𐁲
 𐁳
 𐁴
 𐁵
 𐁶
 𐁷
 𐁸
 𐁹
 𐁺
 𐁻
 𐁼
 𐁽
 𐁾
 𐁿
 𐂀
 𐂁
 𐂂
 𐂃
 𐂄
 𐂅
 𐂆
 𐂇
 𐂈
 𐂉
 𐂊
 𐂋
 𐂌
 𐂍
 𐂎
 𐂏
 𐂐
 𐂑
 𐂒
 𐂓
 𐂔
 𐂕
 𐂖
 𐂗
 𐂘
 𐂙
 𐂚
 𐂛
 𐂜
 𐂝
 𐂞
 𐂟
 𐂠
 𐂡
 𐂢
 𐂣
 𐂤
 𐂥
 𐂦
 𐂧
 𐂨
 𐂩
 𐂪
 𐂫
 𐂬
 𐂭
 𐂰
 𐂱
 𐂲
 𐂳
 𐂴
 𐂵
 𐂶
 𐂷
 𐂸
 𐂹
 𐂺
 𐂻
 𐂼
 𐂽
 𐂾
 𐂿
 𐃀
 𐃁
 𐃂
 𐃃
 𐃄
 𐃅
 𐃆
 𐃇
 𐃈
 𐃉
 𐃊
 𐃋
 𐃌
 𐃍
 𐃎
 𐃏
 𐃐
 𐃑
 𐃒
 𐃓
 𐃔
 𐃕
 𐃖
 𐃗
 𐃘
 𐃙
 𐃚
 𐃛
 𐃜
 𐃝
 𐃞
 𐃟
 𐃠
 𐃡
 𐃢
 𐃣
 𐃤
 𐃥
 𐃦
 𐃧
 𐃨
 𐃩
 𐃪
 𐃫
 𐃬
 𐃭
 𐃮
 𐃯
 𐃰
 𐃱
 𐃲
 𐃳
 𐃴
 𐃵
 𐃶
 𐃷
 𐃸
 𐃹
 𐃺
 𐃻
 𐃼
 𐃽
 𐃾
 𐃿
 𐄀
 𐄁
 𐄂
 𐄃
 𐄄
 𐄅
 𐄆
 𐄇
 𐄈
 𐄉
 𐄊
 𐄋
 𐄌
 𐄍
 𐄎
 𐄏
 𐄐
 𐄑
 𐄒
 𐄓
 𐄔
 𐄕
 𐄖
 𐄗
 𐄘
 𐄙
 𐄚
 𐄛
 𐄜
 𐄝
 𐄞
 𐄟
 𐄠
 𐄡
 𐄢
 𐄣
 𐄤
 𐄥
 𐄦
 𐄧
 𐄨
 𐄩
 𐄪
 𐄫
 𐄬
 𐄭
 𐄮
 𐄯
 𐄰
 𐄱
 𐄲
 𐄳
 𐄴
 𐄵
 𐄶
 𐄷
 𐄸
 𐄹
 𐄺
 𐄻
 𐄼
 𐄽
 𐄾
 𐄿
 𐅀
 𐅁
 𐅂
 𐅃
 𐅄
 𐅅
 𐅆
 𐅇
 𐅈
 𐅉
 𐅊
 𐅋
 𐅌
 𐅍
 𐅎
 𐅏
 𐅐
 𐅑
 𐅒
 𐅓
 𐅔
 𐅕
 𐅖
 𐅗
 𐅘
 𐅙
 𐅚
 𐅛
 𐅜
 𐅝
 𐅞
 𐅟
 𐅠
 𐅡
 𐅢
 𐅣
 𐅤
 𐅥
 𐅦
 𐅧
 𐅨
 𐅩
 𐅪
 𐅫
 𐅬
 𐅭
 𐅮
 𐅯
 𐅰
 𐅱
 𐅲
 𐅳
 𐅴
 𐅵
 𐅶
 𐅷
 𐅸
 𐅹
 𐅺
 𐅻
 𐅼
 𐅽
 𐅾
 𐅿
 𐆀
 𐆁
 𐆂
 𐆃
 𐆄
 𐆅
 𐆆
 𐆇
 𐆈
 𐆉
 𐆊
 𐆋
 𐆌
 𐆍
 𐆎
 𐆏
 𐆐
 𐆑
 𐆒
 𐆓
 𐆔
 𐆕
 𐆖
 𐆗
 𐆘
 𐆙
 𐆚
 𐆛
 𐆜
 𐆝
 𐆞
 𐆟
 𐆠
 𐆡
 𐆢
 𐆣
 𐆤
 𐆥
 𐆦
 𐆧
 𐆨
 𐆩
 𐆪
 𐆫
 𐆬
 𐆭
 𐆮
 𐆯
 𐆰
 𐆱
 𐆲
 𐆳
 𐆴
 𐆵
 𐆶
 𐆷
 𐆸
 𐆹
 𐆺
 𐆻
 𐆼
 𐆽
 𐆾
 𐆿
 𐇀
 𐇁
 𐇂
 𐇃
 𐇄
 𐇅
 𐇆
 𐇇
 𐇈

「電話……電話の音！」

「で……んわ？」

揺決理も、その音を聞いたみたいだ。

「ええ。そうね、電話の音だね。でもおかしいわね。私が使ったときは通じなかったわよ?」

先ほど、揺決理は警察に電話をするために、電話を使っている。そのときは、全く通じることはなかった。

「だが、今でもなってるぜ！ほら！」

[illegible]

まだ鳴り止むことはなかった。

正和は、取りに行こうと言う。だが、炎宿魔は拒否する。

「これ以上……誰かが死ぬとか……もういや！正ちゃんまで死んだら……あたし……」。

炎宿魔は、また涙を流す。揺決理が炎宿魔を抱きしめる。

•
•
•
•
•
•
•
○

ひ
り
り
り
り
り
り
・
・
・
ひ
り
り
り
つ
・
・
。

電話は切れてしまったみたいだ。正和は少しがっかりしたような顔を
をした。

だが、炎宿魔のことも一理ある。

もしかしたら、犯人がおびき出すための罠かもしれないのだから。

「そつだよな・・・炎宿魔。悪かったな。もう鳴ってねーし・・・
いか」

ピリリリリリリリリ・・・びりりりりりりりり・・・
。。

・・・。。

また、電話のコール音。

どこから鳴っているかは分からないが、確かに聞こえるんだ。
電話の音が……。

「……………」

正和が、他の6人に相談する。

炎宿魔は、断固行かない。

揺決理は、どちらでもいい、という顔をしている。

立向路もそうみたいだ。

美由紀は行かない。

盛多は行きたいみたいだ。

狩煉も……………。

「もしかしたら、電話が通じるようになっていくかもしれないですよ？」

だったら、行ってみれば……………」

狩煉は、行かないなら私1人で行く……………と言っている。

さすがに狩煉1人で行かすわけにもいかない。

どうやら厨房の電話機が鳴っていたみたいだ。
厨房に入ると、コール音が鳴り響いているのがわかった。

「よし……俺が取るぞ。」

正和は、唾をぐくり、と飲み込む。少し緊張しているみたいだ。

がちゃ……。

受話器をとる……。一瞬落としそうになるも、揺決理が、下から
キヤツチする。

「落ち着いて？」

「……ああ……。」

受話器を耳に当てる……。

「だ、誰だ……？」

正和は

怒鳴っているだけだが、それでも無言のままだ・・・。

「くそ・・・誰だよ・・・一体。」

！？

なんだ・・・！？今の・・・

反響・・・？

不思議な違和感・・・。
違和感とかじゃなく、明らかにおかしい・・・。
だって、だって・・・。

今・・・この受話器から・・・
・・・。

「もう……やめにしたらどうですか？」

狩煉が、無理やり受話器を戻す。

正和は、ばつが悪そうな顔をしながら頭を掻き篦る。

「無言電話だった……。ちくしょ……………」

？

狩煉は、正和を睨んでいる……………。

見渡すと、揺決理も正和を見ている……………そう、それは……………
……哀れなものを見る目で。

「おい、なんだよ……俺の顔に何かついてるか？」

「あなた、昼間のうちに信他を呼びにいったんですね？」

「は？」

狩煉が、いきなり何かを語りだす。

ごまかしたつもりだったが、正和には、狩煉がこの後何を言い出すのかがなんとなくが分かっていた。

「何の話だ？」

「あなたは、昼過ぎに信他を呼びに行った。そのときのこと・・・あなたはこう言っていましたよね？」 部屋の前で話したが、結局何か用？と言われて追い返された・・・」と。

「ん・・・ああ、言っただぜ。」

「でも、あなた・・・なぜ部屋に入らなかったんですか？」

・・・。

「おいおい、どうやって？ 通り抜。フープでも使えってか？」

はっははは。さすがに俺はドラえもんじゃないんでんなことできねーぜ？」

「・・・・・・・・・・。」

その答えを聞いて、狩煉は確信する。

狩煉の中で固まっていた答えが・・・確信する。

「なぜ、そこでそんな下手な言い訳するんですか？」

「ん？」

「”本人の許可も取れずに部屋に無断で入るのは悪いことだと思っ
た・・・”でいいじゃないですか？」

正和は、驚いたような顔をする。

いつのまにか、厨房はおかしな空気に変わり始めている。

「何の話だよ？」

「……………あなた……………なんで隠そうとするんですか？あの
時……………その呼びに行ったとき……………あなた……………」

マスターキー、持ってましたよね？」

約6時間程前・・・。

「そつえばさあ、正ちゃん。」
「ん？なんだよ？」

「信他を呼んできてよ。全然話聞いてくれなくて・・・もしかしたら正ちゃんなら大丈夫かも知れないじゃん？お願い！」

「んゝ、まあいいか。1階だっけか？行ってくるな。」

「うん！はい！」

「おう！じゃあな。」

「ね？炎宿魔、あなた確かにマスターキー、正和さんに渡したのね？」

「う、うん……。はい！って……。正ちゃんに……。だって、来ないだろうから、中に入って説得して……。って意味で。」

「……………」

正和は、黙ったままだ。何かを考えているみたいだ。

「そういうこと。あなたは信他のところに行った。それは間違いない。なぜなら、炎宿魔もその後見に行こうとして正和さんと会っているから。」

「……………」

「私は……そのときに信他を殺したと考えてる。」

「こ、殺した？俺が……？」

狩煉はこくり……と頷く。

それを聞いて、炎宿魔は驚いたように顔を上げる。

盛多も、美由紀も。立向路はそんな馬鹿な……という顔をしている。

揺決理は、その話を聞いていたみたいなので、特に驚きもせず、ただただ無言で目をつぶっている。

「おいおい待てよ……第一、信他は喋ってたじゃネーか！夕食前にも素っ気無くなにか喋ってたぞ！」

「え？信他が喋って？どこにそんな証拠が？」

狩煉は、笑みを浮かべる。

「な、んだと？」

「あなたが夕食前に信他のところに行き、”素っ気無く返された”
と言っただけよ？」

つまり・・・・・・・・・・

あなたの狂言でしかない。と言ってるの。私は。」

・・・・・・・・・・。

っはははは。

馬鹿じゃん。早くその女を黙らせようよ。

うるさいだけじゃん。

物的証拠は？と言えば完璧じゃん！

それとも・・・・・・・・・・

殺シチャオウカ？

「あなたは．．．．信他を殺害した後、何食わぬ顔で、夕食をして、炎宿魔を見つけそうになったら、内線電話を使えばいい．．．と言った。」

「そして、またあなたの狂言。助けて．．．と言った。といえはなんか「その時間信他は生きていた」とごまかすことは出来ますよね？」

「なら、炎宿魔がドア越しに聞いた「信他の声」はどうなるんだ？まさか炎宿魔まで共犯．．．ってことにするのかよ？」

正和は、にやりと炎宿魔を覗き込む．．．。

「!」

炎宿魔にとってそれは．．．。

オマエモミチズレダ。

と言っているように思えた。

「そんなことないですよ？炎宿魔が聞いた声は、”信他の部屋で聞こえた”信他」と判断したに過ぎない。」

「何言ってるんだ？」

「知ってる？って、知ってますよね？使ったんだし。」

家の内線電話ってね、一定時間誰かが出ないとオンフックでも音がでるようになってるんですよ。」

「・・・・・・・・。」

「よくあるじゃないですか？ご用件がある方は、発信音の後にメッセージを・・・とかいうの。あれも、オンフックでも音が聞こえますよね？」

「はあ？内線電話にそんなもんなかったぞ？」

「違います。内線電話は15秒以上でないと自動的にオンフックで声が漏れるようになるんです。」

そこで、盛多が口を挟む。

「つまり、正和。狩煉ちゃんが言いたいのは、お前が信他の声の代わりをした・・・と言ってるんだ。」

「俺が・・・信他の声の代わり？」

「そうです。あなたはオンフックで声を出した。信他の声真似を。」
「そして、それを炎宿魔は”信他の声”と思い込んだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。何だよそれ、それなんて・・・・・・・・いや、なんでもねえ。」

正和は、何かを考え込むように黙ってしまった。

そして、んで？といいながら、先を促す。

「あなたは、信他のふりをして、”炎宿魔が心配だから、少し出てくる・・・と言った。」

「でも、ここから少しおかしいんですよ。
炎宿魔に聞くと、信他が何も話さなくなってから、
少し経った頃にようやく鍵を開けて、そしてようやく死体を確認したみたいなんですよ。
その時間。」

7分はあつたみたいです。

おかしいですね？

あなたはどこで、何をしていたんですか？」

はっ ははは。なるほど、そう来たか。頭冴えるな、お前。

「……………おいおい、お前自分で言ってるじゃネーか炎宿魔が部屋に入ってから7分以上経過しているってなら…………。」

「一番疑わしいのは、炎宿魔じゃねーか？」

「！？そんな・・・正ちゃん。」

炎宿魔は正和を見上げながら、悲しそうな顔をする。そして、揺決理にしがみついて、声を出しながら泣いてしまった。

「最低ね・・・あなた。」

揺決理が鋭い目で正和を睨みつける。

悪かったな、最低で。

「人を殺人の犯人呼ばわりするのは、最低ってことにはならないんだな。覚えておくよ。」

「黙れ!!!!!!!!!!!!!!」

狩煉は、正和に怒鳴る。

いや、吼える、と言っても過言ではないくらいの声だった。

「あなたは、その間、おじいちゃんを殺しに行ったんだ！それで何食わぬ顔で……信他の部屋に……。」

「……………」

「ああ……まだ言い訳あるんですよ！？」

炎宿魔が殺したかもしれないと。

私は素人だから、わからないですけど、信他の死体、何時間か経っていますよ？

少し固まった……っていうか時間は経っていると思います！

それに、7、8分ですよ？

殺して、死体をクローゼットに入れて、返り血もあつたかもしれない！服も取り替えて、床にある血も拭いたっていうんですか！？

できるっていうんですかっ！？

「……」

狩煉は、涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら、正和に叫ぶ。

必死に、必死に。

必死に

炎宿魔を守った。

こんな殺人鬼に。

こんな殺人鬼に姉を殺人呼ばわりされるわけにはいかない。

そう思い、必死に庇う。必死に守る。

それが、私にできる炎宿魔への罪滅ぼし。

「.....」

へへ、こいつ、頭いいんだな。

もっとも、トリックを解いたとかじゃないけどな。

はいよ、降参降参。

間違ってもないし、もういいか。めんどくせえ。

そうすると、観念したように。正和は近くにあった椅子に腰を下ろす。

そして、朗らかに笑うと。

「おめでとさん。」

と言呟いた。

何やってんのさ？

本当に馬鹿。

犯人呼ばわりされて、嬉しいの？

馬鹿だな。本当に。

「.....」

[illegible]

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

厨房は、誰にも、なんともいえない空気に包まれている。

誰も何も口に出来ない。

誰も・・・何も。

なんだろう。
この空気は。

「ん？これって、俺、2時間ドラマ的に言うと、
動機とかぺちやくちや話さなきゃいけないんだよね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「あいつが・・・・・・・・俺を！俺を！！！！！！！！！！」

冗談でも、王様ゲームで抱きしめやがったから！

とかでいいか？」

狩煉は、それを聞いて、涙が止まらなかった。
そして、

パシン！と、

正和の頬を引つ叩く。容赦なく。

「女のビンタ程怖いものなんてねーな……。やっぱり。」

正和は、狩煉を見つめたまま、笑みを浮かべる。

「ふざけるな……。どうして……。信他を……。どうして……。おじいちゃんを……。」

「……。さあな。」

狩煉は、容赦なく正和の襟を掴むと、投げ飛ばした。

「お前え！なんで！なんで信他を殺した！！！」

ふざけるなあ！ふざけるなあ！！！」

力は少しはあるみたいで、正和はそのまま吹き飛ばされた。

いつて、と言いながら腰を押える。

「もういいだろ。さつさと縄にでも括れよ。それか殺せよ、俺のこ
と。憎いんだろ？なら殺してみろよ。」

「！！！！！！！！き、貴様あああああ！！！！！！」

狩煉は、挑発されて、近くにあった果物ナイフで、正和を切りつけ
ようとする。

ものすごい形相でだ。ナイフを両手に持ちながら、そのまま正和に
突進する。

それを、盛多が必死に抑える。

「お、落ち着け！！狩煉ちゃん！殺したら、君まで殺人を犯したこ
とになるぞ！」

「」・・・めんな、炎宿魔？」

ごめんな、炎宿魔。

と、正和は言っていたのだった

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

P a r t 1 0 T h e m i r a c l e d o e s n o t h a p p e n (奇)

もつすぐで終わるかな？いや、まだまだかな。

Part 10 The miracle does not happen

天貝家 本家 屋敷

セキュリティルーム

午後9時04分

結局何も変わりはないのだ。

「・・・・・・・・。」

正和が自供しても、結局は意味がない。
そう、意味が。

誰もが疑心暗鬼に陥る。

狩煉はそこまで考えられなかったのだろうか？

「
．．．．．」

人は疑うことでその人を考える生き物。
人間にだけ許された感情。

「
．．．．．」

結局は同じなのだ。

その後、なんとか盛多は狩煉を落ち着けることが出来た。

治まる気配がなかったのだが、盛多が必死にいろいろなことを語っていくうちに、気持ちも和らいでいった。

今は、監視カメラのモニターをじっくり見つめている。

だが、次に陥る人間の思想なんて簡単なものだ。

” 本当に正和が犯人なのか？ ” だ。

「・・・・・・・・ふん。」

正和はシラを切ったままだ。

幾らどうやって殺したんだと聞いても、そんなもんでもいいだろ？と答えるばかり。

狩煉も、もう馬鹿馬鹿しくなったみたいだ。

正和を汚らしい何か・・・・とでも思っているようで、見向きもしない。

「嫌われたものだな・・・・。」と、皮肉をこめていつているみたいだ。

正和は、とりあえず倉庫に閉じ込めておくことにした。

倉庫は、屋敷の玄関の、ちょうど近くにある場所。

玄関の扉から、ちょうど左方向に位置している。

もっとも、使用人以外めったに使わない場所だ。

倉庫なら、外側で鍵をかけることができる。

それに、セキュリテイルームから監視することも可能だからだ。

セキュリテイルームから、正和の動向を、余すことなく監視することができるとができる。

死角ができないようにしているみたいだ。

「おうおう。ここが俺の城か。飯はこんなにくれんのか？一晩じゃ食べねーぜ。」

缶詰をビニール袋に包み、そのまま倉庫の中に、吸い込まれるように、するすると入っていく。

「・・・・・・・・・・。」

誰も何も言わない。

いや、言えない。

人生、殺人を犯した人に合うなんて何度あるのだろうか・・・・。

「・・・・・・・・。」

そんな、不謹慎事を、盛多は考えていた・・・・・・・・。

「な・・・・や？」

「え？」

正和が、倉庫に入る直前に、何かを口にした。

なんだろう？

揺決理以外の人たちは、気がつかなかったみたいだが、揺決理にははつきり聞こえた。

「汝は人狼なりや？」

「え？」

倉庫に入るときに、正和が言った言葉を、揺決理が復唱した。
炎宿魔がそれを聞いていたみたいだ。

「何、それ？」

「汝は人狼なりや？知らない？」
なんじ じんろう

「推理ゲームみたいなものよ、本当はかなり奥が深いから簡単な説明しかないわよ？」

揺決理は、炎宿魔に向き合う。少しの暇つぶしにでもなれば、いいと考えているみたいだ。

「何人か、あるいは十何人か、何十人かという大人数でやるの。それでね、人か、人狼か、狐を決める。」

ああ、決めるといっても、誰がどの役なのかは全くわからない。仲間同士は分かるけどね。

本当は、占い師・とか霊能者とか、色々あるんだけど、長くなるから省くわ。

それで、最終的な勝利条件は、村人は人狼を全滅させること。

人狼は、村人と人狼が同数の人数になること。

最後に狐は、2つのいずれかが成り立ったとき自分が生き残っていたら勝利。

という本当に難しくて奥が深いゲームよ。」

炎宿魔は、何かなんだかわからないという顔をする。

「くすつ。まあ、実際にやると楽しいんだけどね。」

揺決理は、生きて帰れたら、やらしてあげるわ。と言って炎宿魔の涙をハンカチで拭く。

「でも、なんで正ちゃん、そんなこと言ったのかな？」

「・・・・・・・・・・。このゲーム、もっとも簡単に言つと、これ。

”誰が、人狼で、誰が村人で、誰が狐なのか？”

これからまず始まつて、みんなで推理しあう。」

「待つてよ。推理し合つて・・・・誰が犯人かもわからないの推理なんてできるの？」

「そう、それこそがこのゲームの奥が深いところ。

この人の推理は信用できる・・・。

この人は人狼じゃない・・・

狂人（狼側のチーム。でも人。場を乱すためのフェイク役。）かもしれない。だからこんな推理を・・・。

とかね。

本当に頭使うのよ？

かといって、裏の裏を暴く！とかいって、相手が裏しか考えたなかった・・・とかもあるんだけどね。」

「へっ！おもしろそう！」

「そう、まさに今の私達・・・ということよ。」

炎宿魔は、ようやく”正和がそれを言った”理由を理解する。

「つまり……、共犯がいるってこと!？」

炎宿魔が、その声を上げる。あまりに声が大きかったため、セキユリテイルームにいる全員に聞こえてしまった。

しばらくの静寂の後……、

「何の話……？」

と言いながら、狩煉が炎宿魔ではなく、揺決理を見る。

とても鋭い目で。

「別に、ただゲームの話をしてただけよ。」

「そうは思えないけど、揺決姉、何か隠してるの？」

「何よ？隠してるって。」

狩煉が、立ち上がって声を上げる。

姉妹喧嘩のようにも思えるが、言っている内容はかぎりなくヘビ―だ。

「何！？共犯って！この中に共犯がいるとでも！？

あの殺人鬼の共犯が！？いるの！？この中に！？ああ・・・そう。

だったら一番疑わしいのは、盛多さんと美由紀さんですね！一緒に来たわけだし！」

盛多と美由紀は、お互い顔を見合わせ、必死に弁解する。

「おいおい、ちょっと待てよ狩煉ちゃん。

俺たちはつねに一緒にいたじゃないか。どこにも疑う余地等ないだろ？」

美由紀もコクコクと、首を動かす。

「いいえ！昼間や夕方は全然！むしろ疑わしいくらい！全然アリバイもないじゃないですか！！」

狩煉は、もう正常な判断が出来なくなってしまうている。

思いついたことをひたすらギャンギャンと耳障りに叫んでいる。

「・・・・・・・・・・なるほど。」

美由紀は狩煉のその行動を”冷静に”分析する。

もつとも、本当に冷静に判断しているのか？

それとも犯人（狂人）だから場を乱そうとしているのかは分からないが。

「狩煉さん・・・あなたが共犯なんじゃないですか？」

「な!？」

その言葉に、狩煉だけじゃなく、美由紀以外の全員が驚く。

「だって、そうじゃないですか。」

正和さんを、まずへんてこなおかしな推理で追い詰めて、それで倉庫に閉じ込めるゝとか言っつて、何か言われる前に口を塞ぐうってことですよね？

第一、あんなに暴れたのも実は演技だった・・・んじゃないですか？

「で、でも!あいつは自分で認めた!!信他とおじいちゃんを殺したことを!」

「あれでは反論しても無実は証明できない!

つまり、自分から倉庫に入った方が得、とか思ったんじゃないですか!？」

あなたが、無理やり追い詰めて、その後・・・

殺すために!!!!!!!!!!」

殺スタメニ…………

その言葉が、なぜか、全員の首筋を撫でるかのようになり、嫌な感覚を覚える。

「…………言わせていけば…………このっ!」

狩煉は、美由紀を殴ろうとする。

だが、揺決理がそのこぶしを必死に抑える。
と、いうより揺決理が美由紀を庇った、といった方が妥当かもしれない。

「本当は！あなたが！

正和さんの共犯だった！でもいいと思うんですけど！？」

本当はあの推理はめちゃくちゃで、倉庫に閉じ込めるゝだとか言うて正和さんを倉庫に置いておく。

それで倉庫を内側からでも一人で抜け出せる方法を教えて、また、無言電話だゝとか言いながら外におびき出して2人で襲うとか？しかも不意打ちで！」

「醜い。」

人の疑心暗鬼ほど醜いものはないな・・・。

これで誰もが誰もを疑うわけだ。

美由紀が、こう言ってしまったらもう誰もが疑心暗鬼を止めない。

本当は演技？本当は犯人？

本当は……共犯？

本当は……という言葉で幾らでも犯人像を作り出すことが出来るから。

リアルでやるとここまで醜いんだな・・・。

倉庫では、セキュリティルームで行われている”話し合い”が
手取るように分かる。

誰だろうか・・・いつのまにか倉庫にも声が漏れている。
誰かが誤ってスイッチを押してしまったのだろうか？

全てのやりとりを聞いていた正和は、醜い・・・と何度も呟く。

「あいつら・・・俺を犯人にして、まだ犯人を”作りたい”って
ことか？ははははは。」

勝手にしろ。

馬鹿が。」

すぐそこまで迫ってるのに！何馬鹿な推理ごっこやってるんだよ！

このままだと・・・

・
・
・
・
・

本当に・・・何が起きてるかわからない。

何が起きてるか全くわからない・・・あいつらにも、俺にも。

ああ・・・もう、めんどくせえなあ。

にしても・・・。

正和は、缶詰を開けて、鯖の味噌煮を、くっちゃくちや言わせながら食べ始めた。

「ありゃ、一体誰が・・・。あんな悪趣味俺にもねーよ。吊るすわけねーだろ・・・。うーん、もう吹っ切れたからどうでもいいが、早くあいつらに湯を入れてやらねーとな・・・。」

正和は、あぐらをかきながら、何かを考えている。

そのたび、あーでもない、こーでもないと言っている。

「……………」

「!？」

まあさあかあずう君〜？

「……………」

あれえ？どうしたの？なんで倉庫にいるのかなあ？
「……………」

早くあの馬鹿共と言った方がいいんじゃないか？

「……………」

まあ、どうでもいいけどね？

「……………」

それよりさあ、早くそこから出れば？出れないのか・・・あっそう。
情けない情けない。

結局さ、いつもいつもどこかの檻に閉じこもっているわけだね。

いや、閉じ込められる・・・だね。

馬鹿ジャン。ただの。

「うるせえ、消えろ、消えろ、消えろ！！」

消えろおおおおお！！！！！！！！！！

セキユリテイルームでは、
険悪なムードになっている。

さきほどよりも、数倍も居辛いところだ。

誰もが、目を合わすと、にらみ合うのだ。
“お前が犯人なのか？”という目で。

炎宿魔は、まとも険悪になったこの部屋に居たくないばかりに、部屋の隅に縮こまり、耳を塞いでいる。

狩煉は、何事もないように振舞っている。

今は、誰もカメラを見ていない。

それに気がついた揺決理が、立ち上がりモニターを覗き込んだ。

「・・・・・・・・。」

相変わらずだ。

相変わらず、どのモニターにも、その部屋の陰湿な空気しか伝わってこない。

「・・・・・・・・。はあ。」

今日何回目のため息だろうか？

揺決理は、精神的にも体力的にも、最早限界だった。

本当は、この部屋の人たちは、一刻も早く睡眠につかなければいけないのだろう。

だが、そんなことができるほど、ここにいる人たちは、馬鹿ではない。

眠ることなど出来ない。

もしかしたら、この中に、犯人と言える人物が、凄んでいるかもしれないのだから。

「え？」

揺決理が、突然声を出す。

今は、些細なことに敏感人たちだ。特に狩煉が。

「何？揺決姉。」

無愛想に揺決理を、下から見る。

モニターを見ている揺決理の、表情は、キョトンとしている。

「ねえ？これ……。」

いや、揺決理はモニターはモニターでも、カメラのモニターの隣にある、パソコンのモニターを凝視しているのだ。

「これ・・・なんだと思う?。」

パソコンのモニターには・・・、

赤い文字で、「K T S H Y」と書かれている。

それは、電子メールのようだった。

日付は・・・3日前。

相手は、もちろん誰か分からない。（少なくとも、日本人の名前ではない。）

f r o m / M e l d y - o i l

と、書かれている。

「メルディオール！？メルディオールからの……メッセージ！？」

狩煉がそう大声で言うと、全員が、バツと顔を上げる。

全員が、立ち上がり、そのパソコンを覗き込む。

「どついう事だ！？これが、メルディオールからのメッセージだとい！？」

立向路が、声を荒げる。

「でも、これ、何？暗号ですか……？き……と……しい？」

K T S H Y。

「と、その前に、もしかしてこのパソコン、ネットに繋げるんじゃないか？」

盛多が、覇気を取り戻したように揺決理に尋ねる。

だが、答えは決まっている。

当たり前だ。

目の前にパソコンがあって、このような状況なら、真っ先にそれを確認するだろう。

「ダメ。さっきやったけど、全く。ネットに全く繋がらない。」

このパソコンの電子メールの、未読メールが、これ一通だったの。」

揺決理が、パソコンのモニターを、コンコンと叩く。

少しガツカリしたみたいあだが、このメールの内容にも興味がある。

「K T S H Y なんだろう」

狩煉が、腕組をして、唸っている。

「………。これを解けば……いい？ みたいな奴……
……ですかね？」

「どうかしら？ 第一、普通手紙でしょ？メルディオールなんて悪魔が、本当にいるとして、こんな電子メール・・・なんて使うと思う？」

「じゃあ、これはなんだ？無関係には思えないぞ？」

何かあるのではないかと、考え込む。

だが、全く思いつきはしない。

まあ、それもそうだ。

こんな少しの暗号・・・そもそもこれが暗号かどうかわからないのだから。

何もすることがない5人は、この暗号の謎解きに専念している。

ただ、険悪なムードなままだったのだが。

「・・・・・・・・・・。」

ぐういゝんと、セキュリティームのドアが開かれる。
どうやら、内側から開けられたみたいだ。

「!？」

「・・・・・・・・。」

正和は、急に静かになると、あたりに耳を澄ます。

またも何かの音がする。

これは・・・・・・・・、

おいおい、冗談だろ！？

「足音か・・・？」

そう、確かに、それは足音。

人間の足音だ。

それもかなり近くにいる。

いや・・・近づいてくる!!

がちゃ、がたん。

「出よう、正和さん。」

か．．．れん？

倉庫の鍵を開けたのは、狩煉だ。

正和は、何しに来た？とも言うような目をする。

「早く・・・出てください、正和さん、は・・・・・・・・やく。」

ひどく疲れているみたいだ。

「どういう風の吹き回しだ？お前が俺を解放するなんて・・・な。」

狩煉は何も言わない。

ただただ出る、といってそのまま立ち去ってしまふ。

一瞬、殺しに来たのか？とも思ったが・・・・・・・・どうやら違うみたいだ。

「一体どうしたんだ？」

狩煉は黙ったままだ。

正和は、明らかにおかしいと思ったが、あえて言及しなかった。
狩煉の今までも行動を思えば、このようなことをすることは、絶対にありえない。

殺人鬼と疑った者と、このように行動を共にしている。

それに・・・、

セキュリティルームから全く別の方向に移動している。

狩煉は何を考えているのだろうか・・・？

正和には、全く分からない。

「おい、そろそろ話せよ。お前は何かしたいんだ？」

古びた窓が、ガタガタと揺れだす。

雨風は、一層に収まる気配がないみたいだ。

「・・・・・・・・・・、あなたには護衛役をしてもらいます。それくらいいいでしょ？」

狩煉は、露骨に嫌そうな顔をするも、正和が自分を襲わない・・・
という確信はあるみたいだ。

それに、狩煉自身、未だに正和が行った殺しに、疑問を持っているのも事実だ。

なぜ、この男はこれ以上誰も殺さないだろう・・・という安心感のようなものがある。
なぜだろう？

少なくとも、セキュリティルームにいるメンバーよりずっと信用できる・・・そんな感じが、したみたいだ。

「まあ、いいけどな、俺は。暇だったし。でも、いいのかよ？揺決理とかにはなんて言ってきたんだ？」

「どうせ監視カメラとかで、動向を追ってますよ。
何も言ってきてません。マスターキーは、モニターの横に置いてあったので、盗んできました。」

よくやるな・・・と正和は関心（呆れ？）する。

「それで、何しに行くんだ？」

「ちよつと、確認したいことがあるんです。
というより、欲しいもの・・・かな？だからついて来てください。」

狩煉は、ずけずけと、廊下を歩いていく。

もしかしたら、曲がり角から襲ってくるんじゃないか・・・

とは、思ってもいないんじゃないか？というような、歩き方だった。

やがて、歩いていくと、4つの部屋が・・・って。

「おい、俺らの部屋か？」

「はい。」

狩煉は、マスターキーを取り出しながら、その扉の前に立つ。

1号室・・・つまり、

「盛多の部屋に・・・何のようだよ？」

「どうせ監視カメラでばれてるんですね？だったら堂々と入りましょう。」

狩煉は、鍵を開けて、勢いよく扉を開け放った。

電気はついてなく、陰湿そうなイメージがする室内。

暗いというのは、人に、恐怖心を作り出す。

狩煉も、一瞬怖気づく。

もしかしたら、ここに誰かが潜んでいるのではないか・・・と。

だが、よく考えると、こんな人がくるかもしれない場所で、潜んでいる必要もない。

もっと潜むところなど、たくさんあるだろう。

と、ポジティブシンキングに考えてみる狩煉。

「さあ、入りますよ。後ろ見ててください。」

狩煉は、そのまま部屋に入り、照明のスイッチを点ける。
そして、盛多の鞆を、そのまま漁りだす。

正和は、欠伸しながら、ドアの前に突っ立っているままだ。

「何やってるんだろ？狩煉・・・。」

突然部屋を飛び出し、正和を連れて、盛多の部屋に入っていく狩煉を監視カメラで確認できたが、中で何をしているかまでは、わからなかった。

「俺の荷物漁ってるのか？狩煉ちゃんは。正和じゃないんだから、怪しい雑誌なんてでてこないぞ？」

場を賑やかにしようとしたのは明らかだったが、当然だが、白け切ってしまう。

盛多は、特に焦ることはなかった。

何も見つからない・・・という意味だろうか？

「・・・・。」

本物かどうかはわからない。

だが、それを見て、少し強張ってしまう。

そう・・・モデルガンとは違い、何か違うオーラを持っている。

重みがある・・・というのだろうか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんで・・・盛多がそんなもんもってんだよ？」

狩煉は、その拳銃をかちやかちやと、弄りだす。
マガジンの中身を確認する。

装弾数は、全部で10発。

銃の中にマガジンを込めて、狩煉はそのまま腰にしまい込む。

「おい！なんでお前は盛多がこれを持ってるって知ってたんだ！？」

「その前に、なんで盛多さんがこれを持っているかを、聞いたほうがいいんじゃないですか？」

「まあ、そうだな。」

狩煉は、はあとと言うと、面倒くさそうに説明し始める。

「どうせ盛多さんにはばれてるんですから、言いますけど、これ、おじいちゃんに聞いたんですよ。

今宵、この館に不吉が迫ってくる。

日陰 盛多の持ち物の中を探しなさい。きつとためになることがあるって……。」

「おいおい、なんであのじじい知ってたよ……っていうか、なんで盛多が……。」

「知りませんよ……とにかく、一度戻って盛多さんに……、

たつ たつ たつ たつ……。

「!？、誰!？」

人の足音！それもかなり焦っているみたいだ。

多分、走っているのだろう。みるみるうちに、離れていってしまう。

狩煉は、もちろん、見逃すわけがなかった。

銃を構え、そのまま部屋を出て行く。全速力で！

ここで逃すわけにはいかない、なんとしても。狩煉はそのまま犯人を追いかける！

「おい！あの馬鹿！」

正和も、もちろん狩煉のことを追いかけようと、

部屋を出るが、狩煉は既に曲がり角を曲がってしまったらしく、どこにも狩煉の姿を確認できない。

足音はかすかにする。だが、どこを走っていったのかわからない。

「ほんとに……あいつは！」

ふと、正和は気がついた。

そうだ……セキュリティルームなら……狩煉を追っている！
盛多の部屋に入ったのだから！きっとそれも気がついている！つまり……、

犯人の動向も、追いかけている！絶対に！！！！

正和は、狩煉が駆けて行った反対方向に、走り出す。

間に合うか……それとも……。

一応、狩煉は銃を持っている。
なぜか盛多が所持していた銃を。

それにより、攻防では、はるかに狩煉のほうが優勢だろう。

しかし、正和には、なぜかそうは思えないのだ。

なぜだろう……。

「んなこと……今は……どうでもいい！」

狩煉……頼む！無事で居てくれ！

間に合え！間に合え！狩煉の……馬鹿やろうが……！！！！

「はあ……はあ……。」

確かに、人影は・・・書斎へと、入り込んだ。

そう・・・淘汰が殺されていた、その書斎に。

もちろん、このままセキュリティルームに戻って、犯人の動向を監視するのもいいだろう。

しかし、狩煉は、犯人にとって、この書斎は非常に有利であることを知っている。

この書斎には、部屋の中に非常口が設置してあるのだ。
いや、非常口とは呼べるか、実際には怪しい。

扉の下のほうにある、犬や猫が通るような小さな小さな扉。
見つけられるかもわからない。

だが、確実に外には繋がっている。

淘汰が昔、おもしろいだろうと言って自慢していたのをよく覚えて
いる。

まあもつとも、外に出れても、この周辺から脱出することは不可能
だ。

それは知ってはいるのだが・・・。

(・・・。行くぞ・・・狩煉。
ここで逃げたら・・・ここで逃げたら・・・また・・・大切な人が・・・死ぬ！)

狩煉は、勢いよく、書斎の扉を開け放った！

・・・いない。

中にもぬけの殻・・・と言っただろうか？

しいて言えば、相変わらず、淘汰の死体が、この部屋の真ん中に、堂々と吊るされている。

まるで、操り人形にも見えるその姿は、恐怖心を煽るのに、十分すぎるくらいのものだった。

「……………」
相変わらず、書斎は、何かぐすぶった様な、異質な匂いが漂っている。

ただ、その匂いに、血の匂いに塗れている。なぜかは、この惨状を見れば誰にでも分かるだろう。

「ど…………どこにいるの!？」

狩煉は、この緊張感に耐え切れずに、声を荒げる。

もちろん、狩煉の声以外、聞こえてくるものと言えば、一向にやむ気配がない、暴風雨ぐらいだ。

真つ暗な書斎では、どこに隠れているかもわからない。

電気のスITCHを、扉のすぐ近くで目だけで探している。

だが、見つかるはずはない。

こんな暗闇の中で、小さなスITCHを探するなど、ほぼ不可能に近い。

もし…………、一歩でも歩けば、襲ってくるのではないか…………？

そんな恐怖感が、狩煉を締め付けて、動くことが出来ない。

ただただ、自動拳銃の照準を、しきりに動かしている。

いつでも撃てるように、安全装置を外して、スライドさせる。

弾が銃器内に装てんされるのが、音だけでも分かる。

「はぁ・・・はぁ・・・。」

このままでは埒が明かない。

狩煉は、意を決して、淘汰の死体に近づく。

その周辺に、照明を点けるスイッチがあるのではないかと踏んだからだ。

「・・・・・・・・。」

自分の歩く方向に、銃口を向けながら、進んでいく。

これは・・・なんだろう。

武者震い？違う・・・。

ただ怖くて、震えているだけ・・・ね。

なぁんだ。

私、まだ震えることくらいできるんじゃないか。

大丈夫。

まだ、私は大丈夫！

「・・・・・・・・。」

・・・・淘汰の死体が吊るしてある裏側にたどり着く。

たどり着く？

たった、8、9歩なのにたどり着く・・・・なのか？

狩煉は、それを思うと少し苦笑する。

あはは。大丈夫、まだ笑える余裕がある。

こんなときこそ・・・・ね。

大丈夫、大丈夫。

もう、足が竦んだりしない！

私は、強くなった！！

「あ．．．．。」

あった。

照明のスイッチ。

狩煉はそれを弄くり、部屋に明かりを灯す。

ばあ、と部屋が、明るくなる。

とはいっても、普通に考えたら、まだまだ暗いほうで、漫画などは多分全く読めないだろう。

狩煉は、先ほどよりマシになっただろう。

と考え、部屋の隅っこに移動する。

そして、壁に背を向け、辺りを見渡す。

「・・・・・・・・。」

「だ、誰!」

何かがいる。

確実に。

いる。

いるのはわかるが、出てこない・・・。

気配がする・・・と言えはいいのだろうか？

わからない。

人の気配。

「・・・。。。」

え？

その人の気配は・・・外からする。

外に誰か・・・？

「！！！！」

何．．．．今の！何！？

今、何か気がついた！

何！？何！？私は何に気がついたの！？

待つて．．．．心を落ち着けて．．．。

落ちて着けない！！落ちて着けない！！落ちて着けない！！

今、扉の隙間から・・・・・

何か光った。

いや、もっと厳密に言つと……、

正和は、1分もせず、セキュリティルームにたどり着く。

セキュリティルームの前では、すでに狩煉以外の全員が、書斎に向かおうとしている。

「おい！狩煉が……」

正和が、話そうとするも、揺決理は、そんなこと知ってる……
というような顔をする。

「ええ、わかってる。急いで、早く!!」

揺決理が、炎宿魔に肩を貸す。

怪我しているわけではないようだが、足が竦んで動けないみたいだった。

「早く行きましょう!」

美由紀が、先陣切って行こうとするも、

「美由紀、焦るな。」と、正和に諭され、とぼとぼと、後ろの方に戻っていく。

「焦らないけど、迅速に。わが社のテーマだったな。」

盛多が、そう言つと、皆一斉に走り出す。

頼む!間に合つてくれ!!

もう誰かが死ぬとか・・・これっきりにして！

もう2人も死んだんだよ！？

普通は人の死なんて、しかも殺人なんて、何度も見るものじゃないのに！

こんな・・・こんなことって！！

狩煉の馬鹿！！狩煉！狩煉！！なんで・・・なんで！！

なんで書斎なんか一人で行ったの！？

銃声。

「! ! ! !」

ぱああん!!

5人は、一瞬止まってしまった。そんな・・・手遅れ？

いや、そんなことを気にしている場合ではない！

このままでは、狩煉が！狩煉が！

ぱあん！ぱあん！ぱあん！ぱあん！ぱあん！ぱあん！ぱあ
ん！ぱあん！！！！

何発も何発も、銃声が鳴り響く。

狩煉が！？まさか・・・犯人を！？

「無事でいて！狩煉！」

炎宿魔は、一人で走れる、と言って揺決理から離れると、まだふらふらしているものの、皆についていこうと必死に足を動かしている。

そうだ・・・私は守ってもらった！狩煉に！絶対に・・・死なないでよ！！狩煉！！！！

5人は、書斎にたどり着く。

「狩煉！」

立向路が、先陣切って、そのまま書斎の扉を蹴り飛ばす。

わかってた……わかってた……んでしょ？

くひゃひゃ。

狩煉は、淘汰と同じ格好をさせられていた。

その代わりと言ってはなんだが、淘汰の死体は、どこかに消えてしまっている。

ただ、一点だけ、淘汰と違う点が存在した。

「嘘……嘘……嘘。」

「いやああああああアあああああああああああああ
！！

あああつあああああああああああゝぐえぶごおえええぶちよ
ぐちゃ。

炎宿魔は、それを見て耐えられなくなり、吐き出してしまつ。

こんなとき・・・揺決理が炎宿魔をフオローするのだが、
目の前にの物に圧倒されて、何も出来ないでいる・・・。

狩煉の顔面が、容赦なくぐちゃぐちゃにされているのを見て。

脱落者↳天貝 狩煉↳

目撃者↳寺田 正和、天貝 炎宿魔、天貝 立向路、天貝 揺決理

櫻田 美由紀 日陰 盛多↳

午後9時54分

推定死因↳顔面を鋭利な凶器で跡形もなく刻まれてしまっている。

ただし、これが死因かどうかは、推定なのでわからない。

↳

悪いのはお前。くひゃひゃ

To be continued

Part 11 The tenth existence (前書き)

話進まない・・・。

Part 11 The tenth existence

「ねえねえ、ひやまあ。」

「何い？」

「これさあ、つまんない。」

$\vdots$

「だってさ、何にもなんないじゃん……。ほんとにつまんないよ。」

「そんなことないよ！」

「うんうん、つまない！ほんとに！」

ひやま、作るの下手糞だよ！あはははははは！」

いつの記憶だっけ？

ああ……もう10年以上前のだ……。

なんか悲しくなってきた……。はあ…………。

その後、狩煉と大喧嘩したんだっけ…………。

しばらく口も聞いてくれなかったな。

いや、私が口を聞かなかったんだっけ。ありやま。

別に……。嫌いだったわけじゃないんだよ？

「ねえ…………ひいやあまあ！まだ怒ってるのぉ！？ねええ！」
「……………」

「ひやまあ…………もう知らない！」

あの日から…………全然話さなくなっちゃったな。

そのまま、2人とも大人…………というか、話しづらい歳になっちゃって…………。

狩煉・・・。

まだ・・・謝って・・・ないのに。

謝って・・・ないのにつ!!!!!!!!!!

同日 天貝家 本家 屋敷

淘汰の書斎

午後9時55分

「あ・・・あ・・・か・・・れん・・・。

狩煉！狩煉！狩煉！！！！

あ、・・・あああああああああああああ！！」

誰も何も言えない。何もできない。

何もすることが出来ない。

いや、その表現は多分間違だろう。

何をすれば良いかわからない。誰にも。

揺決理でさえ、最早泣き崩れてしまった。今まで、周りに迷惑かけないように必死に堪えてきた。しかし、それでも揺決理は、もう限界だったに違いない。両手を顔に当てて、声を押し殺しながら、涙で顔をくしゃくしゃにしていく。見られまいと、必死に顔を隠しているのは、恥ずかしいからとか、そういう理由ではないみたいだ。自分が泣く事によって、周りもさらに悲壮感が増してしまう。それは目に見えている。だから耐える、堪え切れていないのにもかかわらず、尚も耐えようと必死になる。揺決理は、自分のことではなくいつも周りに気を使うようにしている。こんなときにも、それを気にしてしまう揺決理。いや、気にしているわけではない。いつもいつも気遣い続けている揺決理は、無意識にそれを実行してしまう。それに気がついた立向路は、揺決理の肩に手を置いて、「大丈夫？」と言声をかける。立向路は、揺決理や炎宿魔のように、頬に涙を流しているわけではないが、まぶた瞼を潤ませている。それに気づいた揺決理は、立向路にしがみつきながら声を上げる。人目も憚はばらない揺

決理を、立向路は初めて見る気がした。

「うう・・・うう・・・あつあ・・・。」

立向路は、先ほど揺決理が炎宿魔にしていたように、頭を撫でながら「大丈夫だから・・・大丈夫。」と呟く。

一方炎宿魔は、正和に抱きしめられながら、何かをぶつぶつと呟いている。

「ごめんね・・・ごめんね・・・。」

ごめんね、だ。炎宿魔は、正和の胸に顔を埋めながら、ごめんなさいと、呟いているのだ。

美由紀は、部屋の隅に行き、俯いている。ひどく疲れてしまっている。顔は、誰が見ても酷く疲れきっているのが目に見えている。目元には、うつすらクマも見えている。

「・・・。」

「・・・・・・？」

盛多が、狩煉の死体が吊るされている下のほうから、何かを拾いあげる。先端の方に、紐がついている何か。

「・・・お、守り？」

血がびっしりこびり付いたお守りのようなものだ。それを拾い上げて、周りに見せる盛多。

「おい、これ・・・狩煉ちゃんが持ってたやつか？」

すぐにそれを炎宿魔が奪い取る。

そして、何かのお守りだろうか・・・？その中身から、小さなメモ用紙のようなものを取り出す。

” ひやま、ごめんね　こんどいつしよにあそんでね ”

それは、幼少時に、狩煉が書いたものだ。

だが、炎宿魔はそれを読むことがなく、ゴミ箱に捨ててしまったものだ。喧嘩をしていた頃だったので、炎宿魔は、それを受け取らなかった。狩煉は、それをお守りに入れていたみたいだ。

「こ・・・これ・・・。そんな・・・。」

またも、炎宿魔の目から、涙が零れる。

今度は、声を出さずに、紙の文面を何度も読み返しながら、涙を流す。

「ね、炎宿魔。」

落ち着きを取り戻した揺決理は、炎宿魔の肩を抱いて、何かを語りかける。

「これね、いつか狩煉があなたと仲直りしたときに見せるって言うてたのよ？」

多分、あの時、あなたを守ろうとしていたのも・・・あなたへの・・・罪滅ぼしのつもりだったんじゃないかしら？」

あの時・・・そう、正和が、炎宿魔を犯人扱いしたときだ。

狩煉は必死に姉を・・・炎宿魔を守った。ずっと悔いてきた罪を・・・”守る”という形で晴らそうと思ったのか？それとも何か別の深い意味があるのだろうか？今となっては分からないが、炎宿魔は確信する。自分を守るために・・・狩煉は・・・狩煉は・・・

「・・・、狩煉。」

炎宿魔は、もう泣かない。むしろ、泣くことなどできない。

このやりきれない、むしろくしゃした気持ちは何だろう？犯人は絶対に許さない。絶対に。

これからやり直すつもりだった。このまま狩煉とむしろくしゃしたままなのは、自分もいけないと思っていたからだ。このパーティーで、狩煉とも話そうと、試みるつもりだった。それが、まさかこん

なことになって、あまつさえ、死んでしまっなんて・・・。

「・・・・・・・・。」

炎宿魔の目には、最早泣きつかれた・・・など、そういうものではなくなっている。

何かに燃えている・・・というのだろうか？犯人を見つける！狩煉のためにも、自分のためにも。

「・・・・・・・・。」

「顔面・・・か。」

正和は、狩煉の死体を見上げる。首から上が、鋭利なもので、ぐちゃぐちゃに切り裂かれている。服装がなければ・・・誰かわからないくらいに。

王道だね。

「あ……ずさん！」

「うるせえ！黙ってる！」

「えっ！？」「！？……。」

後ろから声をかけた美由紀に、正和が突然声を荒げる。美由紀は、びっくりして引き下がってしまう。

「ああ……わるい、考え事してた。わるいな、いつひひひ。んで、なんだ？」

美由紀は、それだけで小動物のように涙目になってしまう。それでも、キツと顔を正和に向ける。

「あの……不謹慎なんで、言えなかったんですが……、あの……あの死体……本当に、」

「おい、言つな。言いたいことはわかつてる。」

正和は、美由紀に、それ以上言うなど、ドスを効かせたような声を出す。炎宿魔や揺決理が、それを聞いただけで、何をし出すかわからない。美由紀も、それを分かっている、言おうと思ったのだろう、すぐに、顔を竦めて、盛多の近くに行ってしまう。

「・・・・・・・・これ。」

正和が、狩煉の死体の手から、あの拳銃を掴みとる。お守り同様に、血でべっとり塗れてしまっている。

ただ、掴むところは、黒い部分が見えている。要するに、血がついていないのだ。握った部分だけ。中の弾奏は・・・・・・・・空のようだった。

「・・・・・・・・。」

「おい、盛多。」

正和が、盛多に顔を向ける。盛多は、美由紀と何か話し込んでいるみたいだったが、その話を中断して、顔を向ける。

「何だ？」

キョトン、とした顔をしているが、何を聞かれるかは、大体わかったみたいだ。正和が掴んでいる、拳銃を一瞥して。

「分かるだろ？俺が言いたいこと。これ・・・・なんでお前が持ってたんだ？こんな物騒なもん。」

盛多が、押し黙ってしまう。珍しいことと同時に、正和は少し驚いた。監視カメラで、盛多達は、狩煉が盛多の部屋に入ったところを目撃したはずだ。それにもかかわらず、盛多は、下唇をかみ締めながら、戸惑っている。というより、何か言いたいことがあるみたいだが、素直にそれを言うことができない、という感じみたいだ。

「おい、盛多、なんか言えよ。これじゃ、俺が苛めてるみたいじゃ

ねえか。」

笑っているようだが、明らかに敵意をむき出しにしているのが、誰にでもわかった。

「言ってお前が信じるかどうか・・・だな。」

盛多は、ようやく口を開く。それでも、手汗をかいているみたいだ。何か焦っているのか・・・？

「とりあえず話してみろよ、信じるか信じないかは俺が決める。」

正和は、今度は笑うことなく、鋭い眼光で盛多を睨む。盛多は、それで正和の気迫に押されて、素直に話すことにしたようだ。

「そうだな・・・、その・・・あまり大声で言えないんだけどな、俺の家が持つてる・・・からな。」

「は？」

正和は、頭上にクエスチョンマークを出しながら、首を傾げる。いまいち、意味が分かっていないみたいだ。

「その・・・俺の家系・・・のこと、知らなかったか？」

正和は、いや、という顔をするが、本当は知っていた。古い付き合いだったから、酒の席でも、酔ってよく話していたのを、たまたま聞いたからだ。

「暴力団・・・というやつだ。俺は嫌なんだけどな。」

それを聞いていた、炎宿魔、揺決理、立向路、美由紀は、バツと顔を盛多に向ける。身近にいた奴が・・・暴力団？

汚いものを見るような・・・そんな目で、4人は盛多を見つめる。

盛多は、正和のように、皮肉を笑ったりはしなかった。

「・・・俺は袂を別った。色々あってな。本当に・・・色々と・・・もう、言えない。悪いな。」

盛多は、そのまま狩煉の死体の前に立つと、「すまない・・・」と言って頭を下げる。

詫びているのか？そもそも、なぜ盛多は狩煉に謝っているのだろうか？

「・・・おい、そんなに納得すると思うのか？」

正和が、盛多に近づいて、声をかける。盛多は、頭を上げない。ただ、狩煉の死体の前で、頭を下げ続けている。

「……………」

「……………おい、……………おい……………なんとか言えよ!!!」

正和は、盛多の髪を、掴み無理やり顔を起こさせた。その表情に、正和は驚く。

「!?!?……………」

盛多は、涙を……………流している。

今日あったばかりの女の子一人のために、涙を流しているのに、違和感を覚えた。もちろん、目の前に死んだ人いて、涙を流している、特に違和感はないはずなのだ。そのはずなのに。

正和は、何かが引つ掛かる。何かが……………。

「すまない、これ以上話せない。それに、俺の拳銃とは全く関係ない。今回の件は全く関係ない。頼む、これ以上聞かないでくれ。」

本当にか？本当に関係ないとも言えるのか……………？

何がなんだかわからない。

犯人も、動機も、アリバイも、何もかも出てこない。

そりゃ、狩煉のこともよく知らないし、全然話したこともないのは事実だ。

だが、それでも俺は天貝家に関して、少しは知っているつもりだ。

それなのに……

何も出てこない。

ここまで天貝家の人間が、殺されているにもかかわらず、何にもわからない。

もう犯人さえも見えない。

何か掴みかけていた。何か掴みかけた気がしたのだ。だが、それも、まるで霧のように消えてしまった。

なぜだ……。

トリックもわからない

アリバイなんて持ったの他

動機？ 誰が犯人かを推理すらできないのに……

これは、一体なんだ？

死者は喋らない。

まるで、目の前の狩煉が、全てを知っているみたいだ。それを隠してしまった・・・というより、隠されてしまった。

いや、もし狩煉が生きているのなら、隠したまま・・・。

なぜわからない？なぜ・・・出てこない？

こんなに事件が起きているのに・・・。

なぜ！？

何も・・・見えない！

何も！

何も！！

何も!!!!!!

「……………ねえ。」

炎宿魔が、ふと、あることに気がつく。

「何よ？」

「…………この死体……………なんか、おかしくない？」

おかしくない？と聞かれたら、おかしいところだらけだから。どこを「おかしい」と行っているのが、いまいちわからない5人。

「何が……………おかしいんだ？」

炎宿魔は、ある部分を指差す。
背中だ。

「ここ……………丸く……………何か穴が開いているでしょ？ほら……………」

狩煉の死体の背中部分を、炎宿魔が指を指す。美由紀は、先ほどとはうって変わった炎宿魔の様子に、少し驚く。

「お、ほんとだな。これは……弾痕か？」

弾痕……つまり……この死体は……

「銃で撃たれた……ということか！？」

正和が何かをわかったかのように声を荒げる。炎宿魔が、コクンと頷く。

「うん、おかしいでしょ？なんで撃たれているのかな……って。それを聞いて、6人は、当然の結論にたどり着く。というより、すでに疑惑があつて、さらにそれに裏づけが取れたような気分だ。

「この死体は……狩煉じゃない……ってこと？」

揺決理が、狩煉の死体を見上げる。

どう見ても、狩煉にしか見えない気がするが、それは、少し凝った服装のせいだろう。狩煉は、今時の若者らしい、服装をしている。着こなすのは得意だったみたいで、汚く感じず、爽やかな印象を受ける、服装だ。この死体は、その服装を着ているみたいだが、それはもしかして……、

「狩煉が着せた・・・この別の誰かに!？」

最初から、もしかしたらとは思っていた。だが、ここまで確信的になると、誰もがそう思うようになってくる。

いや、誰もがというのは間違いだろう。

約一人。そう思わない人がいるのだから。

「ね？おかしいでしょ？」

「ああ・・・確かに、」

「なんでこの死体は・・・後ろから撃たれているのかな？」

炎宿魔が、正和の言葉を遮る。正和は、一瞬啞然とするが、すぐに、炎宿魔が何を言っているのが理解できたみたいだ。

「これ狩煉以外の誰かだとする。でも、その狩煉以外の誰かは、普通、狩煉のことをじっと見てるよね？なんで後ろを取られるの？おかしいでしょ。ここ以外に、どこにも弾痕はないし。」

でも、この死体が狩煉、なら説明がつくと思わない？つまり・・・」

相手も銃を持っている。

「ということ。」

炎宿魔は、ね？簡単でしょ？と笑みを浮かべながら話している。だが、それは決して、ふざけているわけではない。狩煉と同じだ。自分も「誰か」を守りたい、そう思う気持ちだが、必然的に、そういう推理に至らせたみたいだった。

「おい、それは飛躍しすぎてないか？相手が銃を持っているかもしれないのは分かる。けどな、背中撃たれてるだけで狩煉と決め付けるなよ。」

正和が、そう反論する。

「でもさ、正ちゃん。犯人ともみ合いになんかなるかな？銃持つてる相手にもみ合いなんか意味ないと思うよ？そりゃ、背後から行けばいいかもしれないけどさ、狩煉は多分あの壁際で殺されたんだと思うよ？」

炎宿魔は書斎のちょうど暗くなった角を指差す。そこには、気がつかなかったが、壁に血痕が飛び散っている。誰かに撃たれたように・

・・・。

「犯人が背後取られるわけないでしょ？普通に考えて・・・ね。」

「狩煉は銃を持っていたんでしょ？だったら、迂闊には近づけないだから・・・」

「ちよつと待つて。」

揺決理が、壁に手をつけながら、炎宿魔の言葉を遮る。何か言いたいことがあるみたいだ。炎宿魔は、不機嫌な顔をするも、「何？お姉ちゃん。」と言って揺決理に話を促す。

「炎宿魔の話で気づいたんだけど、さっきさ、私達が来たときに、銃声がしたわよね？何発も。あれは・・・どうなったのかしら？どこにも銃弾の後がないわよ？」

「え？・・・そんなのどうでもいいでしょ。今は・・・」

「いいえ、よくないわ。銃弾なんて、BB弾じゃあるまいし、弾痕なしで撃てるわけじゃない。でしょ？狩煉の死体には、背中の中1つしかないでわよ。これ・・・どういう意味かしら？」

揺決理は、髪を弄くりながら、なるべく狩煉の死体を見ないように気をつけながら、話している。

「・・・。。え、と・・・つまり、揺決理は何が言いたいんだ？」

「・・・。。別に。ただ、おかしいでしょ？ってことよ。あんなに銃声がしたのに、部屋には弾痕がひとつもないって・・・。それだからよ。」

そう言いながら、揺決理は、辺りを見渡すも、やはり何も手がかりはなかった。

「炎宿魔ちゃん、ちょいといいかい？」

今度は盛多が、話に入ってくる。

「何ですか？」「うーんと、炎宿魔ちゃんは、狩煉ちゃんが背後を取られないように、その壁際に行った、っていつてるよね？なら、背後は撃たれないんじゃないか？仮に相手が銃を持っていたとしてもな。」

「そんなことないですよ？ほら、血の飛び散り方を見てください。」壁に付着した血痕は、角の左側、つまり横から撃たれたように飛び散っている。

「犯人は、この窓側、狩煉が角に居て、狩煉から見て左側に潜伏していたんですよ。だから狩煉は気がつかなかった。明かりのボタンは窓から離れた右側にあつたから。そうすると、狩煉は明かりをつけに右側に行きますよね？そして、必然的に角に向かうとしたら、右側ですよ？そこを犯人は狙ったんじゃないですか？」

正和は、またも炎宿魔に対して驚く。炎宿魔が、ここまで冷静に考えて、こういう発言をできることに、驚きを隠せない。いつもの炎宿魔とは、全く違う印象を受ける。

「つまり・・・角に行った狩煉ちゃんを、犯人は、窓際から狩煉ちゃんを、少し前に出たときながら空きになった背中を撃つたってことか？」

盛多がそう言うと、炎宿魔がコクリ、と頷く。

「でもよ？なんで頭狙わないんだよ？見てない瞬間に頭狙えばいいじゃねーか。」

「・・・・・・・・そうね。」

正和が、意見を出すと、こんどは揺決理がそれに反応した。

「確かに・・・炎宿魔の意見を参考にすると、明らかにおかしいわね。なんで背中なんか狙わなければいけないのかしら？普通に頭に1発・・・・・・・・とかでいいのにね。なら、こう考えればいいんじゃないかしら？」

犯人は、頭を狙えばいいものを、背中を撃った。なら、背中を撃つた理由があるんじゃない？」

「は？」

揺決理は、支離滅裂な発言をする。背中を撃つなんて、普通に考えて、不意打ちか、焦っている・・・または相手が素人・・・とかか？しかし、今回ののは犯人は狩煉の位置を知っていて、狩煉は角に行つて・・・それで背中を撃った。あまり遠くもない位置だ。書斎なんて、そんな広いわけでもないから、素人でも撃てるんじゃないか・・・？

そんな、犯人にとっては、絶好の位置のはずなのに、わざわざ背中を撃つ理由・・・？

「あの・・・。」

周りとは、離れた位置にいた美由紀が、手を上げながら、前に出てくる。何か言いたいことがあるみたいだ。

「こんなこと言っても、意味ないと思うんですけど・・・狩煉

さんが殺されたという事実は変わらないですよ？

私達は、どうやってここから生き残れるか？だけを考えなければいけないんじゃないですか？」

美由紀が、そういうと、周りもそれもそうだな・・・と言って、推理ごっこまがいをやめてしまった。

炎宿魔は、それでもまだ何かを考えている。

周りを調べては、あーでもないこーでもない、と何かを口にしている。

立向路が、「早く出よう？ここは空気が悪い・・・。」と言いながら、扉を開ける。

6人は、書斎を出ると、これからどうするか検討するみたいだ。正和は今までの死体を調べたいと提案する。3人も殺されて、このままノコノコしてるわけにもいかない。意外にも、炎宿魔もそれに同意する。だが、揺決理は渋る。セキュリティームに居た方がいいと提案する。まあ、それもそうだろう。3人は「セキュリティームを出てしまった」ことで殺されてしまったのだ。つまり、あそこ

から出ない限り殺されない。推測だが。

「みんなで行動するか？それとも・・・3人と3人で行動するか？どっちがいい？」

正和がそう持ちかけると、皆黙りこくってしまつ。どちらがいいのか・・・？

「推理ごつこなんかしてる場合じゃありませんよ！」

美由紀は、先ほどから、セキュリティルームに戻ろうと提案する。

「ん？いいじゃねえか。皆で行動すれば相手も何もできねーよ。だろ？」

「で、でも！相手は銃を持っているかもしれないんですよ！6人なんてすぐに殺されちゃいますよ！もしかして・・・え？」

それ・・・なんですか？

美由紀は、正和のちょうど頭に上っていく赤い点のようなものを指さす。正和は、全く気がついていない。

「あん？んだよ？・・・っ！」

バイ。レターフロムメルディオール・・・。

ピシュ！と小さな音がする。

その瞬間。

書斎のすぐ隣に飾ってあった絵に穴が開き、少量の煙が立つ。誰でもわかる。これを見れば……

「な！？銃！？」

そう、銃で狙撃されたのだ。レーザーポインタがついたもののように。音が鳴らないように、サイレンサーも取り付けられている……。正和は、間一髪頭を横にずらして、なんとか頭に鉛だまを埋めずにするんだ。

「走れ！！！！」

盛多が、咄然となつて立ちすくんでいる5人を正気に戻すと、そのまま書斎のほうの廊下に走る。そうすれば、犯人が撃ってきた方向からは、曲がり角があるため、直線状に撃たれることはない。暗がりの向こうだったため、相手の存在が把握できないため、これが一番ベストだと思った。ただ、そちらに向かうと、1つ厄介なことがある。それは、セキュリテイルームに向かうことができないのだ。6人が向かおうとしているのは、部屋が並んでいた方で、セキュリテイルームに向かうことができない。現に、正和と狩煉も、わざわざ書斎の前を通って、この通路を通ってやっと盛多たちの部屋にたどり着いたのだから。

「早くしろ！」

正和が、一番後ろに行き、一旦後ろを確認する……。

「……」

追ってきてる！足音！！それも走っ
てきている！！つまり……
あいつは俺らを皆殺しにするつもり
なのか！？どうしてだっ！？

くそ！くそ！くそ！

やっぱりいたのか！いたのか！いたのか！

10人目・・・・・・・・ちくしょう！

俺は心のどこかで、10人目などいない・・・と決め付けていた・・・。
誰かが怪しげなトリックとかを使っているんだと思い込んでいたんだ！しかし、ここまで目の当たりにしちまえば、いるとは思えない・・・。

嘘だろ・・・・。犯人は・・・・こいつ・・・・なのか？そんな・・・。
あいつは一体誰なんだよ！天貝家の誰かか！？最初から忍び込んでいたのかっ！？

パシユン！

正和の肩を、容赦なく抉る！どうやら撃たれたみたいだ。ちくしゅ！

「しゃーない！その部屋に飛び込め！」

正和は、肩を撃たれたにも関わらず、先ほどと変わらないように走っている。だが、粒のような汗が額に溜まっている。やはり痛みはあるようだ。
それも相当な。

正和が指定したその部屋は………信他の………部屋。

全員決る。

ここまで来て、またここに戻るのか……と。

だが、そんなこと言ったら、確実に殺される。

6人は鍵をかけていなかったその部屋に、そのまま飛び込むように入り込む。

そして、鍵をかける。

椅子を持ってきて、ドアの前に立てかける。

ドア越しに撃たれることを考慮して、なるべくドアから離れると、ベッドの方に6人集まる。

「殺される……このままじゃ確実に！殺される！」

立向路は、頭を抱え込んで、ベッドのシートに蹲る。^{うつむくま}盛多が、ドアの近くに立つ。万が一のために、信他の部屋にあった折りたたみ式の小型ナイフを構えながら、聞き耳をたてるようにドアに耳を当てる。

どうやらもう追って来てはいないみたいだ。

足音もしない。盛多は少し安どの表情を浮かべながら、ベッドの方に戻っていく。

「大丈夫だ。もういないみたいだ。」

5人は、それを聞いて、溜め息をつきながら、表情を和らげる。

「なるべく近づかないでよ？あそこには・・・」

揺決理が、指を刺した方向は、見なくてもわかった。信他の死体が置かれているところだ。警察が調査するときのために・・・という理由のために、そのままにしておいたのだ。もちろん、顔にもハンカチの一枚もかかっていない。炎宿魔は、俯いたまま何かを考えているみたいだ。そんな炎宿魔を見て、揺決理は少し怪訝顔をするが、すぐに表情を和らげ、窓に顔を向けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。わからない。」

正和が、まるで今にも泣き出しそうな声を出しながら、そう言った。
「何が？」

揺決理が聞くと、正和が顔を上げる。

「わからないんだ・・・。一体今、何が起きているんだ！？この屋敷には何人の人がいるんだよ！？10人目はいた！けど、11人、12人いるかもしれない！いや、そんなことよりあいつは何がしたかったんだ！？皆殺しにしたかったんなら、書斎にいる間に全滅させればよかったじゃねーか！！銃だぞ！銃！！6人なんていとも簡

単に殺せるじゃねーか！」

ばか。

「ああもうおかしなことばっかりだ！何だよ！？何がしたいんだ！相手は！殺したいのか！？生かしたいのか！？俺を狙ったのは確実だ！なんでだ！？あんな遠くから狙う必要がないだろお！近づいて動くな、とか言えばいいだろ！それでそのまま6人の頭をあれで貫けばいいじゃねーか！」

ばかだ。ほんとに。

もういいだろ？

！？

正和は、周りにある本棚やパソコンなどをボロボロにしていく。手が血で染まっても、それをやめることはない。ただただ、機材を壊し続けた。

「あ……。」

正和が、本棚の一番上の段の本を破いたときに、何かが飛び出してくる。
紙……？

いや、写真。

それは写真だ。

「あ．．．．．あああ．．．。」

揺決理は、それを拾い上げると、ポケットにぐしゃぐしゃに丸め込む。

そして、揺決理は汗をうかべながらぶつぶつと呟いていた。

・ 美由紀が、大丈夫ですか？．．．と声をかけようとしたとき．．．

揺決理が、

「死ね・・・死ね・・・クロス・・・ころして・・・やる・・・
う・・・ううう。」

涙を流しながらそう呟いていることに気がついた。

T o b e c o n t i n u e d

同日 天貝家 本家 屋敷

信他の部屋

午後10時43分

ぐったりとうなだれてしまう6人。朝から溜め込んでいた疲れが、今ここで来たようだ。緊張が張り詰めたまま籠城したり、死体を発見したり、犯人扱いされたり、真犯人らしき人物に追い回されたりしたのだ。疲れが溜まって当然だろう。それに、今も、いつ襲われるか分からない状態で、よりもよって「ここ」に留まっているのだ。6人とも、体力的には限界が来ているだろう。

だが、眠ることなどできない。

眠れるはずがない。

いつ、誰に、襲われるかも分からない状態だからこそ。

もしかしたら、自分だけ眠ってしまつて脱出に遅れるのではないか・
・?もしかしたら・・・周りの中に犯人の共犯者が居て・
殺されるかもしれない。そう考えると、疲れなどを無視して、眠るのを我慢しなければならない。理屈ではわかつていても、眠気には勝てそうにない。疲れはただ起きているだけでも増していき、今にも眠ってしまいそうだ。

「・・・・・・・・。」

誰も何も口にしない。

暴風雨の乱雑な音が、部屋中に響き渡っているが、それ以外は何の音もしない。

不気味な空気を醸しだしている。

その空気に耐え切れなくなったのか、正和は急に立ち上がる。立ち上がった正和を、正和以外の全員が、見上げる。

「ど、どうした？」盛多がそう聞くと、「何もすることねーからな・
・部屋ん中に何かないか調べてみるよ。」と、答えて辺りをウロウロし始めた。

それを聞いた5人は、なんだ・・・、とばかりに顔を落としてしまふ。

「・・・・・・・・。」

信他・・・。昔はよく一緒に話したもんだ。俺が炎宿魔と知り合つてこの屋敷に来るようになってからは、よくこの部屋で話をしていたもんだな。けど、何ヶ月か前から急に部屋に入れてくれなくなつた。話をあまりしなかったな。一体何があつたんだ？信他の身に・
・。何か大事件の陰謀でも掴んだとか？ははは、まさか。

「・・・・・・・・？」

何だ？・・・・・・・・これは・・・・・・・・。

正和は、小さなブローチを見つけた。蝶の形をしているみたいだ。月光蝶とは、すこし違うみたいで、色も形も全く違っていた。

「・・・・・・・・信他のか？」

いかにも女の子が持っていそうな、紫に光を帯びていて、光り輝い

ているブローチ。だが、どこにでも売ってそんな安物だ。この屋敷にはお世辞にも合う代物ではない。これが信他のもなのだろうか。・・・？

「・・・そういえば。」

今思い出したんだが、そういえば、狩煉が俺を犯人にしたとき、狩煉は炎宿魔を庇うときに、「返り血もついたかもしれないし・・・」とかなんとか言っていたが、よくよく考えると、俺が部屋に飛び込んだときに、あいつ・・・服も足も血まみれだったな。いや・・・クローゼットから死体が落ちてきて、それが炎宿魔を血まみれにしたんだ・・・とか軽く考えていた・・・けど、もし狩煉の推理がそのままだったら、そこでこの矛盾が出てきたら、信他を殺したのは・・・いや、まさかな。炎宿魔が殺しなんてするわけない。それに、いっちゃ悪いが、8人全員容疑者なんだよな。だってよ、狩煉の推理は、俺がマスターキーを持っていたから、その隙に殺せた、っていう推理だろ？けどよ、よくよく考えてみると、「あの部屋に信他がいるということは、信他自身が鍵を開けた」という説も成り立つよな。確かにあいつは全く部屋を開ける気はなかった。だが、なんらかの気まぐれで部屋を開ける事だってあるよな？もしそうだったら、狩煉の推理は根底から覆る。ってか、あいつそんな大それた推理はしていないな。単に焦って急いで犯人を誰かに絞りたいってだけだな。多分だけど。あ、そういえば普通に考えてマスターキーを持っていたのって炎宿魔と揺決理だよな？なら、一番疑わしいのは炎宿魔と揺決理なんじゃないか？いや、それでも、あいつらがなんで今日に限って犯行を行わなければいけないんだ？ずっと家に居たんならその隙にでもやればいいものを。今日、盛多と俺と美由紀がここに来るからなのか？

それで容疑者を増やすために・・・。なんだそれ？第一、今日はたまたまこんな大嵐になってくれたからよかったものの、もし普通に晴れてたら警察の事情聴取やなんやらで、色々疑われるだろ？自

分の家で殺しなんかしたら。それなら、まだ遠くの山中になんか捨ててきた方がよっぽどいいじゃねえか。……。何か、したかったのか？もしかして、この「殺すこと事体」に何か特別な意味があるのか？それともこれは天貝家の何かで……。

ダメだ！動機なんかさっぱりわからん！いや、その前に、この屋敷には「10人目」が存在していることは確かだ。さっき襲われたのは確実に10人目がいるってことだ。つまり、このままでは確実に皆殺しにされる。相手は銃を所持しているんだぞ！絶対に立ち向かうなんて不可能に決まっている。だから、ここでこんな風に推理したって意味ないよな……。あいつが犯人なんだ。あいつが殺したんだ。3人を……。

ただ、またもここでおかしい矛盾が起きる。

あいつが殺したなら、なぜ一番有効な「凶器」を使わなかったのか？普通だったなら、銃を使えば楽勝のはずだ。なのになぜだ……。？それに、犯人は今までどこにいたんだ？台風が来たのは確か、夕方らへんだ。つまり、その前にはこの屋敷に居たってことだよな。どういうことなんだ……。？……。？……。

……。

……。

……。

何だ・・・何か・・・。

何かが引っ掛かる。俺の頭の中で何かが引っ掛かっている。

気持ち悪い。なんだこの感情は。

これは本当に、あの10人目の犯行なんだろうか？この事件の中に、何が潜んでいるんだ・・・？何かがおかしいんだ。そう・・・何かが。

おかしいって言えば、普通ならこんな事件自体おかしいに決まっている。だが、何かがおかしい。事件事体がおかしいんじゃない、事件の中に潜むものがおかしい。

って、俺は何を言っているんだ。

この事件。表面上だけじゃ何も見えない。絶対に。

ただ、俺には何もすることが出来ない。なら、一体どうすればいいんだ？

このいばらの森から、脱出できるのだろうか・・・？

「死ななければ・・・。」
そうだ。

死ななければいいんだ。

犯人が優勢なのは、何が起きてもこの「屋敷が覆い隠してくれている」からだ。

つまり、俺達は生き残ればいいんだ。

警察やら、なんやらで、色々調査してくれる。

そつだ・・・そつだ。

相手が優勢なら、まずはその優勢な状態をひっくり返す必要があるな。

それなら、こっちから何かをするべきではない。

こっちからではなく、相手が何かしてきたら、それを身を翻すようにかわしていけばいいんだ。

日の影に居るからこそ見ることが出来ない。

「まずは日向に引つ張っていかなきゃな。」

・・・。

「ねえ、正ちゃん。」

「あん？何だよ？」

やっぱり駄目だ。何かしていないと心が落ち着かない。ならせめて、今自分に出来ることを……。

そう、どうせ暇つぶしなんだから。

推理なんて、所詮暇つぶし……。

「確か、正ちゃんは盛多さんと知り合ったのは、部活のOBでよく部活に顔を出していた盛多さんと気があった、って言ってたよね？」
「え？」

正和が、なんで今そんなことを……？という顔をする。まあ、無理もないか。

「そうだな。話があったからだよ。それがなんだ？」

「何の話であつたの？」

「……。関係……。ないか。」

「あれだよ、昔テレビで騒いだやつ。……。名前忘れちゃった……。」

昔テレビで……。？何だろ？

「あ、それって……。」

確か……。てそんな話題で盛り上がったの！？

「ああ。当時は結構話題になつてな、俺も色々と考えてたんだ。推理小説みたいでおもしろかったしな。それで盛多も……。」

「その話はするな。」

正和が、盛多に同意を求めようと目を向けるも、盛多は見向きもせず、ただ目をつぶったまま、その口にした。不愉快を露骨に露にしているみたいだった。

「ん？ ああ・・・悪い。」

そう言われると、正ちゃんはばつが悪そうな顔をした後に、髪を掻きながら口を尖らせる。よっぽど話をしたくないのかな？ 盛多さん。・・・。

昔に盛り上がった、小説になぞった殺人事件。あれはかなり話題になったけ・・・。

ある推理小説家が書いた作品がそのまま現実世界でも起こったのだ。1、2年前に起こったものだ。当時は本当に騒がれて、マスコミ、警察、各関係者は色々調べ尽くしたが結局犯人を捕まえることができていない、未解決事件のうちのひとつだ。

なんでも、あるアパートの密室殺人・・・だっけ？ それで、その人の動機、アリバイ、そして死んだときの状況も、小説で殺された被害者とはほとんど一緒だったのだ。その作者が犯人なんじゃないか？ なんて噂もたったが、結局はすぐに消えたっけ・・・アリバイだらけで。

なるほど。あの事件で2人は知り合ったのかあ・・・。

関係ない・・・か。

元々、もう推理なんかする必要がない。皆そう思っている。

約一人、そう思っていない人もいるみたいだけど・・・。そう心で呟きながら、横目で正和を見ると、立向路の愛用にしていた分厚い本を、流し目で見始めた。

「私ね？」

隣で俯いていた美由紀に、揺決理はそつと、声をかける。それは、声をかけるといふものなのかも分からないくらい、か細い声で。まるで、独り言のようだった。

「小さい頃、メルディオールって名乗った人に会ったのよ。今思うと、馬鹿馬鹿しいと思うんだけどね、あの時は本当に悪魔に会ったんだって信じていてね、よく親族の皆に自慢とかしてたのよ。」

「・・・そう・・・なんですか?」「ええ。裏の庭園でね。とても綺麗なドレスを着ていたような気がするわ。うる覚えだからよく覚えていないのだけれど。おじい様がとても会いたがっていたわ。やつぱり、本当だったのかしらね。昔失ったっていう話は・・・。おじい様がメルディオールのことを・・・か。なんか馬鹿馬鹿しい、ごめんなさい、忘れて。」

美由紀は、首を左右に振ると、「もつと話してください。」と揺決理の言葉を促す。ありがとう、と言うと揺決理は少し神妙そうな顔をした。「おじい様はいつも一人で居たわ。元々本家の人間は、分家に嫌われるから。本家のトップなんてひどいものよ。本家の人間にも疎まれるし、分家の人間には人扱いもしないくらい蔑まれていたわ。もつとも、本家には迂闊には手を出せなかったから分家は指を咥えて見ているしかなかったみたいだけれども。その中で、おじい様は許婚であつたおばあ様のは、とても心を許していたと聞くわ。おばあ様は、天貝家の外の人間だから、金目的で天貝家に嫁いでいたんだ、周りの人からずいぶん言われ続けた。それを、必死におじい様は守っていたみたい。必死に、おじい様はおばあ様を庇ってきた。おばあ様は、涙ながらにこう言っていたんだって。私に構わないでください、あなたが蔑まれる必要はこれ以上ないのですから、と。そんな風に日々が過ぎていつて、おばあ様は41歳という若さでこの世を去った。私が生まれる前には、もう死んでいたわ。おばあ様が死んでから、おじい様は変わった、って本家の親ならかならず口にしていたわね。その日から、おじい様は人が変わったように周りに厳しくなつていつたって聞いたわ。おばあ様が死

んでから・・・ね。」

「なんか変な昔話ばかりしているわね、ごめんなさい。メルディオールの話はここから。おばあ様が亡くなって、その数カ月後に噂が流れるようになったのよ。おじい様は愛人がいるんじゃないか？というね。もちろんそんな証拠はどこにもなかったわ。でも、たびたび屋敷の中に見たこともない女性が居たんですって。おばあ様が亡くなって、愛人と屋敷で逢引しているんだと、誰もが思いながら口にできなかったのよ。それで・・・何年かしら。10年か20年か・・・私は生まれてなかったからわからないけど、おじい様がメルディオールという名を口に出したんですって。メルディオールを敬え、そして讃えろ、と。でもね、誰もがそんなこと言われたって、するわけにでしょうか？案の定、おじい様の前だけメルディオール「様」と言っていたわ。家の親も馬鹿馬鹿しい、って言っていたわ。そう、このときは誰もが馬鹿馬鹿しい・・・と。」この・・・とき、ですか・・・？」揺決理は、その長い髪を耳にかけると、少しだけため息をつく。話すのが嫌なわけではないようだが、美由紀は「大丈夫ですか？」と声をかける。「ええ、大丈夫。ただの暇つぶしよ。ここに何時間いるかもわからないから・・・暇つぶし。だから話させて。」そう言くと、顔を少し上げてキリ、とした顔をする。

「殺されたのよ、私の親が。足首、手足を切り刻まれて・・・というより切り落とされて。」「え・・・。」美由紀は息を呑む。はっ、と息ができなくなるような感覚をはじめて経験する。小説でもアニメでもゲームでもない、現実で殺された、なんて話、何度聞くのだろう・・・それも切り落とされてなんて。いや、現にもう3人も殺されているわけだが・・・この屋敷で。それを思うと、何か言い知れない感覚に陥る。自分の思考が狂いだしているのに気づくに

は、少し時間がいるみたいだった。もつとも、気づいたところでどうすることもできないわけだが。「腕と足を切り落とされて・・・ずいぶん酷いことになってて、見ることもできなかったわ、私にはそれで、家に手紙が置いてあったのよ。その中には、「信じない馬鹿は馬鹿を見る。」と最初に書かれていて、つらつらと何かが書かれていたわ。もう覚えてないけど・・・読みたくもなかった。メルディオールからの手紙なんて。本当に・・・本当に。」

そっぴいながら、揺決理は目頭が熱くなるのを感じて、いそいそと目を掻くように涙を拭く。

「その手紙・・・どうしたんですか？」美由紀は、何を言っているのかわからなく、そのようなことを聞くが、端から見たら古傷を抉っているようにしか見えなかった。揺決理は達観したような顔をして、話を続ける。「警察には見せなかった。くやしくて・・・くやしくて。私がずっと隠し持っていたわ。破り捨ててやるわ・・・とか思ったんだけど、やめたわ。なんでだろうね、私自身にも分からないわ。」鼻水を啜る音には、周りは揺決理を一瞥する。こんなときなのだから仕方ないか、と思い特に気にも留める様子はなかった。「それでね、皆恐れるようになったの。メルディオール・・・のこと。もちろんこれだけじゃ誰も「様」なんて呼ばなかったけど・・・。それからね、立って続けに天貝家の人達が殺されていったの。炎宿魔の親2人も、確か殺されたわ。私の父親も・・・。全部で4人。それで、誰もが死にたくないから、どんなときでも「様」をつけるようになったみたい。どこかでおじい様のスパイが監視していて、メルディオールを悪く言う奴がいたら容赦なく殺す・・・だから下手なこととは言わない方がいいって他の親族に言われたんだけど、ただの噂よ、噂。どこかのスパイだとか、そんな馬鹿馬鹿しい話、誰が信じるかっての。私は・・・正直、迷っているわ。何が本当なのかって。皆、恐れているの、メルディオールという「存在」に対して。別にメルディオールという人間、または魔女が居るかではなくて「存在」が周りを怖がらせているの。誰もメルディオールがいる

なんて信じてはいない。けど、そのメルディオールという「もの」自体が諸悪の根源を作り出している……。私は、このメルディオールというものが、天貝家の奥の奥に、潜んでいる気がする。潜んでいる……。というより、周りがいないとわかっていてもそれを怖がって……。という感じかもしれないわね。」「……。」「美由紀は、黙ってその話を、コクコクと、頷きながら聞いている。ふと、美由紀が口を開く。「天貝家……。連続虐殺事件……。」「それを聞いて、揺決理は少し驚いたように反応するも、すぐに澄ました顔に戻り、「ええ、そうよ。」と言った。「そう呼ばれていましたね。よく知っています。」「よく……。つて、あなた……。ああ、そうね。あなたたしか、色々調べていたものね。そっか、だから信他部屋から出てこなかった……。のかも。聞いてもいいかしら？」揺決理が、美由紀の目をしっかりと見ながら、キリツとした表情をする。ふざけや、茶化す様子など、微塵もないほどにだ。美由紀は、ここでダジャレとか言ったら、殺されちゃうかな？とか不謹慎なことを思い、苦笑する。

「あなたは、数ヶ月前からあの事件について調べ始めたわよね？もつとも、本当はもつと昔から調べていたのかもしれないのだけれど。あなたは、信他にも質問したようね。色々。信他はね、メルディオールにすごく心酔していたから、あなた達のことを、すごく邪険にしていたわ。……。私が言いたいのはね、今日のこの事件、あなた達が原因のひとつに噛んでいるんじゃないかな……。と思っているのよ。別にあなた達が犯人なんて思っただんかないわ。でも、何か原因があるんじゃないかな……。と。こんなときなんだから、教えて？あなたは一体……。なぜ私達のことを調べているのかしら？そして……。あなたが掴んでいること、教えて？私は、天貝家のこと、全然知らないの……。教えてもらえなかったから。」「……。美由紀は少し困惑しているみたいだった。目が少し泳いでいるのが、揺決理にもわかった。美由紀は、少し考えるような仕草をすると、ハッと何かを思いついたように頭を上げる。そして、正

和を一瞥すると、一言こう答える。「……知りたいんです・
。」涙を浮かべながら、そう答えると、揺決理は何かを察したように美由紀を抱きしめる。大人びた女性が持つ不思議な感覚を、美由紀は感じ取る。それは、香水のようなきつい匂いではなく、とても美しく、優しい温もりのある香しいものだった。「えっへへへ、私、何やってるんだろう……。ごめんなさい……。うう……。う。」
大丈夫よ……。大丈夫……。」

「天貝家のことを調べていたのは、さつきも話していたように、本当のことを知りたいからですよ。私は……。正和さんと一緒の小さな雑誌社に勤めていることは……。知っていますよね？」揺決理は何も言わずにコクリと頷く。「私は……。その……。小さい頃に、両親を失って……。それ以来、姉と2人で暮らしていたんです。両親が死んでしまったことは……。そのときに泣いて泣いて泣きまわって……。わんわんと泣き腫らして……。てっきり忘れたのだと思っていました。でも……。私、たまたま炎宿魔さんが公園のベンチに座り込んでいるのを見たんです。私……。ずっと見ていて……。そして……。座り込んで泣いてしまったんです。炎宿魔さんのことは……。よく知っていたんです。天貝家……。よく取沙汰されていたから。そのときに、自分の両親のことを思い出して……。いつの間にか、私まで涙を流していました。そして、私は炎宿魔さんに……。大丈夫だから、と言いました。彼女は何言ってるか分っていませんでしたけど。それで……。私は、天貝家の人間ではないです。でも、あのときの炎宿魔さんが、とても印象的で……。ただの同情かもしれない。ただの同情……。けど、親を失う苦しみは、理解しています。炎宿魔さんの気持ちは、痛いほど分かりました。私は、天貝家では、色々な方が親を失ったということを知り、ちょうど私は小さいけれど、雑誌の記者だった私は、自分からこの事件を調べるようになりました。それで、正和さんも手伝ってくれ

ました。私は・・・本当に真実が知りたいんです。ただ・・・それだけ。」「・・・・・・・・。」揺決理は絶句する。他人のため・・・というの語弊があるのだと思うが、そこまで強い意志で調べていたなんて、思ってもいなかった。とにかく売り上げを上げるために書いているわけではない。両親を失った悲しみを味わった者にしか分らないこの思い。揺決理は、今まで美由紀のことに、少なからず嫌悪感を持ったことはあった。だが、そんな揺らいでいる思いは、今、完全に消え去る。

「・・・・・・・・。ごめんなさい。私、あなたのこと色々と誤解していたみたいね。天貝家のためにそこまでしていたなんて思いもしなかった。ごめんなさい・・・・・・・・。」美由紀は、首を振りながら、優しく微笑み返す。「いいんです・・・・・・・・いつだって、記者はそう思われるのが当然ですから。誰だって、過去のトラウマを掘り返そうとしてくる人に、良い感情を持つ人なんていませんから。私は、それを理解して、尚も知りたいんです。そして、全てがわかったとき・・・・炎宿魔さん、そして揺決理さんに全てを話したいと思っています。それが、どんなに残酷なことでも・・・・もちろん残酷なことでも、本当はいろいろなことがあっても、記事に書くつもりはありません。どうせ周りだって面白半分で記事を読んでいるのですから。ですが、私は魔女の呪いなんて記事に書きませんよ。ちゃんと、科学的な根拠を提示して、人間の仕業だと言っことを見せたいと思います。」「揺決理は、またも涙を流しながら美由紀を抱きしめる。」「ありがとう・・・・・・・・。」と、擦れる声で言う。美由紀はそれに、コクンと頷く。

「私は・・・・・・・・絶対に生き延びる。そして、ちゃんと伝えないと。この、ただの人間が起こした殺人劇を。悪魔や魔女の仕業になんか、させない。」

私が、させない。」

先ほどまで、静寂に包まれていたこの部屋に、少しだが温かみが戻ってきた。

皆が少しは生きる気力を取り戻してきたみたいだ。

正和、炎宿魔は尚もいろいろなことを思案している。

盛多、立向路は気力は失ってはならず、何をすればいいかを必死に考えているみたいだ。

美由紀、揺決理は2人で話し合い、気力を取り戻す。

とにかく、逃げ切るんだ。

この部屋が安全圏なのか・・・？それとも犯人は何らかの事情があって、俺達を生かしているのか・・・？わからない。わからないが・・・

生き延びる。

絶対に。

小型テレビのニュースをつける。天気予報では、無愛想な中年のキヤスターが、棒読みで天気の様子を伝えている。明日に雨は続くみたいだが、小雨にはなるようだ。明日になれば、なんて考えているようだ、犯人がこの屋敷に居座るなら、それも無意味だ。けど、外の人間も異変に気づく。

ああ・・・もう！いちいちどうでもいいこと考えていたって仕方がない！とにかく！相手が来たら、立ち向かうんじゃない！逃げるんだ！

「なあ、みんな。」

正和は、あぐら座りをやめて、急に立ち上がる。5人が、正和に注目する。

「3人を殺した・・・かどつかはわからないが、とにかくあの銃を持った犯人と鉢合わせになっても、立ち向かうなんてことは絶対にするなよ？とにかく逃げるんだ？わかったな。」

それを聞いた「4人」は、深く考えずにコクリと頷く。だが、立向路だけはその深い意味を理解する。

「要するに・・・・・・・・」

誰かがこの部屋を出て何かするんだろ？それで鉢合わせになっても逃げる・・・と言ってるんだね？」

4人はそれに気づいて、驚いたように正和を凝視する。
正和は、ニヤリという笑みを浮かべる。

「ああ、そうだ。」

「裏庭園の森の方で、確か電波がギリギリ届くんだよな？なら、そこから電話をかける。もちろん俺だけでも構わない。」

一か八かの賭けだ。

生き延びるための・・・な。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

Part 13 Each fight, the beacon of t

- ・ たのしいとすぐに書けるけど、pt12みたいな話だとダレるな・

「・・・・・・・・。」

雨・・・・・・・・。

「・・・・・・・・。」

雨。

「・・・・・・・・。」

雨は、一向に止む気配がない。天気予報では、全く逆のことを言っていたのを思い出し、私は少し苛立ちを覚えたが、すぐに消えた。

そんなどうでもいいこと、覚える必要もない。
そんな苛立ちなんて、今は気にもならない。

あ、そういえば、あの日も雨が降っていたような気がする。そうだ・
・確かに降っていた。あの日も、たくさんもの雨が、無慈悲にも
私に降り注いでいた。

私の心が、そのまま天の意向を受けているものなんじゃないか、と
思っ た っ け・・・・。

馬鹿だな・・・・私。

「・・・・・・・・。」

止まないな・・・・雨。

いつの間にか、公園のベンチに横になっていた私は、最早濡れてい
ないところがないぐらいにびしょびしょだ。

服装は、シャツにジーパン。

使い古していたものなので、ものすごい勢いで水を吸い込んでしま
っている。

これじゃ、びしょびしょなわけだ・・・あはは。
「・・・・・・・・。」

なんで、私、こんなところにいるんだろう・・・。なんで・・・私・
・・・あんなところにいたんだろう。
元々駄目なことは知っていた。
体が弱いと自分で言っていたし。

・・・ポタ。

今のは、なんだろう？

雨・・・じゃない。そうか・・・

私の、涙だ。

私、いつのまに泣いていたんだろう？
それすらも分からなかった。

何で泣いているんだろう？あ、それだけは分かった。
そうか、私、お母さんとお父さんが好きだったんだ。

あの時、流す涙はもうない、なんて思っていたけど、そんなの、自
分への言い訳だったのか。
そうか・・・。

そっか……。

そっか。

「あれ……？」

ふと、前を見ると、1人の女の人が、傘もささずにただただ立ち尽くしているのが見えた。こんな小さな公園の滑り台に、ただただ立ち尽くしている。

私と同じで、彼女もずぶ濡れだった。

私は、ベンチから立ち上がると、顔が見える位置まで移動する。そうして、彼女顔を確認する。

「……あ、・天貝・・炎宿魔、さん？」

私は少しやつれてはいたものの、彼女の顔はよくわかっていた。天貝

炎宿魔。

私も少なからずニュースなどを見ている。

天貝家連続虐殺事件……と呼ばれていたっけ。

少しは分かるつもりだ。

天貝家の人間が立て続けに無残に殺されている事件。色々なところのパーツがなかったり……する残虐な事件。

確か、彼女は天貝家の本家の人間だったはず……。

あ、そういえば、両親を殺されているんだっけ。

私と、一緒か。

天貝家連続虐殺事件は、当時規制がかかる前に、天貝炎宿魔は顔を

出していたことがあった。

その写真をテレビで堂々と公開してしまったニュース番組があった。もちろんそのニュース番組は、すぐに打ち切りとなったが、ネット等でその顔写真は流出した。

よって、色々なところでその写真は色々な経路でひどいものとなっていた。

ギャグ動画で、ほとんど別人のように編集してある炎宿魔の写真なども、大量にある。

ネットの中では、皆無慈悲。匿名という正体不明なのを良いことに、いろいろなことを掲示板とかに書き込んだりする人も大勢いる。そのくせ現実世界で何もできない臆病者もネットの中では顔、容姿、人柄とかも自分で作ろうとできるから・・・なのだろう。

ネット弁慶・・・だっけ？よく知らないけど。

そんな人達のせいで、どれほど彼女が傷つけられ続けてきたか、想像することも出来ない。

「・・・・。」

彼女は、ひたすら天に何かを言い続けている。

私は、まだ自分の存在が気づかれていないことがわかったので、そのまま隠れながら近づいていくことにした。

「・・・あ・・・け・・・い・・・い・・・。」

「わたし・・・は、あんな・・・いら・・・い。だか・・・別・・・して・・・い。」

「あはは・・・元々、そんな・・・話さ・・・かった・・・どう・・・も・・・よ!」

「本当に、悲しくなんて・・・ない!馬鹿じゃないの!？」

「たかが、

親が死んだくらいで！！！！」

「！？」

「たかが、あんな親2人がしただけで、なんでこんなに悲しまなくちゃいけないの！？

全然話もしないし、メルディオール様、メルディオール様！！気持ち悪い！！」

「そうだよ！別に死んだから何い！？馬鹿だから死んだんでしょ！！？」

天貝家のくせに甲斐性なしだし、本家のお金を足しにして生きてるあんな親！

死んで当然！

死んで！当たり前！

死ね――――、あんなんだから、あの時たまさ、・・・!?」

ぎゅ、と。私は後ろから彼女を抱きしめる。

これ以上見ていられなかった。

これ以上・・・見てられない。

彼女の気持ち、張り裂けそうになるくらい私に伝わった。

彼女はそんなこと思っていない。

自分の両親のこと、そんな風に思っただけじゃない。

「な、何、あんた。何、気持ち悪い！離れてよ！」

私は、炎宿魔に突き放される。

当然だ。急に見知らぬ女に抱きしめられたなんて、男だったら喜ぶのかもしれないが、女だったら気持ち悪いことこの上ない。

けど、私はそれでも私は炎宿魔に向き合う。

彼女の苦しみが、痛いほど伝わったから。

「大丈夫だよ・・・大丈夫・・・私にはわかるから。あなたが今までどんな思いだったかが。よくわかる。」

炎宿魔は、その言葉を聴いて少し目の光を取り戻すが、すぐに正気を失ったように、目の光がなくなる。

「あなたに・・・何がわかるの!?あたしの何がわかるの!?」

皆そうだった・・・みんな、慈悲深い言葉を投げかけてきて、結局

見捨てる、結局貶す。

そして貶しあう。

本当に、そんなことの繰り返し。

もういや、もういや！馬鹿馬鹿！馬鹿！

あなたに関係もないし！あたしの気持ちもわからない！ほっといてよぉ！」

パチン、と。

雨にすぐかき消されたが、鋭い音がする。

私は・・・彼女の頬を叩いてしまった。

彼女は、驚いた顔をして、頬を抑えながら私を凝視する。

私は、そのまま彼女を抱きしめる。今度は抵抗しなかった。

「わかるよ・・・わかるよ。私もそうだもん。ある日急に、私の両親が死んでしまったの。

何の別れもなしに。私は始めて、親の大切さを知ったの。理解したの。

本当に今更ってぐらいに、わかったの。

私もあなたと同じで、親の悪口を言い続けた。あんな親、死んで当然。あんな頭が悪い親、死ぬのが当たり前。あんな親・・・って。でも、心のそこではこう思っていた。

私が死ねば、よかったって。
あなたもそうかはわからない。でも、私はそう・・・思ったの。
でも、それさえも間違い。

何もかも間違い。

結局全部、両親が死んだ悲しみをどこに溜め込めばいいのかわからなくて、だったらいつそ、「悲しまなければ」「いいんだと考えるようになった。」

「私は・・・あなたのことがわかる。あなたが何でそんなに自暴自棄になっているかも、よくわかる。
だから・・・せめて、これだけは、言わせて。」

「あなたの両親は、きっと幸せだと思っよ？あなたが、生きてくれているんだから・・・。」

「ね。」

炎宿魔は、泣き崩れるようにすがり付く。

私は、彼女を思いつきり抱きしめる。そして、今度こそ、この言葉を言ってみる。

「大丈夫、大丈夫だから。」

「う、うううううう。あたし……あたし……う、うわ
あああああ、う、う……。」

そっか……この子は「私」だ。

昔の私なんだ。

あのときの私は、色々な人に助けてもらって、どうにか私はここま
で来れた。

でも、この子にはそんな人はいない。

なら、今度は私が私自身を守るように、この子を、守ってみせる。

そう。

心に誓った。

「あの……。」

「はい？」

「あなたの……名前は、なんて言っんですか？」

「私？」

「はい、お名前……。」

……。

「美由紀……です。」

櫻田 美由紀。

よろしく願いしますね。

炎宿魔……さん。」

同日 天貝家 本家 屋敷

信他の部屋

11時19分

「つ、つまり……外に出るわけですね？ 誰かが……。」
「あ……そういう事になるな。」
「駄目よ！ あなた正気！？ 相手は銃を持っているのよ！？ 迂闊に外になんか出れるわけないでしょ！？」

正和の提案にすぐにすぐに反対を押し揺決理。それもそつだ。

たとえ外に出れても、殺される可能性が高い。さらに、相手が所持しているのは銃だ。

遠距離に逃げたって、何の意味もないのだから。

「大丈夫だ。俺にいい案があるんだ。もし出来れば・・・結構上手くいくと思うんだ。もちろん、外に出るのは俺だけでいい。どうだ？聞くだけでもいいんじゃないか？」

「・・・。」

少し渋るも、一応5人はうなづく。

「よし、じゃあ聞いてくれ。まず、ここは1階。しかも、かなりの角だ。階段は玄関に1つ。

そして、セキユリティールの横に1つ。それだけだろ？2階に繋がる廊下は。」

「え？ああ、そうだよ。」

炎宿魔がそう答えると、正和はニヤリと笑う。

「よし、なら、聞いてくれ。揺決理、2階に内線電話をかけることは出来るか？」

一同キョトンとする。なぜ電話の話が出てくるのだろ・・・と。

「ええ、出来るわよ。確か、2階には図書室・・・みたいなところがあつて、そこに内線専用電話と、外線電話があるはずだから。」

「よし。そこにかける事はできるか？」少し怪訝顔をする揺決理だが、別に嘘をつく理由はないと思い、素直にコクンとうなづく。

「信他の部屋から出来るわよ。でも・・・なんで？」

「おいおい、気づかないか？いいか、そこに電話をかけて、相手がそつちに興味を持ったら、すかさず気づかれないうちに外に出ればいいんだ。外なら、見えにくいだろ？撃たれることもない。そうだろ？」

全員が啞然となる。

ある者は呆れてもいる。

「あなた馬鹿？それ、相手だってこの扉に目を離さないようにしているに決まっているでしょう？全く……。」

「誰が「扉」から出るなんて言っただ？」

「え……？」

正和は、またもニヤリと笑うと、部屋の隅の方向を指差した。

「窓だよ、窓。窓から出ればいいんだ。」

5人が、ああ、なるほど、と納得したようにうなづく。

「そうか……ドアから出れば、電話の相乗効果もあって、相手も気がつかない……のか？」

立向路が、感心したようなバカにしているのか分からない言い方を
する。

「そうだな、いいじゃないか。電話さえできれば、助けも呼べるし
な。俺は賛成だ。」

盛多は賛成のようだ。

「そうね……反対することがなくなっただわ。でも、正和さん、あ
なたが一番危険なのよ？それ……。」

「ああ、だが、何もしていないよりはましだと思ってな。」

5人は、納得する。

それによって、すぐにも作戦が開始されることになった。

「よし！今から行くぜ・・・揺決理、電話をかけてくれ。」
「ええ・・・わかったわ。いま・・・。」

ぴりりりりりりりりり、ぴりりりりりりりりり。

「え？」

揺決理が受話器を取ろうとしたとたんに、その電話が電子音を奏でる。

いつもとは違う、不協和音のように部屋を響かせているその音に、一同は絶句する。

電話が・・・鳴った？誰が鳴らしたんだ？誰が・・・。

犯人・・・か！？

「おい、早く取れ！」「あ、」

揺決理を押しつけて、正和は受話器を取る。

ア、・・・・・・・・・・く・・・・・・・・

受話器からは、かすれた声のようなものが聞こえる。
ただ、それが声かどうかは、はっきりとはわからない。声だと言え
ばそうだし、違うと言えは違う・・・そんな曖昧な「音」が受話

器から聞こえてきた。

「おい！もしもし！？もしもしっ！？」

がた．．．．がさっ！！

「何の．．音だ？」

．．．．．。ぷっん。っーっー。

やがて、すぐに電話は切れてしまった。

「どうだったんですか？」

美由紀が恐る恐る聞くと、「いや．．。」と正和は首を左右に振る。

「何か音がして、すぐに切れた。無言電話多いな．．今日は。それより、やってくれ。頼む。」

「．．．．え？」

揺決理は、なぜか少し呆然となっていたみたいだ。「おい、どうした？あんな無言電話気にするな、早くしようぜ。」

「え、ええ．．そ、うね。」

少し汗もかいている。何かあったみたいだが、とりあえず深くは考えないでおく。

そうして、正和は窓を開ける。雨は相変わらずやむ気配がなく、むしろ強くなっているようだ。信他のジャンパーを羽織ると、揺決理にアイコンタクトを送る。

揺決理はそれを見て、コクンとうなずいて内線番号、11と押す。

「達者でな。」「え・・・？」

炎宿魔は、正和のその意味を、深く考える。つまり・・・

「正・・・ちゃん？」

最初から死ぬ気・・・だったの？

炎宿魔は、1滴の涙を流しているのに気がつかずにいた。

同日 天貝家 本家 屋敷

屋敷前庭園

11時29分

外は相変わらず暴風雨のままだ。体をしっかりと支えないと、今度こそ倒れてしまう。そう思った。だが、立ち止まっている暇はない。信他の部屋の窓……つまり、玄関よりも、裏庭園に遠のいたのだ。信他の部屋は、屋敷の角に位置しており、裏庭園は、文字通り屋敷の裏にいちしてある。その点に関しては、真正面にある玄関よりは近い印象を受ける。しかし、信他の部屋のすぐ隣には、大きな門のように、壁が連なっていて、飛び越すことは不可能だ。つまり、一旦玄関正面のほうまで移動して、信他の部屋の反対側から裏庭園に向かうことができるのだ。それも、かなり時間がかかる。

「行くしか、ねえな。」

正和は、よろよろとだが、走り出す。もつとも、走る、というほど速くもなく早歩きぐらいの早さだ。それは、無理もないことかもしれない。こんな嵐の中で方位を見失わずに進むことなど、ほとんど不可能だ。しかも、玄関以外に光はないこの庭園の中で、どのように走ればいいのか？

正和は、壁伝いに、必死に前へ進む。体は、どこもかしこもびしょびしょだ。体だって、もう疲れ切ってしまったている。それでも、正和は進むのをやめない。

馬鹿？ほんとに馬鹿？

何やってんの……？

何、ほんとに馬鹿じゃん。

あんな馬鹿共のために命かけるなんて……馬鹿らしい、ほんと馬鹿。

「はあ……はあ……。」

正和は、ようやく玄関の光が見えてきたのがわかった。その光に向かって、必死に走る。
走る、走る。

何で、こんな馬鹿げたことしてるんだろなあ・・・相手銃持ってるのに、相手にちよつとでも見つかったら終わりなのに・・・何やってんだ、俺。

あそこで助け待ってればよかったのになあ・・・へへ。

やべ、疲れてきやがった・・・体が重い・・・。

炎宿魔・・・お前だけは、生き延びて、ほしいなあ・・・いや、全員生きるって決めたのに、情けないよな。俺、死にたくねえ。死にたくねえんだ。

ゲームかアニメの主人公みたく、かつこよく死ぬことに憧れてた。でも、こうして死をまじかに体験しちまって、自分も死ぬかもしれないと思うと、駄目だ、こええよお。へへへへ、こええ、こええ、こええなあ。俺、死にたくねえ。死にたくねえ。死にたくねえ。

「はあ・・・はあ・・・はあ。」

ようやく玄関にたどり着く。といっても、まだ半分にも満たない距離だが、それでも正和にとっては、目的地に着いたような気分だった。後ろポケットから携帯電話を取り出す。もちろん圏外のままだ。

「はあ・・・はあ・・・。」

それを確認して、正和は歩みを止めずに走り続ける。玄関の光はも

うない。あとは壁伝いにまた走り出す。

俺は……俺は……はぁ……はぁ……熱、出てきた
みたいだ。へへへ、変なことは、考えるもんじゃねーな……へ
へへへ……、！？

今……音、したよな？

扉の、開く音……したよな！？

誰だ……誰だ！？この音は！？

ぬっぬっぬっぬっぬ

足音・・・？

「く、くそお！」

しまった、きやがった！くそ！気づいたのか！？

正和は、一瞬後ろを振り向く。

いた。

来た。

かなり遠くにいるが、人が近づいてくる。

あの5人とは、明らかに違う！犯人か！？

「はあ、はあ！」

正和は、先ほどよりも、早く走り出す。とにかく前へ、前へ！

曲がり角を曲がると、正和は気を失いそうになるのを必死に抑えな

がら、そのまま走る。

犯人は、まだ追いかけてくる。ただ、銃は使ってこない。

それもそうだ。こんな暴風雨の中で使ったって、当たる確率なんて僅かだ。それに、2人とも走っている。それだけでも、当たる確率は下がる。

正和は、不安になり、後ろを少しだけ振り向いてしまう。振り向くより、まずは前に進んだ方がいいと、理性ではわかってはいるが、それでも振り向いてしまう！

「あ……！！」ちょうどポケットのある位置から、何かを取り出すようにしている。

正和は、それ以上見ていると確実に殺されることを悟って、必死に逃げる。

裏庭園に、逃げ出す！

がさ！

「！？」

正和がすぐ通った2、3歩前で何かが落ちたような音がする。落ちた？違う、銃だ！

足元が撃たれそうになったのだ。

ちくしょう、結構離れているはずだぞ！？ちくしょう、ちくしょうちくしょう！

俺はくたばらねえぞ！絶対死なねえからな！

同日 天貝家 本家 屋敷

信他の部屋

11時42分

部屋にいるものたちは、ただただ待ち続けている。
何も話さずに、ただただ祈り続けている。そう、

「2人」の安否を。

そのときだった。

う、ぐわあああああああ！！

突然、「盛多」の声が、どこから聞こえてきた。

「せ、盛多さん！盛多さん！！！」「ま、待ちなさい、美由紀さん駄目！美由紀さん！美由紀い！」

美由紀は、部屋から飛び出すと、盛多の声がしたと思われるところに走る。

「盛多さん、死なないでよ！盛多さん。」

部屋に残った3人は、どうすればいいか迷ったが、犯人に出くわしたら出くわしたらだ！そのときはそのときの考えで、3人は部屋を飛び出す。

だが、美由紀がどこへ行ったかがわからない。すぐさまそこへ行くことを思いつく。

「セキュリティルーム！！」

3人は、一目散にセキュリティルームに走る。

こんな広い屋敷を、ただただ探すよりは、監視カメラを使ったほうがいいと踏んで、セキュリティルームへ走る。

だが、ハッと何かに気がついたように、立向路は別の方向に走り出した。

「な！？立向路！どこへ行くの！？」

だが、立向路は何も答えずに、そのまま走っていつてしまった。揺揺揺揺揺、一瞬迷ったが、そのままセキュリティルームに走ることにした。

「お、お姉ちゃん、立向路が！」「わかってる！今はセキュリティルームを目指して！いい！？カメラであの馬鹿2人がどこにいるか確認するから！わかった！？」

揺揺揺揺揺、決して炎宿魔と繋いだ手を離さない。炎宿魔も、ぎゅつと手を繋いでいる。

そして、そのままセキュリティルームに駆け込んだ。

同日 天貝家 本家 屋敷

天貝 炎宿魔、天貝 揺決理、セキュリティルームにたどり着いた
3分前。

11時43分

?????

「盛多さん?・・・盛多さん、居ますか?」

美由紀はそのまま部屋に入ると、近くにあつた証明のスイッチを押した。

「え・・・!?!」

美由紀の視界が、バツと暗くなる。暗くなるというより、黒くなった。

それは、美由紀の前に人が何かを振り下ろそうとしているのが、美由紀にもわかった。

「あ．．．あああ！」

ブン、と、その手に持っているものを振り下ろされる。

その、手に持っているナイフのようなものを．．．美由紀の心臓部に、振り下ろされていく．．．。

カン。

「え？」

何か甲高い音がして、少し胸のほうに痛みが走ったが、刺されたわけではないみたいだ。

すかさず、近くにあった、ガラス製の灰皿を「すぐ近くにあった」相手の頭を殴る。ボコ、という激しい音がして、その後に美由紀は灰皿を相手に投げ込み、相手が少し怯んだものを見逃さずに、そのまま鳩尾みそおちの方をつま先で蹴り飛ばす。

男性の方が、女性よりも力があり、格闘するには男性が一番向いているのは確かだ。しかしそれは、拳を使って戦うからだ。

足は、それほど大差なく力がある。無論、男性の方が強いのは道理だが、足ならその差は多少だ。

つまり、女性だからといって、鳩尾に足が入れば、誰だって痛い。相手も、鳩尾を押さえながら、後ずさる。

それでも気を抜くことなどできない。

美由紀は、そのまま近くにあった小型テレビを、ケーブルを引きち

ぎってそれを左手に持つ。それと、小さな丸机を、そのまま右手に持つ。少しは武器として働くかもしれないものをチョイスする。相手も、いつまでも怯んでいるわけではなく、少し痛そうにはいるが、そのままナイフを構える。覆面に黒服で、相手がどんな人は理解することが出来なかったが、このままでは自分が殺られることだけは理解できた。

ふと、正和が言ったことを思い出す。

いいか、もし犯人に出くわしても、絶対に逃げろよ！相手は銃を持っているんだ立ち向かうなんてことするなよ！

そう、確かに正和さんはそう言っていた。そう、

相手は銃を持っているんだ、ってね。

銃は持ってなんかいない。つまり、

立ち向かっておく、ってことですよ？正和さん！

美由紀は、わけのわからない理由で、あえて扉に向かわずに距離を

少しだけ縮める。
不適な笑みも浮かべている。

怖い？いや、全然。

楽しい？　はあ？殺されそうなのに楽しいわけないでしょ？

逃げたい？いいえ、全く。

じゃあ今私はどんな感情なんだろう・・・。

何も考えてなどいない！相手がどう行動するかをじっと観察している。

相手が銃を持っていない、多分、弾切れか、何か事情があるのだろう。

そんなことはどうでもいい。今は、相手が、ナイフしか持っていない。だから、私はそれによって私がこの戦いに「勝つ」確率は大きく上がった。

さあ、どう来るんだろう！そのナイフで、私を、殺してみせて！
もちろん、私も殺しにかかるからね！

美由紀は、またも不適な笑みを零す。そして、姿勢を低くする。

さあ、来い！！

同日 天貝家 本家 屋敷外

裏庭園

11時56分

やはり裏庭園は遠いな、と思いながら、ようやく正和は裏庭園にたどり着く。その有様は、ひどいものだった。雨や風のせいで、花達はボロボロになってしまっている。お昼頃に見たあの優雅な雰囲気は微塵も感じられない。だが、そんなことを悠長に考えてなどいられない！相手はまだついてきている。なにか音のようなものも聞こえる。

銃声だろうか？

正和は、そのまま信他の部屋で教えてもらった奥の森への入り口に入り込む。

なるほど、入り口とは言えないな・・・これは。ただ、人が通った形跡があるのがわかった。

正和は、もう少しだ、と自分に渴を入れて、そのまま走り出す。ガサガサ、と周りの枝や草を掻き分ける。風のせいで、中々前へ進むことが出来ない。それは、向こうも同じようだった。中々こつちに来ない。これは、もしかしたら自分の姿を確認できていないんじゃない

やないかと踏み、そのまま別の道を通る。案の定、全くついて来る気配がなくなつた。正和は、携帯を確認する。

「ち、やはり森の中心部に行かなきゃ駄目みたいだな。中継器でもあんのか？いや、中継器なんてものがあつたらここでも届いてるな・・。」

正和は、そのまま自分の信じる方向へ進んでいく。夜の森は危険なことを、重々理解してはいるものの、ここの森はそこまで大きくないことも知っている、というより、前に炎宿魔に聞いた。

ここの森は、10分くらい走っていると、すぐに森を出ることが出来る。それは、行き止まりが存在せず、天貝家、屋敷の敷地内だから、本物の森よりは随分と小さい。だから、出ようと思えば真つ直ぐ進めば出ることが出来るのだが、正和の目的は森を出ることではなく、森の中心部にたどり着くこと。森の中心部は、実はかなり小さく、見つけることは困難だ。それに、正和は、揺決理に教えてもらった道を逸れてしまった。つまり、この真つ暗な森の中、さらに暴風雨で自由に進むことも出来ない状況で、自力でその困難な森の中心部を見つけ出さなければいけないのだ。それに、見つければ殺されてしまう殺人鬼から逃れながら。

かなりヘビーな状況だが、それでも正和は諦めるわけにはいかない。「大人しく」待っているあいっらのためにも！

「大人しく」待つて居ろよ！

絶対に電話で助け呼ぶからな！

「お・と・な・し・く!」していてくれよ!

すぐに助けを呼ぶからな!

T o b e c o n t i n u e d

Part 14 A person to resist, a person

•
•
•
•
○

同日 天貝家 本家 屋敷

?????

11時43分

お互いに、間合いを詰めずににらみ合う。いや、黒服の男は覆面を被っているので睨んでいるかどうかは分からない。だが、美由紀をじつと見ていることはわかった。

「・・・・。」

相手は、（少し大きめのようだが、一般に手に入る普通のものようだ。）ナイフを右手に持ち左手は少し後ろに置いている。美由紀は、それだけで理解する。

この人は、訓練とかそういうものを受けていない普通の人だ、と。美由紀は、またもニヤリと笑う。いや、笑うなんてもんじゃない、嗤う・・・・の方が適切だ。端から見たらとても不気味な微笑だ。これだったら、もしかしたら・・・・美由紀は頭の中で、次にどうなるかを何通りもの未来を予想する。だが、相手が一般人に毛が生えた程度で、ナイフを持っているなら、あれしかない1つの「作戦」を考えた。美由紀は、更に腰を低くする。

バツとそのまま相手が駆け出す。
獲物を狙う豹のように・・・

とまではいかないが、姿勢を低くして、そのままナイフを水平に振り回している。

「くっ！」

美由紀は、それを木製の丸机（ちゃぶ台みたいなもの）でその攻撃を防いだ後、容赦なくテレビを振り回す。ブウン、という不気味な音を出している。とても風を切るなんて言葉は全く似合わない。相手はもちろん馬鹿だこいつ、とばかりに後ろに下がりそれをかわす。そして、そのまま突っ込んでくる。前に身を乗り出す・・・と言ったほうが妥当だ。

今度も、相手は水平に振りかぶる。

少し後ろに下がり、テレビを使って相手を脅しながら丸机で相手の攻撃を必死に防ぐ美由紀。少し押されているようにも見えるが、美由紀は額に少し汗をかいているだけで、顔は冷静なままだ。がた・・・

「、！？」

相手は、先ほどから美由紀が下がりながら足で何かしているのがわかった。ただ、あまりにも「どうでもいいこと」だったので。変に考えず、そのまま後ろに追い詰めていく。

「・・・う・・・」

美由紀は苦悶の表情を浮かべ、大きく2、3歩下がり、丸机を少し下に落としてしまう。落としたのではなく、傾けた・・・だろうか？相手はもちろん、その隙を狙ってくる。

相手はそのまま美由紀に向かって駆け出してくる。駆け出さなければいけないほど離れているわけではないので、すぐに追いつく。そしてそのまま水平に容赦なくなぎ払う！その瞬間、少量の鮮血が舞う！

「いやっ！」

テレビでガードしようするが、間に合わずに、美由紀の体を容赦なく傷つける！胸の辺りからへその辺りまでに血が滲む。命に別状は無さそうだが、それでも表情は厳しそうだ。

戦闘に慣れているわけでもないのに、苦戦は必至だ。今まで誰かと喧嘩などをしたこともない。誰かに襲われたなんて経験も全くない。（痴漢を撃退したことは何度かあったが。）なので、苦戦することもある。美由紀は理解しているみたいだ。

そう、美由紀は頭が悪いわけではないので、苦戦が必至なのは「理解」しているのだ。

相手は、美由紀が怯んでいる隙に、そのまま美由紀の体に、その鋭利な刃物を突きたてようとしている。だが、それを許す美由紀ではない。

美由紀はそのまま、テレビでガードする。

ガキッ、という鋭いような鈍いような音がした瞬間に、丸机とテレビを持ちながらそのまま四つん這い状態で離れる。少しは距離が取れたみたいだが、相手もそのまま逃すわけはなく、そのまま美由紀を追い、息の根を止めようと迫ってくる。お互いは、最早白兵戦と呼ぶに相応しい攻防だ。

そして、ナイフで「突き」刺そうと、そのまま刃先を美由紀に向けながら、容赦なく迫ってくる。

やっとだ、やっと来た！

美由紀は心の中でそう思った。

そう、美由紀が待っていたのは、相手が自分を「突き」刺そうとしてくること。

水平方向になぎ払ってばかりだったから、「これ」を行うことが出来なかった。水平になぎ払ったときのほうが対処はしやすいと言われているが、前記したように、美由紀は戦い慣れているわけではない。だから、自分が考えた自分なりの戦い方で責めていく！

美由紀は、四つん這いの状態から、這い上がるように立ち上がり、今度は自分からものすごいスピードで近づいていく。丸机を前に出し盾のように構えながら。相手は、美由紀がまさか自分に向かってくるとは思ってもいなかったようで、そのまま止まらずにナイフを

前に突っ込んでいく！

ガシ！！

相手のナイフは、その「木製」の丸机にナイフをくわえ込んだままの状態になった。すなわち、ナイフがその机を貫通したのだ。さすがに、美由紀に届くほどでもないが。

美由紀のさっきまでの苦悶の表情など、微塵も感じさせなかった。最早形成逆転とばかりに、今にも大笑いしそうな顔になっているのが、少し恐ろしい……。

相手は、一瞬だがナイフを抜こうとする。もちろん、美由紀はその瞬間の隙を見逃すわけがない！

そのままテレビをバゴつと頭にヒットさせる。女が小型のテレビを頭に当ててきただけじゃ、さすがに相手もそこまで怯まない。もちろん美由紀もそんなの計算済みだ！

そして、美由紀は丸机を投げる。

いや、正確には投げようとする。ナイフが刺さったままなので、相手は少しよろける。横に投げようとしているので、ナイフが抜け取れたりしなかった。

やはり、そうだ。

相手は何の訓練も受けていない、ナイフを持ったチンピラみたいなものだ。

なぜか？

それは、持っている凶器が「一番強い」と錯覚しているからだ。美由紀にとっては、何も持っていないく暴力を繰り出してくる奴らの

ほうが全然怖い。普通の人は、ナイフを持つと、それが一番「強い」と思い込み、それしか使わなくなる。それで攻撃すれば相手は深い傷を負う。それで攻撃すれば、相手は死ぬ。

そう思うからこそ、相手はそれだけで相手にダメージを与えようと躍起になる。だが、実際は、当たれば強いが、リーチはそこまで長くないし、そんなに強いものでもない。確かに簡単に傷を与えることは可能だ。だが、それは当たればの話。当たりにくいこの武器は、非常に使いにくい。そして、あまり使わない人にとっては、それしか使わなくなるので臨機応変も出来なくなるし、何より隙が出来やすくなる。

ナイフも使い、尚且つ開いている手も使って戦えば良いものを、そうしなくなるのは、争いなれていないからだ！いや、争いなれていても、いざ凶器を持つとそれが強いんだと勘違いするため、本当に強い人は、臨機応変が出来るものなのだ！そして、ナイフが強いのは、抵抗しない相手にだ。そう、

抵抗してくる相手にナイフ等、ただの白兵戦だ！ようするに当たらなければ互角！

美由紀ももちろん格闘技を習っているわけでも、争い慣れているわけでもない。ただ、映画やドラマを見ていて、追い詰められた、または争うシーンでナイフを持っていると、なぜかその人はそのナイフしか使わず、あるう事かナイフを両手に震えながら持つ者もいる。（まあ人を殺すのが怖い人は当然そうなっているだろう。）

だが、美由紀に言わせれば具の骨頂！

ナイフなんて幾らでも使い方があるというのに！

美由紀は、相手が少しよろけて瞬間に、またもがら空きになった鳩^{みそ}尾を、容赦なく、そしてまたもつま先で蹴りあげる！

相手は、少し唸り声を上げたが、そんなところで美由紀が終わるわけがない！そのままテレビを容赦なく後頭部に強打！さらにテレビの後頭部強打により、頭が少し下がったところを、またもつま先で

顔面を蹴り飛ばす！

まだまだ！とばかりに、相手がナイフを離してしまった瞬間に、少し頭が上がる！そこを美由紀は、容赦の「よ」の字もないぐらい豪快に、踵落しをお見舞いする。ローファーを履いている足で。

さすがにこれだけ食らえば、相手も怯まずおえない！相手はそのまま色々なところを抑えながら後ろに下がってしまう。

よし！

美由紀はそれでも手加減を与えるつもりはない！そして・・・

なんと、そのままテレビを相手の頭に向かって投げる！

ブンツ、と綺麗な放射線を描く。

相手も、霞む目で、あれに当たるわけにはいかない、と分かっているみたいだ。そのまま体を右に傾け、迫ってくるテレビをかわすが、

今度はその避けた顔のちょうど当たるところに、丸机がフリスビーのように、ぐるんぐると宙を舞ってるのが見えた。

そしてそのまま、相手の顔に丸机が当たる。

ボゴツという気持ちの悪い音の後、今度は先ほど美由紀が相手を殴るのに使ったガラス製の灰皿が、犯人の右足の脛すねに当たる。

これもかなりの激痛だ。相手はそのまま脛を押さえながら沈み込んでしまう。

これじゃあどつちが襲っているのか分からないな、あはは。

今度はすばやくテレビの置き台を相手に投げつける。それも首に当たって、不快感を抱く音が部屋中に響く。

相手はもう立ち上がることさえ出来なくなってしまうほど深手を負う。だが、最後の力を振り絞り、そいつは美由紀が投げたものの一部である、ガラス製の灰皿を勢いよく投げつける。美由紀は、まさか投げてくるとは思っていなかったのか、ハッとしてそれをギリギリ横に飛ぶようにして避ける。いつの間持っていたのだろうか？

美由紀はナイフを右手に持っていた。そのナイフは、刃の部分が人差し指と中指に刃先が犯人に向いて挟まれていたみたいだ。決まった！

美由紀は、横に飛んだ瞬間にそのナイフをダーツの如く、相手に刃先を向けて投げつける！

それは・・・上手い具合にそのままの状態で飛んでいき、太ももに突き刺さった！

「！！！！！！」最早相手は、それ以上動くことすらままならない状態だった。

ナイフが突き刺さった部分から、美由紀が先ほど受けたナイフの傷とは比べ物にならないほどの血が噴出してくる。相手は、乏しい知

識の中で、ナイフが刺さった後に抜いてはいけないということを理解しているの、そこを刺激せずに立ち上がろうとする。

男と女。

なんだか如何わしい言い方だが、男と女の場合どちらが手加減をするだろう？

そんなのは簡単な質問だ。

「男」ほうに決まっている。

女より男のほうが強い、そういう人間の誰しも持っている潜在的意識がそうさせている。(もちろん女にも手加減しないという残酷な人もいるだろうが、ほとんどの男が女に手加減するだろう。映画等でも、一番多く死ぬのは男が多いはずだ。例外はもちろんある。)

最初がそうだった。

美由紀を、後ろから足音を立てずに近づいてそのまま心臓部にナイフを突き立てれば、そのまま死んでいただろう。それが出来なかったのは、多分その「潜在的意識」が無意識に起こしてしまった結果だろう。

そんなもの！美由紀にそんな手加減なんてものが少しにでも使ったら、それこそ「窮鼠猫を噛む」だ！

美由紀は手加減などしないし、容赦なく殺そうと襲いこむ！相手に何を手加減する意味があるのだろう。

相手が女でも男でも、手加減なんて馬鹿馬鹿しい！美由紀はその考えかたを持っている。

ただ、美由紀はほんの前に薄らだが気がついた。相手は「男」だ。

近づいてすぐに気づく。

こんなごつい女がいるわけがないし、動きもどことなく男のような気がする……。

「

「はああああああ！」

美由紀が、相手に思いつきり近づいてき、そのままナイフをつま先で押すように蹴ると、ナイフが深々と刺さる。

「！！！！」必至に声を出さないようにしているものの、その痛みはかなりのものだ。

最早相手は、立ち上がることもすら出来ない。

勝負はもう、目に見えている……。

同日 天貝家 本家 屋敷

厨房

11時43分

「はあ……はあ……。」

何かがいる。

そう立向路は感じ取る。

間違いない。

この部屋に「何か」が潜んでいる。暗闇だが、何か潜んでいる「気配」がする。何か・・・だ。人間なのか？それとも・・・。

立向路は、どろどろになった生唾をぐくんと飲み込む。額に汗をかいていて、足が震えている。

犯人なのか？

わからない。

メルディオール？

わからない！

何かが潜んでいる気配を感じるのだが、何かが全くわからない。

「・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・う。」

立向路は、そのまま厨房で叫ぶ。そう・・・・・・叫んだ。

「お、お前は誰だ！お前が信他とおじい様と狩煉を殺したのか！お前は、誰だア！」

カラン・・・・・・・・。

「!？」

何か神秘的な音がする。神秘的？

鈴のようなものだが、何かがわからない……。

「静まれ、ばか者が。」

女の……声。

「!？その……声……そんな!？馬鹿な!」

「私の名くらい……知っているだろう……。」

どこから聞こえてくるのか……その女の声が、厨房に響き渡る。
立向路は、辺りを見渡すが、どこにも人影がないのを確認する。

「答えてみよ。私の名を……。」

「……メルディ……オール!」

気づく。メルディオールはすぐに気がつく。そう、「様」を付けていない事に。

いつもの立向路なら、メルディオール「様」といつていたはずなのだ。それが、今ではそのまま呼び捨てで吐き捨てるように答える。それは、立向路にとつて、宣戦布告のようなものだ！！

今まで恐れ敬っていた魔女に対しての、宣戦布告！文字どおり、命がけで。

[illegible][illegible]

「メルディオール……お前を、クロス！」

そして立向路は、近くにあった包丁を構える。だが、メルディオールは、再び笑い出す。

そんなもの、魔女に通じるわけない、とでも言っているのだろうか・
・・？

こんな魔女に、こんな・・・・魔女に！自分がひれ伏していたなんて・・・何が、何がいけなかったのだろうか。
自分のことを恥じる。

こんな馬鹿げた魔女に、僕が！

絶対に負けない。メルディオール。

お前は魔女でもなんでもない！ただの人間だ！

死ねえ！メルディオールウウウ！！！！

同日 天貝家 本家 屋敷

裏庭園 森内

午後11時57分

「はぁ・・・はぁ・・・。」

朦朧とする意識の中、正和は尚も森の中を彷徨っていた。雨のせいか、少し熱があるみたいだ。正和の顔色が悪い。それに、木に手をつきながら歩いている。正和の体力は、限界に達している。それも、正和自身も理解しているのだ。自分の体力が、底をつきかけているのだと。

だが、それが何だというのだろうか？とばかりに、正和を歩みを森の奥に向ける。

どうせ戻ったら、犯人に殺されるかもしれない。それに正和はまだ、役目を果たしていない。あいつらに大見得切って出てきた。これ以上怯えてあそこにいるよりは、早く電話をしてしまったほうが早いだろう。

つと、正和を腰を低くする。

あいつだ。

犯人だ。

かすかに人の気配を感じ取る。

正和は、この辺に「あいつ」がいることを、感じ取ったみたいだ。そのまましゃがみ込み、耳を済ませる。

ザー、という耳障りな雨の音以外、何も聞こえていないように感じたが、そうではないみたいだ。

足音も、聞こえる。

いや、聞こえるなんて確かなものではない。感じるといったほうが近い。

この大雨の中、他の音なんて、ほとんど聞こえない状態にも関わらず正和は見逃さずにそれに気がつく。

正和は、そのまま身を伏せながら、携帯電話を確認する。やはり圏外のままだ。

このままではどうすることも出来ない。

待つことが大嫌いで堪え性のない性格の正和は、少し離れたのを感じると、そのまま森の中心部へ走り出す。

ザクザクザク、という大きな音を立てながら、一直線に駆け出す。

相手が追ってきているかは、確認できないが、それをお構いなしに走り出す正和。本当に一直線なのか？自分は間違った方向に進んでいるのではないか・・・？

知るか！

心の中で、そのように感じながら一目散に自分が前だと信じる方向へ進む。

そのまま前へ、前へ！

グラ・・・。

「う・・・！」

一瞬、何かに目を捕られる。

何かが見えた・・・光？

どこかから光が・・・。

なんだ？

今一瞬、眩しい、と感じた。今は・・・一体！？

いつのまにか、方向感覚を失ってしまった。どこかに目印になるものがあるわけでもないのに、自分がどこから来たのかさえも、忘れてしまった。

しまった・・・。

だが、それでも、自分の前だと信じる方向に進む！間違っていたら戻ればいい！合っていることが嬉しいのだが・・・。

とにかく、立ち止まることが恐ろしかった。立ち止まって、自分の体力の限界が見えてくるのが、今の正和にとって一番怖い。

ひよっとして、どこかで倒れてしまうのではないか……。そう思うと、立ち止まりなくなる衝動に駆られるが、それでも、立ち止まっていたって状況がよくなるわけではない。なら、動いていたほうが、まだ自身が持てる。

これからどうなるのか・・・。

果たして、生き残れるのか？

この大雨は止むのか？

そして、犯人は・・・。

正和は、急に、恐怖が体を支配してしまうような感覚に陥る。そして、何度も何度も、自分の中で、こう呟く。

死にたくない・・・。

死にたくない・・・。

死にたく・・・ない・・・。

そんなことになっていても、正和は走るのをやめようとはしなかった。

そうして、やっと見つける。

森の中心部。

唯一の通話可能な、場所へ。

正和は、見つけたにも関わらずに、なぜか全く安心できないでいた。
・・・。

同日 天貝家 本家 屋敷

セキュリティルーム

11時46分

廊下はこんなにも長かったっけ？いや、長いのは知っているけどまさかこんなにも長いなんて、一度たりとも思ったことはない。

そんなことを思いながら、炎宿魔は揺決理に必至についていく。スレンダーで、運動神経がよさそうな揺決理は、予想を裏切らずに速さで廊下を駆け抜けていく。走るのに自身がある炎宿魔だったが、いつも上にいた姉には勝てない・・・。

いつもいつも上にいたお姉ちゃん。

勉強も、運動も、料理も、恋も。

全部、全部。

私は、そんなお姉ちゃんが大好きだった。

姉のことが・・・大好きで、大好きで・・・。

誇りだった。

私の、最高のお姉ちゃん。

たった一人の、お姉ちゃん。

たった一人の・・・肉親。

「炎宿魔！早く！」揺決理が、セキュリティルームの扉の前で、炎宿魔に向かって叫んでいた。炎宿魔は、ごめん！と言いながら姉と一緒に部屋に入っていく。

「え！？」

「な、なに・・・これ・・・？」

セキュリティルーム内は、先ほどいたときにはまるで別物のように感じた。

まず、第一印象はボロボロだ。
機材などが、全て壊れてしまっている。パソコンなんかは、放り投げられたかのように別の場所で放置されている。揺決理と炎宿魔

は、それを見てすぐにわかったことがある。

使い物にならない、だ。

そして、2人をもつと驚かしたのは、所持していた缶詰や、簡易な食料が、グチャグチャにされていたからだ。食べ物ではなく、まるで嘔吐物のように汚く、そこら辺に巻き散らかされている状態だ。炎宿魔は啞然としてしまつて動こうとしないが、揺決理はハツとしたように、監視カメラを確認する。

「ダメね・・・全く動かないわ。」

何度か操作をしてみるのが、見た目から、動かないことが明らかだ。いや、動いたとしても、画面がボロボロになつてしまつているため何の意味もない。揺決理は、焦り顔になり、そのまま廊下に出ようとする。だが、どこに行けば良いかがわからない。

この屋敷も、バカにでかいことは皆知つている。どこかで誰かが叫んでいたって、近くにいなければ気がつかない。それに、犯人と鉢合わせするかもしれない。

「ねえ、お姉ちゃん！このままじゃ！」

炎宿魔は、今すぐにでも探しに行こうと提案するが、揺決理がそれを却下する。妹を守りきらなければいけないという感情が、そうさせているようだ。

揺決理は、自分の中の葛藤と、必至に戦っている。

妹を守らなければいけないのはわかるが、だからといって立向路と美由紀さんと盛多さんを犠牲に・・・。

「ん・・・。」

揺決理は、あごに人差し指と親指を添えて、何かを思案している。こうしている間にも、3人がどうなつているかが確認できない。自分はどうすればいいのか？探せば？逃げれば？それとも立ち向かえば？

立ち向かうって言つたって、相手は銃を持っているのに！？

そんなの、絶対に勝てっこない！
まず、勝負にすらならない……と思う。

「……………」

「お姉ちゃん！」
「……………」

そして、揺決理は、炎宿魔をじっと見つめる。両肩に自分の手を置いて顔を近づける。

「何があっても、私は、炎宿魔。あなたを守るわ。だから、私の側から離れないで。絶対よ。」

手に力が入る。

炎宿魔は、少し肩の痛みを感じるも、それが姉が私のことを思ってくれているんだということが強く理解し、胸の中が燻くすぶったような熱さがこみ上げてきた。

燻くすぶったと言っても、嫌なものではない。とても心地の良いものだった。

炎宿魔は、コク、と強くうなづく。そして、姉を抱きしめる。

首筋に、姉の自慢である手入れが入念に施された長い髪が当たって、少しくすぐったかった。

揺決理は、炎宿魔を強く抱きしめると、2人で手を繋ぐ。

「絶対だからね！わかってるわよね！」「うん！」

わかってる。

自分が助かりたいのなら、この部屋に隠れていればいい、と。

わかってる。

妹を守りたいならこの部屋にいればいいと。

わかってる。

所詮他人、放っておけばいいということを。

全て、わかってる。

わかってる。

そのメリットを全てわかっていて、その気楽さも全てわかっている。

わかっていながら、それを否定する。

その一番近くにある選択肢を選ばない！

炎宿魔……。

ごめんね、バカな姉で。

あなたをこの部屋に置いておけばいいのに、私はそれを選ばなかった。

あなたと離れるのが、怖かった。

一度味わって知ったから。あなたが、わたしにとってどれほどの大きな存在かを。

私は、あなたを守る。

この部屋に置いてしまえば、その間に犯人が殺しに来るかもしれない。

ああああ！もうめんどくさい！そんなこともうどうでもいい！とにかく！

「炎宿魔、ちゃんと付いて来てちょうだいね！」「もちろん！」
そうして2人は走り出す。

立向路と別れた廊下へ。

無駄なことを。

同日 天貝家 本家 屋敷

?????

11時46分

「ふう。」

相手は、ナイフが突き刺さった部分を押さえながら、苦悶の声を上げていた。美由紀はそれを、まるで汚らしい物を見るような目で一瞥する。そして、そいつに近づいていく。

もう勝負はついている。あれだけ深手を負えば、相手だって怯むほかない。

美由紀はそう思っていた。

「くっ！」「えっ！？」

だが、相手はそのままナイフを引き抜くと、再び構えだした。

あんなに深々と突き刺さっていたにも関わらず、それを一瞬で引き抜いたのだ。多分激痛が走っただろう。その部位から、血が大量に出ている。だが、相手は美由紀を睨むと、再び向かってくる。もうそれは、突っ込んでくるなんてものではない。

ひよろひよろと、少し距離がある美由紀のもとに迫ってくる。

馬鹿馬鹿しい、とばかりに一瞥すると、そのまま声を上げた。

「ねえ。今気がついたんだけど・・・あなた・・・もしかして・・・」

そこで美由紀は気づく。

相手も私と同じ事をしようとしているんだと！

「あー！」

気づいてももう遅い！相手はナイフをそのまま投げる。ヒュン、という音を立てて、真っ直ぐ美由紀の方向にナイフが飛来する。だが、美由紀が投げたときのように、刃先が真っ直ぐ迫ってくるわけではなく、くるくると円を描くように回りながら迫ってくる。

美由紀は、それを手で防ぐ。

少し傷がついたが、そんなものお構いなしだ。続いて、相手は美由紀が投げたガラス製の灰皿を構えて、美由紀に投げつけようとする。「くー！この・・・トーシロがあああああああああ！」「いや、

あなたもトーシロですよね？

美由紀は、横に寝そべるように「置いてある」「ベッドに勢いよく飛び込む。そして、そのベッドからせーの！と言いながら相手に飛びつく！足から！

「グっ！」

「え！？」

相手は、美由紀の足が顔面に当たり、怯んでいるみたいだった。いや、怯むというより、倒れてしまった。完全にノックアウトだ。

「……………」

納得いかない。美由紀はそういう感じの顔をする。

「え！？」

美由紀は、相手が倒れている方向を向く。

そんな！なんで！

どーしてよ！！！！

ふと、美由紀は正和が言った言葉を頭の中で反芻する。

「いいか、銃を持っている相手に立ち向かうなんてこと絶対にするなよ！」

ごめんなさい、正和さん…………約束、破りました。

炎宿魔さん…………ごめんね。まだ、約束、果たしてないよね…………ごめん…………

ごめん・・・ごめ

乾いた音がする。

雨によって、外には聞こえることはなかった。

不思議なことに、屋敷にも全く響くことはなかった。あんなにも奮闘したのに、あんなにも必至に戦った彼女の最後が、こんな音で終わりなんて、あまりにも理不尽すぎる。

彼女の死体は、無残にも引き裂かれてしまった。

脱落者↳櫻田 美由紀↳

目撃者↳現状ではなし、後に天貝 炎宿魔、天貝 揺決理、寺田 正和が目撃↳

午後11時48分

推定死因↳拳銃による心臓への射撃。一発で瀕死した模様だが、数分間生きていた可能性がある。（現場の状況より）↳

永遠に地獄でもがいているがいい。お前みたいな偽善者が嫌いなんだよ、僕は。

あああああ・・・いらいらする・・・グチャグチャニコロシテヤレバヨカッタナ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1340g/>

破かれた絆 - First message of die -

2010年12月14日16時03分発行